

---

# ガンダム合戦伝

・年戦争からデラース紛争まで

株式会社レッカ社 編著



PHP 文庫

---

本表紙図柄「ロゼンタ・ストーン」(大英博物館蔵)  
本表紙デザイン+紋章 上田晃郷



はじめに

## 兵士たちの 戦闘物語でもあるガンダム

ガンダムはいわずと知れた、戦争を描いたアニメです。

作品的には、主人公がいち兵士のパイロットで、モビルスーツ戦がメインとなり、そのため「戦闘Ⅱガンダム」ともいえます。

これら戦闘は、モビルスーツの性能、パイロットの技量、シチュエーションなどが相まって、数多くの名勝負や心に残る戦いを生み出します。

# BATTLE

そして、それらの戦いに我々は、シリーズを通して魅了されつづけています。

そこで本書は、『機動戦士ガンダム』『機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争』『機動戦士ガンダム第08MS小隊』『機動戦士ガンダム MS-IGLOO—1年戦争秘録—』『機動戦士ガンダム MS-IGLOO—黙示録0079—』『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』の『宇宙世紀6作品』をとりあげ、代表的な戦闘を紹介しています。

兵士たちの戦いを改めて知り、ガンダムの戦闘の魅力を再発見していただけたら幸いです。

株式会社レッカ社 斉藤秀夫

はじめに

## 第1章

### 機動戦士ガンダム

ガンダムの性能を見せつけた史上初のモビルスーツ戦

ガンダム VS. ザク

14

深い因縁で結はれるふたりが初めて激突した宇宙戦

ガンダム VS. シヤア専用ザク

20

前例のない大気圏突入直前の戦闘

ガンダム VS. シヤア専用ザク

24

アムロ・レイがあみ出した、驚きの空中戦法

ガンダム VS. ドップ部隊

28

若き貴公子、怒りの突攻

ホワイトベース隊 VS. ガウ部隊

32

新型モビルスーツと新たな強敵の出現

ガンダム VS. グフ

36

若きシオン兵たちの生身の強襲

ガンダム VS. ワツパ

40

思いを暴走させたセイラ・マスの出撃

ガンダム VS. ザク

44

すべてを焼きつくす高熱電磁波の恐怖

ガンダム VS. アツザム

48

ホワイトベース隊を震撼させた戦争屋の意地

ガンダム VS. グフ

52

悲しみのクラウレ・ハモン、玉砕覚悟の鎧戦法

ガンダム VS. マゼラ・トップ ————— 56

伝説の小隊「黒い三連星」の脅威

ガンダム VS. ドム（黒い三連星） ————— 60

北海で猛威を振るう水陸両用モビルスーツ

ガンダム VS. ゴツグ ————— 64

コンビンエーション攻撃で新型モビルスーツを撃破

ガンダム部隊 VS. ズゴック ————— 68

水中から強襲する巨大な魔手

ガンダム VS. グラブロ ————— 72

赤い彗星のシヤア、再び

ガンダム VS. シヤア専用ズゴック ————— 76

巨大クローをもつスピートスターの恐怖

ガンダム VS. ビグロ ————— 80

キャメル艦隊を殲滅したガンタムの奇襲

ガンダム VS. キャメル艦隊 ————— 84

敵をまったく寄せつけない圧倒的技量の差

ガンダム VS. リック・ドム ————— 88

ソロモンの守護神に立ち向かうふたりの戦士

Gアーマー VS. ビグ・ザム ————— 92

戦略家マ・クベの罠と三つ巴の戦い

ガンダム VS. ギヤン ————— 98

赤い彗星を超えたアムロ・レイの覚醒

ガンダム VS. シヤア専用ゲルググ ————— 102

縦横無尽に走るビームの閃光

## ガンダムVS.ブラウ・ブロ

106

最強のニュータイプといわれたふたりの運命的戦い

## ガンダムVS.エルメス

110

宿命のライバルが迎えた最終決戦

## ガンダムVS.ジオング

114

## 第2章

機動戦士ガンダム

## 0080 ポケットの中の戦争

ニュータイプ用ガンダム破壊の命を受けた特務部隊

## サイクロプス隊VS.ジム部隊

124

夜の街を赤く染めた、ガンダムと蒼き闘士の死闘

## アレックスVS.ケンプファー

128

壮絶な相打ちで大金星をあげた新兵の戦い

## アレックスVS.ザク改

132

## 第3章

機動戦士ガンダム

## 第08MS小隊

非力な戦闘ホッドでモビルスーツに立ち向かった勇者

## ボールK型VS.高機動型ザク

140

熱砂のなかで展開された巨大モビルアーマー捕縛作戦

## 第08MS小隊VS.アプサラスII

144



ジオン兵を驚愕させたゲリラのミサイル攻撃

第08MS小隊VS. トップ隊 148

震と心理戦を駆使した華麗なる足止め

第08MS小隊VS. マゼラ・アタック 154

サハリン家の武人と熱血隊長のフライドを懸けた戦い

第08MS小隊VS. グフ・カスタム 158

恐るべき巨大兵器を止めた玉砕戦法

ガンダムEz8 VS. アプサラスⅢ 162

## 第4章

機動戦士ガンダム

MS IGLOO — 1年戦争秘録 —

大艦巨砲主義時代の終焉を告げる 大蛇の咆哮

ヨルムンガンドVS. マゼラン 170

捨て駒にされた男が見せた驚異の戦車操縦術

ヒルドルフVS. ザク 174

モビルスーツ開発競争に敗れたゴーストファイターの悲劇

ヅダVS. ジム部隊 178

## 第5章

機動戦士ガンダム

MS IGLOO — 黙示録0079 —

大気圏落下中に敵を攻撃する、究極の捨て駒兵器

ゼーゴックVS. 地球連邦軍艦隊 186

急造兵器で立ち向かう年少兵の勇敢なる戦い

オッゴ部隊VS.ボール部隊

190

悲しみの技術中尉、髯級モビルアーマーで激闘

ビグ・ラングVS.地球連邦軍部隊

194

第6章

機動戦士ガンダム

0083 STARDUST MEMORY

ソロモンの悪夢に挑んだ新米テストパイロット

ガンダム試作1号機VS.ガンダム試作2号機

202

歴戦の知将同士の読み合いとなった部隊戦

アルビオン部隊VS.キンバライト部隊

206

歴戦の女戦士、シーマ・ガラハウの強襲

ガンダム VS. シーマ専用

210

試作1号機 VS. ゲルググM

己の実力を知らしめるべくカンダムに挑んだ隻腕ファイター

ガンダム試作1号機

VS. ヴアル・ヴァロ

214

フルバーニアン

地球連邦軍に壊滅的ダメージを与えたソロモンの悪夢の一撃

ガンダム

VS. 地球連邦軍艦隊

218

試作2号機

死闘を繰り返す兄弟ガンダム

ガンダム試作1号機 VS. ガンダム

222

フルバーニアン VS. 試作2号機

# CONTENTS

圧倒的戦闘力をもつモビルアーマー同士の戦い

ガンダム

試作3号機

VS. ノイエ・ジール

228

宿敵ふたりがのそんた最後の決闘

ガンダム

試作3号機

VS. ノイエ・ジール

232

## COLUMN

機動戦士ガンダム 合戦総括

伝説となった

ニュータイプ部隊の戦い

120

機動戦士ガンダム0080 ホケットの戦争 合戦総括

ニュータイプ用ガンダムが生んだ

皮肉な結末

136

機動戦士ガンダム 第08MS小隊 合戦総括

「小隊」という視点から描かれた

泥臭い局地戦

166

機動戦士ガンダム

MS I G L O O 1年戦争秘録 合戦総括

活躍の場を奪われた

兵器とパイロットの悲哀

182

機動戦士ガンダム

MS I G L O O 黙示録0079 合戦総括

急造品という時代の徒花に宿った、

人間の深き思い

198

機動戦士ガンダム

0083 STARDUST MEMORY 合戦総括

地球連邦軍が黙認することで起こったデラース紛争

236

第1章

機動戦士

ガンダム

BATTLE

増えすぎた人類を、地球の軌道にうかぶスペース・コロニーに移住させるようになって百年近く過ぎた時代。

スペース・コロニー「サイド3」はジオン公国を名乗り、地球連邦政府に独立戦争をしかけた。

あまりの国力の違いから、誰もが、この戦いはジオン公国がすぐに敗けると思っていた。だが、ジオン軍は新兵器「モビルスーツ」の力によって地球連邦軍を緒戦で圧倒してしまう。

戦争が膠着状態になってから半年あまり、連邦軍はモビルスーツ「ガンダム」とその搭載艦、強襲揚陸艦「ホワイトベース」を開発する。

だが、その新兵器は民間人のアムロ・レイや、十分な軍歴もないブライト・ノアなどの少年たちによって運用されることとなった。

## Phraseology

### ■ スペース・コロニー

ラグランジェ・ポイントと呼ばれる、地球と月などとの重力が釣り合う空間に浮かぶ、巨大な人工都市。円柱形をしており、自転による遠心力を重力代わりにし、その内壁を地面として暮らす。ジオン公国のものは古い閉鎖型で、内部は人工照明で照らされている。物語の発端となる建造中のスペース・コロニー「サイド7」は開放型で、本体から伸びた羽状の部分にある鏡に反射させた太陽光線で、壁面のガラス越しに内部を照らす。

### ■ モビルスーツ

全高20メートル弱の人型機動兵器。より大型、大出力で、人型をしていない「モビルアーマー」と呼ばれるものもある。

### ■ レビル將軍

地球連邦軍の指導的立場にいる軍人。ホワイトベースに救いの手を差し伸べる。

### ■ ザビ家

ジオン公国を独裁的に支配している一族。父親、デキン・ソド・ザビが公王だが、事実上の支配者は長兄のギレン・ザビ。妹キシリア・ザビは突撃機動軍司令官、弟のドズル・ザビは宇宙攻撃軍司令官。またガルマ・ザビは地球方面軍司令。

### ■ ニュータイプ

人が宇宙に進出したことで新たに生まれた人類。宇宙という広大な空間に適応することで認識力が拡大し、並外れた直観力や空間認識力などを身につけている。

ガンダムの性能を見せつけた史上初のモビルスーツ戦

# ガンダムVS.ザク

■ ホワイトベースを追跡して、3機のザクがサイド7に侵入

ジオン公国が地球連邦政府に独立戦争をしかけてから8ヶ月。戦いの初期では、ジオン公国軍は新型の人型機動兵器、モビルスーツ「ザク」の力で連邦軍を圧倒していた。だが、ジオン軍の国力は地球連邦軍にくらべて30分の1以下と少なく、連邦軍もまた、ジオン軍のモビルスーツに対抗しうる兵器を投入できずにいた。その結果、戦争は長い膠着状態をむかえていた。

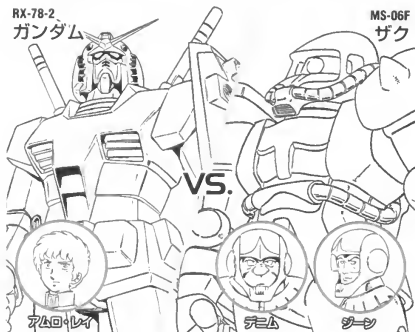
そんななか、当時は新造戦艦と呼ばれていた連邦軍の強襲揚陸艦「ホワイトベース」が、建設途上にあったスペース・コロニー「サイド7」に入港してきた。

このホワイトベースこそ、連邦軍が開発に成功したモビルスーツを運用するため  
の専用艦であった。そして「V作戦」（モビルスーツとモビルスーツ運用艦の開発）に  
従って、サイド7で開発された連邦軍のモビルスーツ、「ガンダム」「ガンキャノン」

## 第1話

### 「ガンダム大地に立つ」

スペース・コロニー「サイド7」に入港した地球連邦軍の新艦隊を追って、コロニー内に潜入したザク。コロニーは戦火につつまれる。



「ガンタンク」を受け取ろうとしていた。

だが、ホワイトベースは、ジオン軍の軽巡洋艦「ファルメル」の追跡を振り切れないままだった。そのため、サイド7には軍艦が入港するというだけの理由で、警報のサイレンが鳴り響き、住民には避難命令が出されていた。

しかし時すでに遅く、サイド7にはファルメルから密かに発進していた3機のザクが取りついていた。

ザク部隊の指揮をとるのはデニム、随伴する部下は、スレンダーと新兵のジーンのふたりだった。サイド7へ潜入した3機のザクは、そのままスペース・コロニーの内部へ進

んでいく。

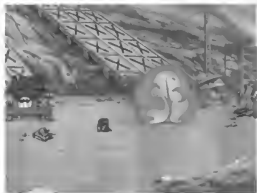
今回の任務はあくまで偵察であり、デニムはスレNDERを連絡要員として残して、ジーンと2機で内部へと進んだ。

スペース・コロニー内部の森林に隠れたふたりは、ザクのコクピットから出ると、双眼鏡で偵察をはじめめる。そして、連邦軍が開発したモビルスーツを見た。

「これを撃破すれば大きな手柄となるに違いない」。そう考えたジーンは、偵察が目的だと止めるデニムの命令を無視し、単身ザクで攻撃をはじめた。やむをえず、デニムも攻撃に参加し、有線ミサイル車などを出して反撃する連邦軍を蹴散らしていく。

パイロットがいない状態の新型モビルスーツも、部品のまま、ザク・マシンガンの攻撃により破壊されていった。

そんななか、危険を感じたサイド7に住む少年アムロ・レイは、退避カプセルから出て、軍属の父テム・レイに市民の避難を頼もうとする。だがそこは戦場の真っ



たった2機のザクにより、コロニーは地獄絵図の戦場に。これがモビルスーツの力だ。





アムロがガンダムを起動させたとき、胸の排気ダクトからはあふれんばかりの熱気が排出された。

ただなかであり、アムロは爆風に飛ばされてしまう。そこで偶然、軍事機密であるガンダムのマニュアルを拾ったアムロは、戦いのなかであることも忘れ、それを食いつくように読み続ける。そして、やっと父と出会ったアムロだったが、入港していたホワイトベースに非難しろ、といわれる。しかし、そのときジーンの攻撃が避難中の市民を吹き飛ばした。

そこに駆け寄ったアムロが見たのは、知り合いをふくめた多くの犠牲者と、たまに助かった幼なじみの少女、フラウ・ポウが泣き叫ぶ姿だった。

フラウを助けなければと決意したアムロは、怒りを胸にガンダムに乗りこみ、戦うことを決意する。

### ■史上初のモビルスーツ戦

アムロはマニュアルを片手に、トレイラーに横たわっていたガンダムに乗りこむ。ほぼ同時に、トレイラーのガンダムに気づいたジーンが、ザク・マシンガンで狙いをつけてきた。

あせったアムロが思わず引きがねを引くと、ガン

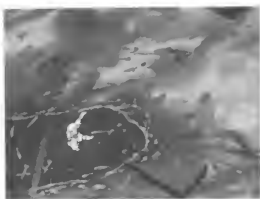
ダムの頭部のバルカン砲が発射される。

動くモビルスーツがいたことにジーンは驚くが、ただちにザク・マシンガンを発射する。だが、ガンダムの装甲はその直撃に平然と耐え抜いた。そして、ガンダムは立ち上がると、そのままバルカンを放ちながらザクにせまっていくな。

その単調な攻撃は見切られ、バルカン砲はザクに命中しないまま弾は尽き、アムロは恐怖を覚える。

それを見て取ったジーンは、空元気をふりしほりガンダムに肉薄してザク・マシンガンを叩きこもうとする。だが、アムロが行ったとつさの操作で、ジーンのザクの手はやすやすとはらいのけられ、さらには口の動力パイプを引きちぎられてしまう。その様を見てデニムは、「あれが連邦軍のモビルスーツの威力なのか！」と驚愕。何とか動けるジーンのザクを、戦闘から離脱させようとする。

まだガンダムの操作に慣れないアムロだったが、逃がしてなるものかと、バルカン砲以外の武器を調べ、コンソールモニターに表示された剣に気づく。  
ジャンプで逃げ出そうとするジーンのザク。しかしアムロは、新しく見つけた武



ジーンのザクの大爆発によりコロニーに開いた穴からは、多くの人や物が宇宙空間に吸い出された。



シャアはこのとき、「認めたくないものだな。自分自身の若さゆえの過ちというものを」とつぶやいた。

器、ビーム・サーベルを片手に、ジーン機を追う。「逃がすものか!」。アムロの叫びと同時に、ジーンのザクは真つぷたつに斬り裂かれた。

その行為は核融合エンジンを破壊することにもつながり、同時にすさまじい爆発が巻き起こって、コロニーの外壁を貫通する大穴を開けてしまう。

自分が引き起こした大惨事に驚くアムロだったが、そこに部下を殺されて怒りに燃えるデニムのザクがせまる。「どうする、コクピットだけ狙えるのか?」と悩むアムロだったが、戦う以外の道は残されていない。

ガンダムは、ゆっくりとビーム・サーベルを構えた。そこにデニムのザクが真つ正面から飛びかかってくる。

勝負は、瞬でついた。ガンダムのビーム・サーベルはザクのコクピットを貫き、そのビームが細く消えていくと同時にデニムのザクは崩れ落ちた。

かくして、史上初のモビルスーツ同士の戦いは幕を下ろした。しかも、2機のモビルスーツを相手に1機のモビルスーツが圧勝するという、過去例を見ない結果となった。

深い因縁で結ばれるふたりが初めて激突した宇宙戦

# ガンダムVS.シャア専用ザク

■シャア・アズナブル率いる生身の部隊がゲリラ的偵察をしかける

デニムひきいる3機のザクによっても、地球連邦軍のモビルスーツ開発計画「V作戦」のデータは手に入らなかった。

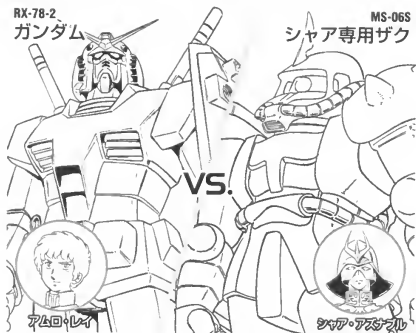
その秘密を追っていたジオン公国軍のシャア・アズナブルは、その開発現場であるスペース・コロニー「サイド7」に、数名の部下を率いてノーマルスーツ（宇宙服）で潜入する。

民間人ながら、「ガンダム」のパイロットをさせられることとなったアムロ・レイは、残されていた部品を処分するように命じられていた。そこでジオン軍の少佐、シャア・アズナブルの姿を目撃する。

わずかな隙をついたシャアは、強襲揚陸艦「ホワイトベース」の停泊している港を通じて宇宙へと脱出をはかるが、その途中で調査した写真をカメラごと失ってし

## 第2話 「ガンダム破壊命令」

地球連邦軍のモビルスーツを探ろうとスペース・コロニー「サイド7」に潜入・脱出したシャア・アズナブルは、「ガンダム」と戦う。



まう。

一方、アムロはガンダムで宇宙へ出ると、脱出するシャアたちジオン兵をビーム・ライフルで撃とうとする。しかし、生身の相手を撃ち殺す行為に抵抗感を感じたアムロは命中させることができなかった。

作戦の失敗を知ったシャアは、軽巡洋艦「ファルメル」に残した副官ドレンに自分のザクを放出するように命令する。同時にホワイトベースも出航するが、そこにファルメルから放たれたミサイルが飛来する。

ホワイトベースの一同に緊張が走るが、相手が人間でなければと、アムロはミサイルをビーム・ライフルで迎撃する。

その隙にザクに乗りこんだシヤアとスレンダーが近づいてきていた。通常の3倍のスピードで接近してくる「赤い彗星のシヤア」

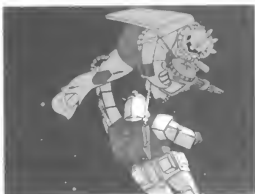
ホワイトベースの艦長パオロ・カシアスは、「逃げる」と命令するのだった。

## ■「赤い彗星」対高性能モビルスーツ

「見せてもらおうか。連邦のモビルスーツの性能とやらを」と、アムロたちをあざ笑うかのように、赤いザクで急速にせまり来るシヤア。

「相手がザクなら人間じゃないんだ」と自らを奮い立たせたアムロは、ブライト・ノアの命令を無視してザクを狙い撃とうとする。だがスコープに捕らえたはずの赤いザクは一瞬で視界から消え、激しい衝撃を受ける。すばやく避けたシヤアのザクが撃ちこんだザク・マシンガンの攻撃だ。しかし直撃にも平気なガンダムに、シヤアのほうが驚かされていた。

アムロはビーム・ライフルを乱射するが、初めての本格的な戦いに動揺して、なかなか命中させることができない。



すばやい動きのシヤアのザクに、アムロは接近戦を試みる。だが、軽々と避けられてしまう。



たった一撃でザクを撃破したガンダムのビーム・ライフル。シャアは「戦艦並のビーム砲」と驚いた。

それを見てとったシャアは接近を試みるが、ガンダムのすばやい動きによって近づくことができない。一方「当たらなければ、どうということはない」と、うそぶくシャア。

さらには、シャアに随伴するスレンダーがガンダムにザク・マシンガン（メカニック）を雨霰と浴びせるがびくともしない。逆にシャアのザク・マシンガンの連射ものともせず、近づくガンダムから、パンチ攻撃を受け、あやういところでよける。

そんななか、リュウ・ホセイの小型戦闘機「コア・ファイター」がシャアのザクを牽制する。その隙に、アムロはもう一機のザクに狙いを定めてビーム・ライフルを放つ。

スレンダーのザクは、発のビーム・ライフルに貫かれ大爆発を起こした。シャアはもちろん、撃つたアムロ自身もあまりの威力に驚いていた。

そして、ビームのエネルギーが尽きたガンダムと、火力の格段の違いに作戦を練り直す必要を感じたシャア。双方は痛み分けのかたちで退却していくのだった。

# ガンダムVS.シヤア専用ザク

## 第5話 「大気圏突入」

地球へ降りようとする強襲掃陸艦「ホワイトベース」。大気圏突入のタイミングを狙い、シヤア・アズナブルは攻撃をしかける。

### ■大気圏突入行動の2分の隙をシヤア・アズナブルが突く

南米の地球連邦軍本部「ジャブロー」へ向かうため、強襲掃陸艦「ホワイトベース」は、大気圏への降下軌道に乗っていた。

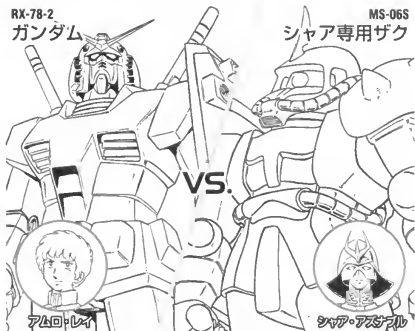
一方、ホワイトベースを追っていたシヤア・アズナブルの軽巡洋艦「ファルメル」に、「ザク」が3機補給された。シヤアはこの機会をチャンスと考えていた。

なぜなら敵は、大気圏突入のために全神経を集中し、間違ひなく油断しているからだ。その隙を突くため、シヤアは3機のザクを率いて出撃することとなった。

一方、ホワイトベース内で「ガンダム」に乗りこんでいたアムロ・レイにも敵の来襲が知らされた。オペレーターのセイラ・マスから「高度には注意してね」と、注意事項が伝えられる。

戦闘中にそんなことができるかと反発を覚えるアムロだったが、しぶしぶ出撃す





る。

ファルメルからは、ドレンたちを乗せた大気圏突入カプセル「コムサイ」が発進。シャアのザク部隊の援護のためファルメルからミサイルが放たれ、戦端は開かれた。

### ■突入のタイムリミットがせまる

ガンダムにハイパー・バズーカを持たせて出撃したアムロは、今度こそはと、シャアに次々とバズーカを放つ。だがそれは簡単に避けられ、その隙にホワイトベースに近づいたザクが攻撃をはじめた。

あせったアムロは、たちまちバズーカを撃ち尽くし、代わりの武器として、ガンダム・ハンマーが送られ

ることとなった。

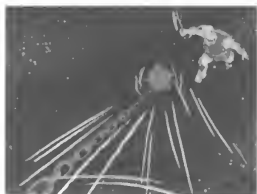
そのときジェイキューのザクが近づくが、アムロはバルカンで反撃し、それを撃破する。

戦闘がつづくなか、アムロにガンダム・ハンマーが撃ち出されてくる。それを邪魔せんとシャアは専用ザクで近づくが、間髪でガンダムはハンマーを手にし、シャアはザク・バズーカの弾を撃ちつくす。

シャアは体勢を立て直すよう、残る2機のザクに命じる。無傷なクラウンの機体にホワイトベースの攻撃をまかせ、右手の動かないコムは、シャアとともにガンダムの攻撃に向かう。

シャアの専用ザクは正面からガンダムに挑み、その影からコムは、ヒート・ホークを手にせまる。

シャアに気をとられていたアムロは、コムとの接近を許してしまう。だが、恐怖にかられたアムロは、ガンダム・ハンマーを振り回すことによって、コムはザクを吹き飛ばすことに成功する。コムはザクがやられたことで怒りに震える。シャアは、専用ザクでガンダムに肉弾戦を挑むが、そのときすでに大気圏突入のタイムリミット



シャア専用ザクは、ガンダム・ハンマーの攻撃をさげつつ、ヒート・ホークで攻撃をくわえていく。



大気圏突入にすら耐えるガンダムの高性能。それはシャアだけではなく、味方にとっても驚きだった。

が近づいていた。

気づいたシャアは部下に帰投を命じ、一方、アムロもセイラからその知らせを受け、ホワイトベースに戻ろうとする。

だが、バルカンの弾が残っている、とアムロは、クラウンのザクに最後の攻撃をくわえる。その攻撃のせいでアムロのガンダムは、タイムリミットを過ぎてしまうのだった。

攻撃を受けたクラウンのザクは、そのまま大気圏へと突入。重力落下の猛烈な摩擦熱により、燃え尽きる。助けを叫ぶクラウンの声を聞きながら、ガンダムを道連れにできたと思い込んだシャアは「むだ死にはないぞ」とクラウンを称える。

しかし、そのときアムロは必死にマニュアルをめぐって、ガンダムが耐熱フィルム（劇場版では、耐熱フィルムド）で大気圏突破できることを知り得た。

そして大気圏突入中のコムサイのなかで、ガンダムの無事に気づいたシャアは、その恐るべき性能に驚きを隠せないでいた。

アムロ・レイがあみ出した、驚きの空中戦法

# ガンダム VS. ドップ部隊

## ■疲弊するホワイトベースに、ガルマ・ザビがせまる

強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、疲れ果てながらジオン公国軍勢力下の地上をさまよっていた。シャア・アズナブルの作戦にはまり、地球方面軍司令ガルマ・ザビの支配地域に降下してしまったためだ。

孤立したまま敵地をさまよう毎日。そんななか、本戦の軍人ではないアムロ・レイは、とりわけ疲れ果てていた。

一方、小型戦闘機「コア・ファイター」で偵察にでたリュウ・ホセイとハヤト・コバヤシは、逆にジオン軍の戦闘機「ドップ」と「ガウ」攻撃空母の部隊を呼び寄せてしまう。

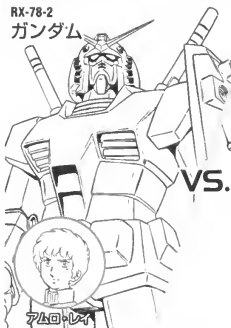
帰還したリュウとハヤトのコア・ファイターは、「ガンキャノン」「ガンタンク」に換装され、カイ・シデンはガンキャノンで、リュウとハヤトはガンタンクで出撃す

### 第9話 「翔べ! ガンダム」

ジオン公国軍勢力下の地上をさまよう強襲揚陸艦「ホワイトベース」に、戦闘機「ドップ」部隊を率いるガルマ・ザビがせまる。

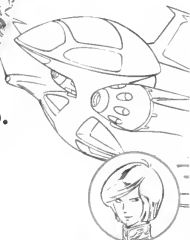
RX-78-2

ガンダム



アムロ・レイ

ガルマ専用ドップ



ガルマ・ザビ

VS.

る。ちょうどそこにガルマ率いるドップ隊がやってくる。

ホワイトベースは弾幕を張り応戦するが、出撃したガンキャノンとガンタンクは陸戦兵器であるため、航空部隊相手にうまく戦えない。

にもかかわらず出撃してこない「ガンダム」。それを見たガルマは、ガンダムが不調なのだと思いこむ。そして、シャアに手を出さずに見ているように通信し、激しい攻撃をくわえるのだった。

## ■ 宙に舞うガンダム

一方、疲れ果てているアムロ・レイは、ブライト・ノアの出撃命令に反発し、部屋に引きこもっていた。

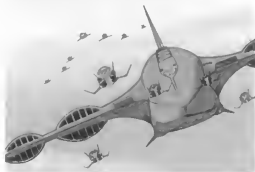
アムロはブライトに殴られても出撃しようと思せず、それを見ていた幼なじみのフラウ・ボウが、「あたし、ガンダムに乗るわ!」とまで言いだす。

このフラウの言葉にアムロは奮起し、「くやしいけど、僕は男なんだな」と、ガンダムに向かった。

ガルマがホワイトベースの左エンジンを集中的に攻撃しているなか、アムロは「試したい戦い方があります」と告げ、ハイパー・バズーカを装備したガンダムで出撃する。

出撃したガンダムは、ジャンプ力とロケット・ノズルの力で、高々と宙に舞った。「モビルスーツが飛んだ!」と、驚きの声をあげるドップのパイロットを、ガンダムのハイパー・バズーカが襲う。

それを見たブライトは無線を解除すると、ガンタンクとガンキャノンにガンダムの援護をするよう命令する。ガンダムがジャンプや着陸の隙を狙われないようにするためだ。そんななか、アムロは冷静にジャンプと射撃を繰り返し、次々とドップを落としていく。



ガルマ率いる一大空中戦力。応ずるホワイトベースには、陸戦用の3機のモビルスーツしかない。



ガンダムはジャンプで空を舞い、バズーカ、バルカン、さらにはキックやビーム・サーベルで戦う。

ガルマは、その機動力に驚きながらも、ドップ隊にガンダムを攻撃させる。だが、ハイパー・バズーカや頭部のバルカンで、落とされていくドップ隊。ハイパー・バズーカの弾も尽きたところ、ガルマのドップが執念の攻撃をかける。しかし、ジャンプしたガンダムのビーム・サーベルに翼を切り裂かれ、失敗に終わる。それでもガルマはガンダムをガウにおびき寄せ、メガ粒子砲で攻撃するように命令する。だが、その通信は、シヤアの工作で妨害されて届いていなかった。

一方、ガルマのドップを追撃していたアムロは、その途中で地球連邦軍の輸送機と出会い、忠告を受ける。「山を越えるとガウの餌食になる」と。

その声の主は、輸送機「ミデア」の補給部隊隊長マチルダ・アジャン。

彼女は、ホワイトベースに補給物資を受け渡し、いくつかの命令を伝えると、ブライトに「連邦軍にもあなた方を見捨ててはいない人がいることを忘れないでください」と伝えた。

そしてアムロには、「あなたはエスパーかもしれない」と告げ、連邦本部へと帰っていった。

若き貴公子、怒りの突攻

# ホワイトベース隊 VS. ガウ部隊

## 第10話 「ガルマ散る」

廃虚都市を舞台に、強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、ガルマ・ザビ部隊を撃つ作戦をねり、シャア・アズナブルはそれを利用する。

### ■満を持してガルマ・ザビ隊出撃

あとわずかでガルマ・ザビの支配地域を脱し、海へと抜けることができる強襲揚陸艦「ホワイトベース」。しかし、現状では、陽動をかけてガルマ部隊を撃つことも、その包囲網を突破することも難しい。

艦長のブライト・ノアは、これからどうすべきか悩んでいた。

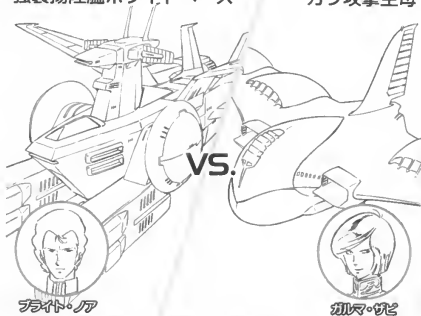
その夜、廃墟と化した都市上空を進むホワイトベースを、照明弾が照らし出した。ホワイトベースの動きは察知され、ガルマの乗りこむ「ガウ」攻撃空母と戦闘機「ドップ」の大編隊が襲来したのだ。だがブライトは、その光に雨天野球場が浮かびあがったのを見て、決意を固めた。

そこに隠れることで敵に見つかるのを避け、そのあいだに敵の動きを見定めて突破口を開こうというのだ。



## 強襲揚陸艦ホワイトベース

## ガウ攻撃空母



一方、ホワイトベースを見失ったガルマは、シャア・アズナブルの提案にしたがって絨毯爆撃をしかける。ホワイトベースをいぶり出そうというのだ。

だが、ホワイトベースはなかなか見つからず、ガルマはいらだちを隠せないでいた。

ついにガルマは「地上に降りて見つけ出すしかない」と言いだす。それを押しとどめたシャアは、自分が部下とともに地上へ降りようと申し出る。

シャアを信頼するガルマは、その申し出を受け入れ、部下を率いて「ザク」3機で出撃するシャアを見送るのだった。

## ■若き貴公子の最期

ザクの出撃を知ったブライトは、「ガンダム」で待機中のアムロ・レイに出撃を命じた。さらにアムロから提案されていた作戦を採用し、敵本隊をホワイトベースの前へ誘きだすよう指示する。

誘いだした敵を、うしろからホワイトベースとその前面に展開させた「ガンキャノン」「ガンタンク」の火力で一氣にたたこうというのだ。

作戦が開始され、アムロのガンダムは単身、廃墟の街へ出撃する。戦いのなか、これみよがしにホワイトベースと逆方向へ逃げていくガンダム。

この動きにブライトたちの作戦を察したシヤアは、ガルマがその作戦にはまるように、嘘の情報を伝える。シヤアはこの戦いを、仇討ちに利用しようと考えていたのだ。そうとは知らないガルマは、勝利の期待に胸踊らし、ガウのメガ粒子砲でガンダムを狙い撃とうとした。まさにそのときだった。敵が罠に飛びついてきたことを確信したブライトが一斉攻撃を命じたのだ。



雨天野球場に身を隠すホワイトベース。アムロのガンダムは、この前方にガルマ部隊を誘きだした。



シャアの裏切りを知らされたカルマは、ザビ家の男であるプライドをかけてホワイトベースへ突攻した。

炎に包まれるガウとガルマ指揮下の部隊。予期せぬ攻撃に驚きながら敗北を悟ったガルマは、ガウをホワイトベースにぶつけるよう指示する。

そんななかガルマの耳に、彼をあざ笑うシャアからの通信が入る。「君の生まれの不幸を呪うがいい」。

ガルマは親友と信じていた男に裏切られたことを知り、怒りをあらわにする。そして、自分でガウの操縦桿をにぎったガルマは、その感情のすべてをぶつけるようにホワイトベースへ突攻

衝突の寸前、ガウはひととき大きな爆発につつまれて地表に激突した。

「ジオン公国に栄光あれー!!」 光のなかでガルマは叫んだ。

ホワイトベースは、すんでのところで助かった。そして艦長席のプライドは「助かったのか……」と安心の声をもらして脱力する。ひとまずの勝利に息をつくプライドたちだったが、これによってホワイトベースが、「ジオン公国の敵」として狙われるようになることを、まだ誰も知らなかった。

新型モビルスーツと新たな脅威の出現

# ガンダムVS.グフ

## ■ガルマ・ザビの仇討ち部隊が地上に降下

やっと太平洋上に抜け出すことができた強襲揚陸艦「ホワイトベース」だったが、そこにジオン公国軍の機動巡洋艦「ザンジバル」が接触してくる。

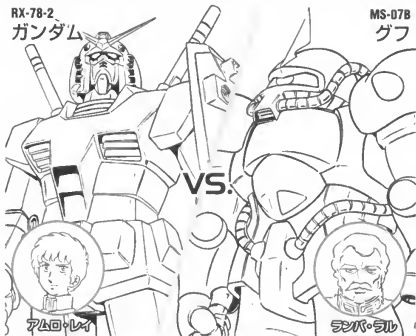
ザンジバルに乗りこんでいるランバ・ラル隊は、ホワイトベースに敗れて戦死したガルマ・ザビの仇を討つよう命じられ、「ザク」以外に、新型モビルスーツ「グフ」を搭載していた。

一方ホワイトベースは、ろくに整備をするひまもなく、エンジン出力も低下。クルーも疲れ果てていた。

そのため、小島に着陸して追撃をやり過ぎそうとする。だが、その甲斐もむなしく、ザンジバルにつき従う、大気圏突入カプセル「コムサイ」に見つかってしまう。

## 第12話 「ジオンの脅威」

新型モビルスーツ「グフ」を持つランバ・ラル隊が、地上に降りてきた。だがアムロ・レイは、心身ともに疲れ果てていた。



発見されたことを知ったホワイ  
ベースは、迎え撃つべくミサイルと  
主砲を放つ。

ランバ・ラルもゴフに乗りこみ、  
ザクを駆るアコースとコズン・グラ  
ハムとともに出撃する。

それに対し、艦長のブライト・ノ  
アは、「ガンダム」「ガンキャノン」  
に発進を命じる。

だが、アムロ・レイはたび重なる  
激戦に精神をすり減らし、無気力状  
態におちいつていた。

しかし、アムロでなければザクは  
防げない。ブライトは、そのままア  
ムロを発進させる荒療治にでる。

そして、出撃したアムロのガンダ  
ムを待ちかまえていたかのように、

グフのヒート・ロッドが襲いかかった。

### ■新型モビルスーツの恐るべき性能

グフの攻撃に、一瞬で正気に戻ったアムロは、相手が新型のモビルスーツだと気づき、反撃をこころみる。

しかしグフとザク、計3機の連携のとれた射撃にくわえ、特殊手榴弾クラッカーの攻撃に押され気味となり、反撃の糸口を見いだせない。

そこに、たたみかけるようにヒート・ロッドで襲いかかるラルのグフ。

ヒート・ロッドはガンダムのハイパー・バズーカに巻きつくが、アムロはとっさの判断でハイパー・バズーカを手放すとシールドをかざし、バズーカ弾の誘導に巻き込まれることを防いだ。

「やるー あの新モビルスーツのパイロットめ！ よくも自分のバズーカの弾の爆発でやられなかったものだ」と、ラルはその判断に驚きの声をあげた。

そこに、「ガンキャノン」「ガンタンク」が援護に駆けつける。ラルは、その2機



ムチ状の兵器、ヒート・ロッドを持つグフ。接近戦の間合いがとりづらく、アムロは苦戦する。



ガンダムのビーム・サーベルならシールドも斬りさいたかもしれない。だがラルは、腕を受けとめた。

をふたりの部下にまかせ、ガンダムに襲いかかる。

アムロは闘志を奮い立たせ、なんとかグフに近づく。

そして、グフのボディにパンチをたたきこみ、さらにビーム・サーベルでとどめを刺そうとする。

その瞬間、「ザクとは違うのだよ！ ザクとは!!」と、叫んだラルは、斬りつけようとしたガンダムの手をシールドで受けとめ、ガンダムを蹴り飛ばした。

「こいつ、違うぞ。ザクなんかと装甲もパワーも」と、アムロは新型であるグフのパワーと装甲に驚き、動きを止める。このままでは負けてしまう。

だがガンキャノンとガンタンクの援護がまにあい、ラルのグフは部下ふたりのザクともども後退。無傷でザンジバルに帰投する。

巨大投光器でホワイトベースの目をくらまし、上昇していくザンジバル。

その姿に、アムロは「逃げられた？ というより……見逃してくれたのか？」と、ただ呆然とするしかなかった。

若きジオン兵たちの生身の強襲

# ガンダムVS.ワツパ

## ■無謀な強襲計画

強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、まだジオン公国軍勢力圏内をさまよっていた。だがそこは、「ザク」が1機しかない、ジオン軍の弱小パトロール基地がある程度の辺境でもあった。

戦争が膠着状態におちいつているなか、そんな小基地に補給も、戦闘もろくにあらはらずがなく、スペース・コロニー育ちの若い軍人たちはいらだっていた。

そんな彼らのまとめ役のクラワンは、ひとつの情報を手に入れた。それは基地の近辺に地球連邦軍のモビルスーツが出動しているというものだった。

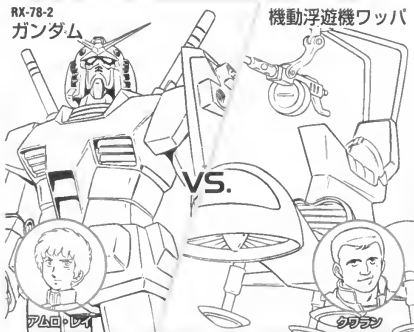
しかもその情報には、モビルスーツがにわかづくりの1機だけという、間違った内容も含まれていた。

このモビルスーツさえやつつけば、虫など飛んでいない清潔なスペース・コロ

### 第14話 「時間よ、とまれ」

ジオン公国軍パトロール基地の若き兵士たちが、独自に「ガンダム」への強襲を計画。今までにない戦法にアムロ・レイは戸惑う。





ニーである、ジオン公国本国に戻る  
ことができる。

クワランは隊長黙認のもと若い兵  
士たちにモビルスーツを倒そうと持  
ちかける。

その翌日、パトロール飛行をして  
いたジオン軍の偵察機「ルッグン」  
は、地球連邦軍の輸送機「ミデア」  
を発見。

「その輸送機は、クワランのいつて  
いた敵へ補給をしていたに違いな  
い」。そう思ったルッグンは、発光  
信号でそのことを伝えた。

その知らせに、クワラン率いる若  
きジオン兵たちは急ぎ出動する。

「俺が攻撃をしかけたら、敵もモビ  
ルスーツを出してくるだろう」。そ

う伝えながら、パイロットであるギヤルが、虎の子のザクで出撃。ミデアに攻撃をしかける。

それを知ったアムロ・レイは、ミデア援護のために「ガンダム」での出撃を申し出て、許可される。

だが、アムロの向かった戦場で待ち受けていたのは意外な敵だった。

## ■生身の敵にしかけられた、時限爆弾

ミデア救援に駆けつけたガンダムは、ビーム・ライフルの一撃でルッグンを撃墜。だがザクのほうは、

慣れない森林戦でとり逃してしまふ。

そのとき、森に奇妙な音が響きわたった。それは機動浮遊機「ワッパ」の一群だった。むき出しで兵が乗りこむホバー機の襲来に、アムロは戸惑いを隠せない。

「機関銃くらいでガンダムを？ どういう攻撃するつもりなんだ？」。混乱するアムロをよそに、クワランたちのワッパは、ガンダムにとりついては離れ、ガンダムの攻撃に吹き飛ばされていく。

無謀な攻撃に、アムロが怒りすら覚えたとき、銃撃を受けたシールドが爆発を起



武装は機関銃くらいで、ひとり乗りのワッパ。10機以上でガンダムに群がり、時限爆弾をしかけた。



時限爆弾は、いつ爆発するかわからない。アムロひとりで作業していたが、最後は仲間も手伝った。

こし吹き飛んでしまう。クワランたちが、ガンダムに時限爆弾をしかけていたのだ。それに気づいたアムロは、ワッパを追いはらい、平原で時限爆弾の撤去をはじめ

る。それを遠巻きに隠れて見ていたクワランたちは、時間がたつにつれ、アムロの奮闘ぶりに感心していく。

そして、残された時間もあとわずかとなったとき、ホワイトベースのクルーたちも手伝いに飛び出し、すんでのところ撤去は成功した。

息ついたアムロたちは、ガンダムの前で休息をしていた。そこに民間のワゴン車がやってくる。自称「地付の青年団」の若者たちは、アムロたちをはやしたてて去っていった。

「いいな、地球に住んでいる人って気楽で」。アムロはそんな言葉をもらす。

だが、ブライト・ノアとミライ・ヤシマは、彼らこそが、ガンダムに時限爆弾をしかけたジオン兵たちだと気づいていた。

思いを暴走させたセイラ・マスの出撃

# ガンダムVS.ザク

## ■ガンダムに乗り込んだセイラ・マス

強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、ジオン公国軍突撃機動軍大佐として、地上の鉦山基地を統括していたマ・クベの支配圏をさまよっていた。

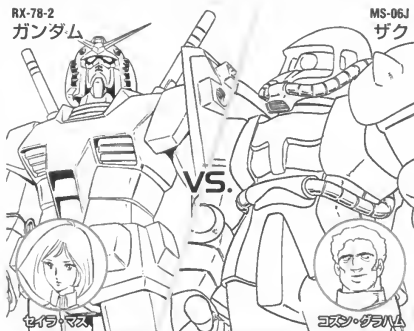
そして、ガルマ・ザビの仇を討つべく派遣されていた、ランバ・ラルとその部下たちの陸戦艇「ギャロップ」もその地にいた。

マ・クベは突撃機動軍司令官であるキシリア・ザビの部下であり、ランバ・ラルはキシリアの弟で宇宙攻撃軍司令官であるドズル・ザビの配下である。そのためマ・クベは、ランバ・ラルが自分の支配圏内をうろつき、鉦山の情報が知られることを、こころよく思っていなかった。

そのような理由から、マ・クベはホワイトベースの情報をラル隊に流し、さっさと厄介ばらいを図ろうとする。

### 第16話 「セイラ出撃」

砂漠に行く強襲揚陸艦「ホワイトベース」にランバ・ラル隊がせまる。そんななかセイラ・マスは、私情で「ガンダム」に搭乗する。



そんなことを知らぬホワイトベースでは、ギヤロップの接近を察知するものの、初めての敵の正体がよくわからず戸惑っていた。

ところが、接近する敵が、たった1機という情報から、セイラ・マスは相手に消息不明の兄、シャア・アズナブル（本名、キャスバル・レム・ダイクン）の情報について聞いてみようかと決意する。

そして、特命と偽り、勝手に「ガンダム」で出撃してしまう。

シミュレーターで完全に覚えていたつもりだったセイラにとって、ガンダムの実戦は想像していた以上のものだった。

「Gがこんなにすごいなんて」。カ

タバートからの発進だけで、セイラは激しい吐き気に襲われた。

### ■撃破寸前にまで追い込まれたガンダム

どうにか出撃したセイラだが、休むまもなくギャロップが攻撃をしかけてくる。

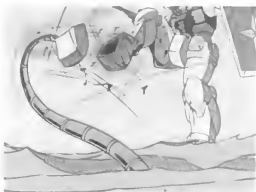
さらに、反対から「ザク」も現れ、ザク・マシンガン撃ちこんでくる。

セイラもビーム・ライフルで応戦するものの、照準しているはずのビームは、相手にかすりもしない。

「あのパイロットめ、不慣れらしい。気の毒だが、いただく!」。その様子を見ていたラルはほくそ笑み、ガンダムを捕らえようと「グフ」でせまった。

だが、そこに駆けつけたのが「ガンキャノン」に乗りこんだアムロ・レイだった。かろうじてセイラは助かるが、戦闘に不慣れなためガンダムを傷つけてしまう。

それでも、セイラは兄の情報を得ようと戦場にとどまるが、アムロのガンキャノンは、グフの相手で手一杯となっていた。



やられたかに見えたグフに、不用意に近づいたセイラのガンダムは、右足先を斬りさかれる。



カメラを破壊されていくガンダム。乗り手でこうも変わるのかと思えた、ショッキングシーンといえる。

そんななか、手すきとなったザクがセイラのガンダムに近づく。

「大丈夫であります、ラル大尉。このモビルスーツを手に入れますよ」。ラルの部下、コズン・グラハムは、ザクで攻撃をしかけつつ、悠然とガンダムに近づいていく。だがセイラは思うようにガンダムを操れず、うしろをとったザクに、ガンダムのカメラをひとつずつ破壊されていく。

そのさなか、アムロのガンキャノンは、戦っていたザクを撃破。すると、味方の損害に危機感を覚えたラルが退却を命令する。ガンダムをあきらめ、退却しようとしたコズンのザクの前に、ガンキャノンが仁王立ちで立ちふさがる。

そして、今までのセイラいじめの仕返しをするかのように、「こいつ」と、アムロは打撃攻撃をするのだった。かくして、ガンダムを捕らえようとしたコズンは、逆にザクごとホワイトベースの捕虜となった。

命令違反を犯したセイラは、三日間の独房入りを命ぜられたが、コズンから兄の手がかりを聞き出すことができ、その無事を知り、涙するのだった。

すべてを焼きつくす高熱電磁波の恐怖

# ガンダムVS.アッザム

## ■モビル・アーマーの原型となる機動兵器の性能テスト

中央アジア、そこはジオン公国軍の資源採掘基地が点在し、地球連邦軍のレビル將軍が立案した「オデッサの戦い」の侵攻目標とされている地域だ。

今、そこにジオン公国軍突撃機動軍総司令のキシリア・ザビが降り立ち、現地司令であるマ・クベの案内で視察に当たっていた。

一方、強襲揚陸艦「ホワイトベース」から、「ガンダム」ごと脱走していたアムロ・レイは、自分の力を知らしめようと考えていた。

アムロは、レビル將軍がオデッサ作戦でたまたこうとしているジオン軍の鉱山を探しだし、ガンダム1機で破壊しようとする。

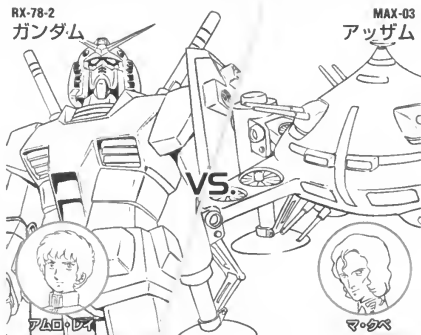
そして、たまたまキシリアが視察に来ていた採掘基地を発見。アムロはザクが1機もないことに気をよくし、ビーム・ライフルで攻撃をはじめた。

### 第18話

#### 「灼熱のアッザム・リーダー」

「ガンダム」を持ちだし脱走中のアムロ・レイが、ジオン公国軍の採掘基地を襲う。そして、試験中の「アッザム」との戦いとなる。





戦車「マゼラ・アタック」や、基地各所の砲台が反撃をくわえるが、それらはガンダムの敵ではなかった。

そんななかキシリアは、モビルスーツの接近に気づかなかったマ・クベを叱責しつつ、出撃を命じる。

そしてキシリア自身も、「性能テストには、よい機会」と、のちのモビル・アーマーの原型となる重機動砲座「アッザム」で、マ・クベとともに出撃するのだった。

### ■ 4000度を耐えたガンダム

基地攻撃のさなか、アムロはひと息つくが、直後に何者かの砲撃を受ける。目の前に現れたのは、今まで

見たこともない巨大な機動兵器だった。

アッザムはガンダムの攻撃を寄せつけず、むしろその火力で翻弄していく。そして、アムロが気づいたとき、アッザムはガンダムの上をとっていた。

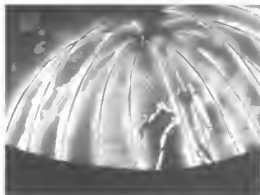
「リーダー発射!」。喜々として命令を告げるマ・クベの言葉にしたがい、撃ちだされたカプセル。

ガンダムの頭部バルカンで破壊されたカプセルから、粒子がふりそそぐ。

状況がわからず、混乱するアムロ。だが、その隙をつくように、さらにアッザムから撃ちだされたワイヤーがガンダムをカゴの中の鳥のように囲む。そして流される電磁波に、ガンダムの表面温度は4000度にもたつした。

これに対し、ガンダムのコンピュータは、「パイロットおよび回路保護のため、全エネルギーの98パーセントを放出中」と告げる。残りが2パーセントではガンダムも動けず、行動不能におちいつてしまった。

しかしここで、アッザムの攻撃エネルギーが限界にたつし低下。ザクならとくに動けないはずの攻撃に耐え、再び動けるようになったガンダムは、アッザム・リ



アッザム・リーダーの電子レンジのような攻撃に、ガンダムの表面温度は4000度にもたつした。



ガンダムの性能を見て、キシリアはテスト中のモビルスーツの実戦配備を急がせる決意をする。

ーダーを破壊する。

今度は一気にジャンプしてアッザムに飛び乗り、ビーム・ジャベリンを突き立てる。「もはやこれまで」。そう判断したキシリアは、マ・クベに機密保持のため、やむなく基地を爆破するよう命じた。

突然の爆発にアムロは驚き、アッザムから振り落とされてとり逃がしてしまう。だがアムロは、「連邦軍が全力でつぶそうっていうジオンの基地をやったんだ」と

無邪気にその戦果を喜んだ。

しかし戦いを終え、破壊された基地に降り、情報収集をこころみたアムロは愕然とする。

そこはたくさんあるジオンの採掘基地のひとつでしかなかったのだ。

基地を見て回るアムロは、ひとりの傷ついたジオン兵と出会う。うしろめたさからか、彼にはげましの声をかけ、アムロは基地をあとにした。

その後、破壊された基地にたどり着いたホワイトベースでは、アムロの暴走により、自分たちがジオン軍の目を引いたことを危惧するのだった。

ホワイトベース隊を震撼させた戦争屋の意地

# ガンダムVS.グフ

## ■初めて芽ばえた勝利への欲望

強襲揚陸艦「ホワイトベース」と、それを討ちとろうと狙うランバ・ラル隊の両者は、たび重なる戦いで消耗していた。

そんななかラルは、今回も「グフ」でホワイトベース隊に挑み、圧倒していた。そのとき、どこからともなく「ガンダム」が現れ、「ガンキャノン」をとらえていたグフのビーム・ロッドをビーム・ライフルで撃ち抜く。それは、脱走していたアムロの援護攻撃だった。

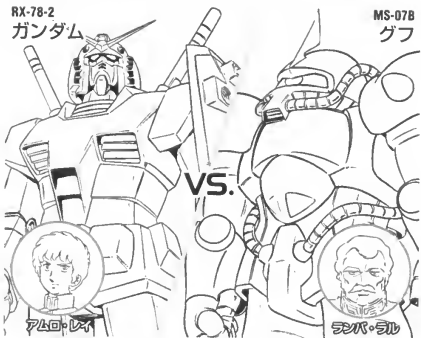
さらに射撃をくわえるガンダムだったが、ラルは「正確な射撃だ。それゆえ、コンピューターには予測しやすい」と、ほとんど動かず避ける。

近づきビーム・ロッドで攻撃をくわえるグフに、アムロはエネルギー残量の少なくなったビーム・ライフルを捨て、ビーム・サーベルで挑みかかる。

第19話  
「ランバ・ラル特攻！」

第20話  
「死闘！ ホワイトベース」

強襲揚陸艦「ホワイトベース」を襲うランバ・ラル隊の戦力は、ほとんど失われていた。だが、ラルはさらに攻撃をくわえる。



その様子に感嘆したラルは、ヒー  
ト・ソードをかまえてそれに応え  
る。

ガンダムが斬り降ろしたビーム・  
サーベルと、グフの斬りあげたヒー  
ト・ソードが、双方のコクピットを  
斬りさく。

その後、斬りかかってきたグフの  
両腕を、ガンダムが斬って落とし  
た。そのとき、アムロとラルは互い  
の姿を認め、驚く。

ふたりは、食事屋で出会ったばか  
りで名前も顔も知っていたからだ。  
それでも攻撃をあきらめないラル  
のグフに、アムロはビーム・サーベ  
ルを突き立てて撃破する。

だが、ラルはガンダムに投げつけ

たワイヤーを利用して脱出を果たす

「見事だな　しかし小僧、自分の力で勝ったのではないぞ！　そのモビルスーツの性能のおかげだということを忘れるな!!」と言い残して

脱走の罰として独房に入れられたアムロは、「僕は、あの人に勝ちたい……!」と、強くつぶやく

それは初めて芽ばえた勝利への欲望だった

## ■戦争屋の意地

かくして、その戦力の多くを失ったラルだったが、マ・クベの策略によって補給を受けられずにいた。

したがってさらに作戦行動をとるなら、残っている戦力で言うしかない

だがそれこそ、ゲリラ屋でもあったラルの本領が発揮できる戦いでもあった。結果、ラル隊の士気はかえってあがる。

ラルは残された「ザク」や陸戦艇「ギャロップ」といった戦力を固に使い、腹心の部下ともども揚兵戦車「キューイ」でホワイトベースに近づく。

一方、ホワイトベースは、アムロが独房入りのため、ガンダムにはセイラ・マス



ガンダムの性能に助けられながらも、強敵ラルのグフを倒すほどアムロは成長していた。



作戦の失敗を悟ったラルは、自らのけじめのため、また少年たちに戦いの重さを教えるために自爆する。

が搭乗して出撃。ザクの撃破に成功する。

その隙に、ラル隊はホワイトベース内部に潜入。戦いは白兵戦に移っていく。このままでは第2ブリッジが占拠されるのも時間の問題だ。

この危機に艦長のブライト・ノアは、アムロにセイラとガンダムの操縦を代わり、敵を排除するよう命令する。

そして、成功したアムロが見たもの、それは傷つき、負けを認めたラルの姿だった。

「君たちは立派に戦ってきた。だが、兵士の定めがどういふものか、よく見ておくのだな」と、宙に身を投げ、アムロが差し出したガンダムの手の上で自爆して果てた。

その壮絶な最後に少年たちは息をのむ。

それでも攻撃を止めないギャロップに、アムロは「ランバ・ラルが死んだんだぞ!!」と、怒りの叫びをあげつつビーム・ジャベリンを投げつけた。

戦いは終わったが、アムロをはじめ、少年たちの心には戦いの重さが残された。

悲しみのクラウレ・ハモン、玉碎覚悟の鎗戦法

# ガンダムVS. マゼラ・トップ

## ■ランバ・ラル隊最後の戦い

強襲揚陸艦「ホワイトベース」との白兵戦で、隊長のランバ・ラルを失ったものの、ラル隊は内縁の妻であるクラウレ・ハモンの指揮のもと、任務を続けていた。

主な戦力は失われ、資源採掘地帯オデッサの基地司令マ・クベの協力もない状況で用意できたのは、使い古しの「ザク」1機と、戦車「マゼラ・アタック」の砲塔部「マゼラ・トップ」4機のみだった。

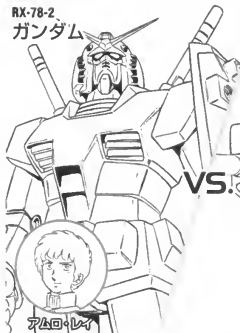
ハモンは部下の進言により、鎗戦法をとることを決める。それは相手の弱点に対し、すべての戦力を投入して敵の撃破をはかる戦法だった。そのため、味方の生還が確実な作戦ではなかったが、誰ひとり反対するものはいなかった。

ホワイトベース損傷の報告を受けたハモンは、この氣に乗じてホワイトベースの側面を攻めることを決意する。

### 第21話 「激闘は憎しみ深く」

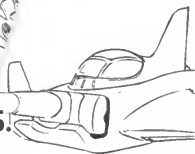
ランバ・ラルを失ったクラウレ・ハモンは、相打ち覚悟の鎗戦法で、強襲揚陸艦「ホワイトベース」に戦いを挑んできた。



RX-78-2  
ガンダム

アムロ・レイ

飛行砲塔マゼラ・トップ



キラ・ヤマト

VS.

作戦の囫となるザクにはマゼラ・トップの主砲を持たせ、兵舎として利用していたキャンピンググトレーラー「カーゴ」にもマゼラ・トップを搭載し、さらに爆薬を満載して決戦兵器とした。

また、モビルスーツ輸送用トレーラー「サムソン」すら切り離して戦力とする、まさに総力戦だった。

兵がひとりも欠けることなく、彼らと自分の思いが同じであることがハモンにはうれしく、誇らしかった。「あんな心をよせてくれた人のために、砂漠で散るのも後悔はない」。

こうしてラル隊最後の戦いがはじまった。

## ■あまりにも大きな代償

ラル隊の急襲にホワイトベースは、「ガンタンク」「ガンキャノン」で応戦する。戦況の不利を見たリュウ・ホセイは、独房のアムロ・レイの出撃をブライト・ノアに了承させると、重傷の身にもかかわらずバギーで、動けなくなったガンタンクへと向かった。「ホワイトベースがやられちまえば、病気だ、ケガだつていえるかよ!」。リュウは軍人として、どんなときでも戦い方があることを示すとともに、バラバラになったクルーの心をまとめようと必死だった。

小型戦闘機「コア・ファイター」で出撃したアムロは、ミサイルでマゼラ・トップ一機を撃破する。修理を終えた「ガンダム」へ合体したアムロは、ザクとホワイトベースが近すぎて火器が使えず、そのため格闘戦で決着をつけることになる。

高速で突進してきたカーゴが突攻を目的としていることを見抜いたアムロは、押さえこんで衝突を防ごうとする。しかしハモンは、爆発連鎖によるホワイトベースの撃破をはかり、ザクにガンダムをうしろから倒せと命令した。



マゼラ・トップの上空からの攻撃を、ザクを盾にして防ぎ、跳ねあげて激突させ2機とも撃破した。



ガンダムにとどめを刺そうとするマゼラ・トップ。だが、コア・ファイターの体当たりがそれを阻む。

腹部に損傷を負わされながら、アムロはザクを投げ飛ばして上空のマゼラ・トップの盾としたうえ、衝突させて2台同時に撃破するという離れ業をやって見せる。ハモンもこれには感心するが、その隙をついて背後をとると、至近距離からの射撃を実行した。一射目は背負っていたシールドで防げたが、次はもたない。相手がハモンだと気づいたアムロは驚き、「ハ、ハモンさんか?」と口ごもる。

「ほんと、好きだったよ、坊や」「これでおしまい!」と、ハモンが決着をつけようとしたその瞬間、リュウの操縦するコア・ファイターが体当たりを敢行。マゼラ・トップもろとも自爆する。

アムロはカーゴがホバークラフトであることに気づき、エンジンの片方をビーム・ライフルで破壊すると、最後のマゼラ・トップを撃墜。バランスをくずしたカーゴを蹴飛ばして距離を稼ぎ、狙撃によって破壊する。ここに戦いは終わった。

アムロは、セイラからあのコア・ファイターに乗っていたのがリュウであったことを知らされ、慟哭するのだった。

伝説の小隊「黒い三連星」の脅威

# ガンダムVS.ドム(黒い三連星)

## ■闇夜を高速でせまりくるドム

地球連邦軍の大規模な反攻作戦「オデッサの戦い」をまえにして、ジオン公国軍のオデッサ方面基地をとり仕切るマ・クベのもとへ、キシリア・ザビ直属の独立小隊が援軍として到着する。ガイア、オルテガ、マツシュの3人から成る小隊、「黒い三連星」である。高名なエースパイロットである彼らは、固い絆で結ばれており、コンビネーション攻撃を駆使して数々の戦果をあげていた。特に「ルウム戦役」において、敵将のレビル將軍を捕虜として捕らえた功績は実に輝かしいものであった。そんな彼らが駆るのは、新型モビルスーツ「ドム」。高速でホバリング走行し、破壊力の高いジャイアント・バズなどを装備するこの新型機は、地上戦において機動力と火力に優れていた。そんな新たな乗機を受領したばかりの黒い三連星は、着任早々、強襲揚陸艦「ホワイトベース」へ夜襲をしかける。

### 第24話 「迫撃! トリプル・ドム」

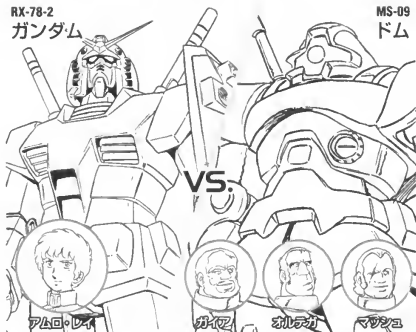
修理中の強襲揚陸艦「ホワイトベース」に、ジオン公国軍のエース部隊「黒い三連星」の3機のドムが夜襲をかける。

RX-78-2

ガンダム

MS-09

ドム



現在ホワイトベースは、マチルダ・アジアン補給部隊から補給・修理を受けている最中。しかも先の戦いでリュウ・ホセイが戦死し、過労から艦長のブライト・ノアが療養中になるなど、不安要素が大きかった。そんななか、迎撃戦ははじまる。

闇夜を高速で移動するドムは、森林という地形を巧みに利用し、先鋒の「ガンキャノン」「ガンタンク」の攻撃を次々とかわす。

機動力に勝るドムが相手では、砲撃主体のこの2機はやはり不利であった。遅れて「Gアーマー」(支援戦闘機Gファイター+ガンダム)が戦場に馳せ参じるものの、戦いは黒い三連星優勢のまま進んでいく。

## ■ マチルダ・アジャンの突攻により、必殺技を破る

徐々に距離を詰めた黒い三連星のドムの攻撃は、すでにホワイトベースにもせまっていた。そこへ、Gアーマーから分離したアムロ・レイの「ガンダム」が登場し、ジャイアント・バズをかわしつつガイアのドムに斬り掛かる。

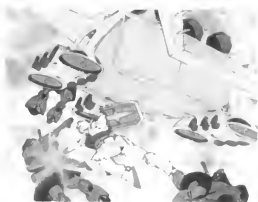
ドムとガンダムの戦いは一進一退。業を煮やしたガイアは、「モビルスーツに、ジェット・ストリーム・アタックをかけるぞ!」と、言い放つ。すると3機のドムは集結し、一列となつてガンダムに突進。

まず、一番前のガイア機がヒート・サーベルで斬りかかる。そして続く2番目のマッシュ機、3番目のオルテガ機がジャイアント・バズを放つ。さらに敵機の背後をとった前の2機が、追い打ちをかけていく。

これが、黒い三連星の必殺技「ジェット・ストリーム・アタック」だ。前の機体がかうしろの機体を隠して、次の攻撃を予測させないことで、とめどない波状攻撃をしかける。この猛攻を、ガンダムはなんとかしのぐ。



ジェット・ストリーム・アタックをかわすガンダム。  
ガイアは、「俺を踏み台にした!？」と驚いていた。



まさに必殺技のジェット・ストリーム・アタック。  
マチルダの突攻がなければ、勝敗はわからなかった。

アムロは、いったん距離をとる。そこへ、手応えを感じた黒い三連星が、再びジェット・ストリーム・アタックをしかけてくる。今度はガイア機が拡散ビーム砲で目くらましをし、ガンダムが思わず飛びあがったところを、マッシュ機がそれに合わせてジャンプしジャイアント・バズを放つ。戦慄とともに、アムロの絶叫がコクピット内に響く。その直後、ガンダムはガイア機の肩口を踏みつけて弾丸をかわず、マッシュ機にビーム・サーベルを深々と突き刺していた。しかし、両手がふさ

がってしまったガンダムは、完全に無防備状況。そこにオルテガ機がジャンプでせまる。

そのときだった。マチルダの乗る輸送機「ミデア」が、オルテガ機に突攻する。ガンダムはその隙に、マッシュのドムを斬り伏せる。と同時に、オルテガ機も、ミデアのブリッジを叩きつぶす。

闇の森にふたつの大きな轟音が響いた。その後ドムは退却し、戦いの幕は閉じる。

マチルダという大きな犠牲をはらいながらも、エース部隊を退けたアムロ。これは、アムロのなかで芽生えた新たな力を予感させるできごとでもあった。

北海で猛威を振るう水陸両用モビルスーツ

# ガンダムVS.ゴツグ

## ■ガンダム初の水陸戦

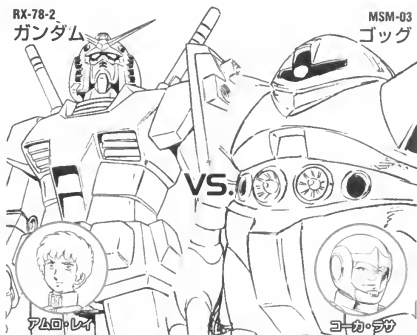
「オデッサの戦い」を勝利のうちに終えた強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、応急修理のため、地球連邦軍の軍事拠点のひとつ、北アイルランドの基地「ベルファスト」に入港した。なんとか勝利はしたもの、ホワイトベースの艦体は、戦闘に耐えられないほどの損傷を受けていた。搭載した「ガンダム」「ガンキャノン」「ガンタンク」の3機のモビルスーツも被害甚大だった。

しかし、ジオン公国軍はすでに次の手を打っていた。大西洋を遊弋し、連邦軍の動向を探っていた潜水艦部隊「マッド・アングラ」は、ベルファストに潜伏するスパイからの報告で、ホワイトベースの入港を察知した。艦隊司令に就任したばかりのシャア・アズナブルは、大きな得物が網にかかったことを知り、最前線の潜水艦「ユーコン」から、2機の水陸両用モビルスーツ「ゴツグ」を差し向ける。

### 第26話 「復活のシャア」

潜水艦部隊「マッド・アングラ」の司令となったシャア・アズナブルは、強襲揚陸艦「ホワイトベース」に対し水中から刺撃を放つ。





ゴッグに乗りこんでいるのは、コーカ・ラサとマーシー。海中を密かに進んでいた2機のゴッグは、ベルファスト沖合に連邦軍が撒いた探知機雷のひとつに触雷し、潜入を察知されてしまう。だが、あとの機雷をすべて対機雷兵器フリージーヤードの粘性物質でからめとり、無傷のままベルファスト港へと侵攻。港湾施設に上陸をはたす。

そこへ駆けつけた61式戦車、バルカン砲車、ミサイルランチャー車など、連邦軍の陸上戦力。

だが、その攻撃は頑丈なゴッグの装甲に傷をつけることさえできず一方的に撃破され、さらなる進攻を許すのだった。

## ■慣れない水中戦で辛くも勝利

レビル將軍から直々のブリーフィングを受けたホワイトベース隊も、基地の防衛戦に参戦した。

しかし、ホワイトベースはドック内で修理中、モビルスーツも、カイ・シデンの乗る「ガンキャノン」は分解整備中、ハヤト・コバヤシの「ガンタンク」もすぐには出撃できない。唯一動けるアムロ・レイの「ガンダム」は、最大火力を誇るビーム・ライフルを欠くありさま。

重装甲のゴッグは、ガンダムの頭部バルカンを軽く手のひらでたたき返す。また、ガンダム・ハンマーの強化版、ロケットで加速して激突するハイパー・ハンマーですら簡単に両腕で受け止め、アムロを驚愕させる。攻めあぐねたアムロはいったんガンダムをホワイトベースに戻し、ガンダムの下半身Bパーツを外して、支援戦闘機「Gファイター」前部を接続し、「Gブル」として再出撃した。Gブルの主砲、連装メガ粒子砲ならば、ゴッグの分厚い装甲を撃ち抜けると考えたのだ。



ゴッグの武器は、水中でも使えるメガ粒子砲と魚雷。そして、重厚な装甲と機敏な水中機動性だ。



ガンダム・ハンマーを強化したハイパー・ハンマーだが、ゴッグは易々と受け止めた。

Gブルを鈍重大型戦車とあなどったマーシーのゴッグは、巨腕を振りかざして襲いかかるが、Gブルは、彼の予想を超えた俊敏性を発揮。隙をついたメガ粒子砲でゴッグを撃破した。

マーシーの死を目の当たりにしたラサ曹長は、ガンタンクとの戦闘を放棄し、有利な海中へと逃げ込んだ。アムロはホワイトベースから撃ち出されたBパーツと空中換装を行い、再びガンダムとなって追撃をかける。

司令部の建物から見守るレビル将軍が「深追いは危険なのだが」と案じるなか、Gファイターによる空からの支援のもと海中のゴッグを追うガンダム。

海に潜ったガンダムは、ゴッグの機動力と鋭いツメの攻撃をくらい、頭部に大穴をいくつも開けられる。ガンダムを押さえ込み、ビーム砲を発射しようとするゴッグに対し、「そこだー」と、アムロはビーム・サーベルをモノアイに突き立て、ひるんだ隙に、もう一本のビーム・サーベルで葬り去った。

「勝ったな、ガンダム」。戦況を見ていたレビル将軍は爆発の水柱を見て、満足げにつぶやくのだった。

コンビネーション攻撃で新型モビルスーツを撃破

# ガンダム部隊 VS. ズゴック

## ■ズゴックの性能に、ガンキャノンが大苦戦

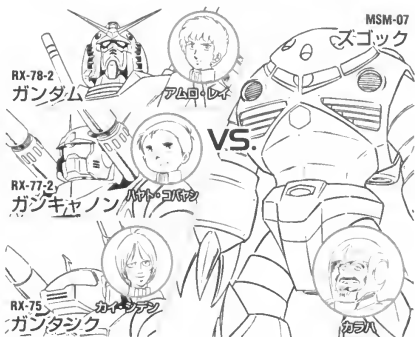
「木馬があのだックを出て、どこに向かうかを知りたい」。ジオン公国軍の潜水艦部隊「マッド・アングラー」司令のシャア・アズナブルは、強襲揚陸艦「ホワイトベース」の動向を探るために罠を張りめぐらした。

地球連邦軍基地「ベルファスト」で修理に手間どるホワイトベースをさらに長く基地に釘づけにするため、モビルスーツによる基地攻撃を行う。その戦闘の混乱に乗じて、工作員にホワイトベースの動向を探らせる。二段構えの作戦である。

フラガナン・ブーンが指揮をとる艦隊最前線の潜水艦「ユーコン」から出撃した水陸両用モビルスーツ「ズゴック」は、対機雷兵器フリージャーヤードで機雷源を無効化しつつ、ベルファスト港へと急速接近する。ベルファスト基地では、今回の侵入者は、前回の「ゴッグ」よりスピードがあることを察知し、対潜ミサイルをスタ

## 第27話 「女スパイ潜入！」

シャア・アズナブルは、強襲揚陸艦「ホワイトベース」へのスパイ潜入のために、ズゴックによる陽動攻撃を命じる。



ンバイ。迎撃態勢に入った。

ズゴックの定位位置到着を合図に、ブーンは援護のゴックを発進させる。さらに霧にまぎれて対地ミサイルを発射し、スパイとの連絡員コンリーをゴムボートで湾内へと送り出した。

一方、ホワイトベースでは、「ガンダム」と支援戦闘機「Gファイター」を出撃させ、まだ上陸してこない敵モビルスーツ迎撃のため、空から海面上を警戒させた。上陸支援の対地ミサイルを撃ったあと、再び潜航して、海中から湾内をうかがっていたユーコン部隊は、ゴックに、ガンダムを乗せたGファイターを狙わせる。しかし、このチーム砲攻撃を

回避して、ガンダムは水中で対モビルスーツ戦を、Gファイターは空中から対潜水艦攻撃を開始する。

そのころ港湾地域では、海中からのヒット・アンド・アウェイ戦法をとるカラハのズゴックが、迎撃のため出撃したハヤト・コバヤシの「ガンキャノン」を機動性と火力で圧倒していた。「これがあのガンダムかい？ ヒヤッハハ、噂ほどのものじゃないぜ!」。頭部ミサイルと腕のメガ粒子砲でガンキャノンを追いつめる。

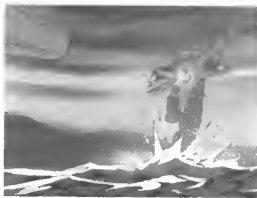
### ■連携プレーでズゴックを撃破

戦争を続けることに疑問を抱き、半ば脱走するように艦を降りたカイ・シデンが、ホワイトベースの苦境を見かねて舞い戻ったのは、艦内施設でちょうど「ガンタンク」の修理が終わったところだった。即座にガンタンクに搭乗、出撃したカイは、腕を引きちぎられそうになっていたハヤトのガンキャノンをピンチから救う。

ズゴックは次にガンタンクへ狙いをつけ、海中に引きずり込もうとする。そこに駆けつけ、割って入ったのがビーム・サーベルを振りかざしたガンダム。ズゴック



ガンキャノンの腕を引きちぎろうとするズゴック。助けがなければ、引きちぎられていただろう。



ガンダムのあとを追って海上に飛び出したズゴックは、待ち構えていたガンタンクに狙い撃たれた。

は再び目標を変え、バーニアを吹かし、ツメで足を掴んだガンダムごと一気に海中へと飛び込んだ。

「こつちが本物のガンダムらしいが、これでお仕舞いだ!」。カラハはズゴックの俊敏な水中機動力を活かし、ミサイルとメガ粒子砲でガンダムを翻弄する。しかしアムロは、「なめるな!」と叫ぶと、バーニア全開で急浮上。そのまま海面を突き破って空中に飛び上がる。「……来るな!」と、待ち構えていたガンタンクのカイは、ガ

ンダムのあとを追って海面より飛び出したズゴックに2門のキャノン砲を斉射。

直撃を受け一瞬動きを止めたズゴックは、追っていたはずのガンダムに、ビーム・サーベルで上半身を縦に斬られ、海中に没したのち大爆発した。

それを合図に2番艦を撃沈されたユーコン部隊は引き、ジオン軍は撤退した。

しかし、この戦いに乗じて上陸したコノリーは、ジオン軍への情報提供者ミハル・ラトキエと接触し、シヤアからのホワイトベース潜入の命を伝える。そしてミハルは、艦に潜りこむのだった。

水中から強襲する巨大な魔手

# ガンダム VS. グラブロ

## ■ホワイトベースへ潜入したフラナガン・ブーン

潜水艦「ユーコン」部隊の指揮官フラガナン・ブーンは、ヴェルデ諸島の漁業組合の魚群追跡機を装い、強襲揚陸艦「ホワイトベース」に緊急着艦した。「ジオンの戦闘機が冗談半分に撃ってきてさ」と、ブーン。言葉どおり、撃ち抜かれて燃料漏れしている翼は、艦長のブライト・ノアたちクルーを信用させる説得力があった。

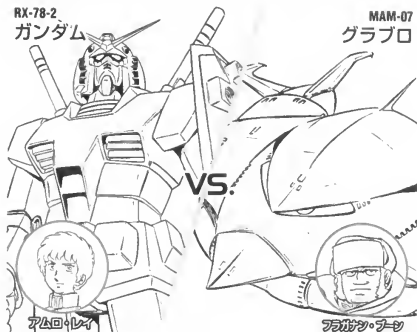
潜水艦部隊「マッド・アングラー」の司令シャア・アズナブルは、地球連邦軍基地「ベルファスト」で修理を終えたホワイトベースの向かう先を知りたかった。

アフリカならばジオン軍残党狩り、北米ならばジオン軍地球方面軍「キャリフォルニア・ベース」の攻略だろう。そして南米の連邦軍拠点基地であれば、連邦軍の宇宙反攻作戦がはじまる兆候にはかならない。ブーンはトイレを借りる振りをして、忍び込ませたスパイ、ミハル・ラトキエと密かに連絡をとることに成功。

### 第28話 「大西洋、血に染めて」

地球連邦軍本部「ジャブロー」へ向う、強襲揚陸艦「ホワイトベース」。大西洋上で水中用モビルアーマー「グラブロ」がせまる。





ホワイトベースの目的地が、南米の宇宙船用ドックであるとの報告を受けとり、悠然とホワイトベースを立ち去った。

シヤアに情報を報告したブーンは、4機のモビルスーツを沈められた復讐をすべく、水中用モビルアーマー「グラブロ」を借り受け、ホワイトベース追撃に向かうのだった。

### ■圧倒的なグラブロの水中戦闘力

グラブロは、ホワイトベースの巡航速度を遥かに上回る速度で接近した。後方を追いかけていたユーコンからの対艦ミサイル攻撃が数群つづいたあと、ホワイトベースのほぼ真下の海中からブーメラン・ミサイル

による攻撃を行う。支援の「ズゴック」2機とグラブロが発射するミサイル群にホワイトベースは翻弄される。

アムロ・レイとセイラ・マスは、現状の「Gアーマー」(支援戦闘機Gファイター+ガンダム)で出撃。空中で「ガンダム」と「Gファイター」に分離すると、ガンダムは海中へ向かう。

「ガンキャノン」や「ガンタンク」には海中戦闘能力がないため、ハヤト・コバヤシは小型戦闘機「コア・ファイター」で出撃。対潜ミサイルを積んだ輸送機「ガンペリー」には、ジョブ・ジョンが機銃座から離れることができず、カイ・シデンひとりで乗り込んだ。しかし実際は、スパイであるミハルと、緒に出撃していた。

分離後のGファイターはコア・ファイターと連携、海面上に飛び出したズゴックをメガ粒子砲で葬ったが、直後にグラブロのブーメラン・ミサイルをくらって海面に不時着した。

一方、海中のガンダムはグラブロに苦戦していた。水中戦闘用の武器をもたない



グラブロは、水中で威力を発揮できないビーム・ライフルをもとめず、高速機動でガンダムを襲う。



カイに協力するため、ガンペリーに乗り込んだミハル。発射したミサイルはズゴックを撃破したが……

ガンダムは、とりあえずビーム・ライフルで応戦するが、水中ではビームの威力は半減する。段違いに装甲の厚いグラブロに対しては、とても有効な武器とはいえない。「このグラブロに対して、うかつに海中に入ったのが、おまえのミスだよ!」と、ブーンは、グラブロの巨大な腕でガンダムの片足を掴み、振り回した。

撃墜されたGファイター、全弾撃ち尽くしたコア・ファイターに変わり、カイのガンペリーは、対潜ミサイルでもう1機のズゴックと渡り合う。メガ粒子砲を被弾しながらも、反撃のために海面へ顔を出したズゴックに命中させ撃沈する。

一方グラブロはガンダムを振り回し、片足を引きちぎるが、逆にそのことでガンダムは動きやすくなった。すばやく身をかわしたガンダムは、ビーム・サーベルでグラブロの急所に一撃。強大な戦闘力を誇るモビルアーマーは、大西洋に沈んだ。

危機を脱したホワイトベースだが、カイは「ミハルがいなくなった」と泣く。

ミハルが、先ほどの戦闘中に海に落ちてしまったことを、カイは知らなかったのだ……。

「赤い彗星のシャア」、再び

# ガンダム VS. シャア専用ズゴック

## ■強敵シャア・アズナブルの強襲

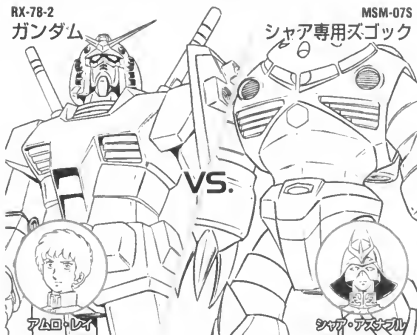
強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、地球連邦軍本部「ジャブロー」へと帰還した。そこは南米大陸の密林の巨大地下空洞を利用してつくられた基地で、正確な位置は秘匿されていた。しかしジオン公国軍は、ホワイトベースを追うことで、ジャブローの入口を見つける。北米のジオン軍地球方面軍総司令部「キャリフォルニア・ベース」からきた「ガウ」攻撃空母の大編隊は、モビルスーツ降下作戦を実施。ジャブローからの防衛砲火にさらされ、無事降下できた機体はさほど多くなかったが、水中を移動してきた第一陣と合流した。ここにこれまで一度たりともジオン軍の侵入を許したことのないジャブローが、ついにその襲撃を受けることとなった。

ホワイトベースが宇宙出撃のための準備でドック入りしているため、クルーたちは基地防衛隊に協力し、ドック付近の入口の守りについた。アムロ・レイとセイラ・

第29話  
「ジャブローに散る！」

第30話  
「小さな防衛線」

地球連邦軍本部「ジャブロー」に入る、強襲揚陸艦「ホワイトベース」。シャア・アズナブルは、ジャブローへの入口を突き止める。



マスは、「Gブル」（支援戦闘機Gフ  
アイター前部+小型戦闘機コア・ファ  
イター+ガンダムの上半身Aパーツ）  
で、「ガンキャノン」や「ガンタン  
ク」とともに防衛にあたったが、別  
の入口を突破した敵を迎撃するた  
め、ホワイトベースから撃ち出され  
たガンダムの下半身Bパーツと換装  
して、「ガンダム」と「Gファイタ  
ー」となり、ホワイトベース周辺の  
防衛にあたった。

そのとき、執拗にホワイトベース  
を狙う赤いズゴックをアムロは見つ  
ける。アムロは直感した。それが  
「赤い彗星のシャア」であることを。  
「ま、間違いない。奴だ、奴がきた  
んだ！」と、言うアムロの予想通

り、赤いズゴックに乗る人物はシャア・アズナブルであった。ガンダムとの数合の打ち合い、その実力を確かめたシャアは、「さらにできるようになったな、ガンダム」と、うなる。そして、ホワイトベース担当の技術士官ウッディ・マルデンが乗るホバークラフト「ファンファン」をたたき落とし、ジャブローから脱出して、ジャングルに消えた。

### ■シャア専用ズゴックを追いつめる

いったん引きあげたジオン軍だが、一度人口を知ってしまったからには再侵入はさほど難しくはない。

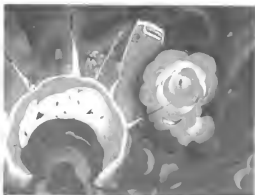
つづくジオン軍の第二次ジャブロー攻撃は、ジャングルから現れた大モビルスーツ軍団が、連邦軍の隙をつく形ではじまった。

シャアのズゴックに率いられた潜入工作隊は、密かに連邦軍最初の量産型モビルスーツ「ジム」の工場を狙った。

しかし、彼等のしかけた時限爆弾はすべてホワイトベースに乗っていた避難民の子供たち、カツ・ハウイン、レッツ・コ・ファン、キッカ・キタモトの3人によって



アムロが見た赤いズゴックは、高速で移動し、次々と連邦軍の防衛隊を撃破して行った。



追いつめられたシアのズゴックは、洞窟の天井などを乱射し、目くらましを行って地底湖に逃げた。

取り外された。外された爆弾はアムロやハヤト・コバヤシ、カイ・シデンたちの手によって、地下大空洞内の使われていないエリアに投棄されたため、爆発による被害はなかった。

ジム破壊工作と並行してシアアが敢行しようとしたホワイトベース破壊工作のほうは、防御が堅く失敗した。逃走の途中でシアアは、妹のセイラ（本名、アルティシア・ソム・ダイクン）に再会するが、モビルスーツに戻り、ほかの潜入作業員にもジャブロー脱出を命じた。

しかし、脱出路を目指す潜入工作隊のアツガイは、急ぎ出撃したアムロと遭遇してしまう。ガンダムの危険性を熟知するシアアは「止まるな、止まったら助かるものも助からんぞ、走れ」と叱咤するが、またたく間に4機のアツガイは倒される。

シアアのズゴックも攻撃をしかけるものの、片腕をビーム・サーベルで斬り落とされてしまう。

ガンダムは終始優位に戦いを進め、ズゴックをジャブローの端まで追いつめたが、地底湖から地下水脈に逃げ込まれてしまうのだった。

巨大クローをもつスピードスターの恐怖

# ガンダムVS.ビグロ

## ■偽軌道を行くホワイトベース

南米の地球連邦軍本部「ジャブロー」から、大量発進する宇宙艦隊に2時間先駆けて、強襲揚陸艦「ホワイトベース」は宇宙へとあがった。時を同じくして、シャア・アズナブルの乗る機動巡洋艦「ザンジバル」が、北米のジオン軍地球方面軍「キヤリフォルニア・ベース」から発進した。先遣のホワイトベースを沈め、あとからくる大艦隊の出端をくじくためだ。

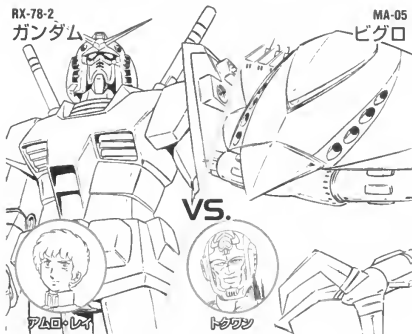
しかし、ホワイトベースの軌道が想定できた瞬間、シャアはこれが罠だったことに気づく。軌道の先が、キシリア・ザビの基地「グラナダ」のある月だったからだ。ホワイトベースだけでグラナダを狙うとは考えられない。地球から一度にあがれる艦隊は知れており、少なくとも数回にわたる大量発進を重ねて、どこかにまず大艦隊を集結させる必要がある。シャアはこれが陽動部隊であると看破した。

### 第31話

### 「ザンジバル、追撃！」

強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、地球連邦軍本部「ジャブロー」から再び宇宙へあがる。それをシャア・アズナブルが追う。





今ごろジャブローからは、別方面の集結拠点に向けて艦隊が発進しているはずだ。

しかし、すでに違う軌道に入っているザンジバルが、いまから軌道を変えて艦隊を迎え撃とうとすれば、ホワイトベースが攻撃をしてくるだろう。腹を据えたシヤアは、まずホワイトベースを撃つ決意を固めた。

ザンジバルからはトクワンのモビルアーマー「ビグロ」と、「ドム」を宇宙用に改造した「リック・ドム」2機が発進した。

ホワイトベースからは、セイラ・マスの「Gプル・イージー」(支援戦闘機Gファイター前部+ガンダムの上半身Aパーツ)、アムロの「Gスカ

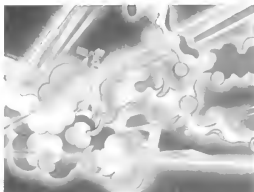
イ」(支援戦闘機Gファイター後部+小型戦闘機コア・ファイター)が出撃した。両軍の母艦はすでに月軌道に乗ったが、縦横無尽に飛び回るモビルスーツたちは、地球の重力に引かれて落下してしまいかねない、非常に危険な戦いとなった。

### ■加速力を生かしたヒット・アンド・アウェイ戦法

ビグロは加速力を活かし、急速に接近しては巨大クローをぶつけようとする。そして、Gブル・イージーを掴み投げ飛ばすと、Gスカイとのドッグファイトに入った。ハヤト・コバヤシの「ガンタンク」

をホワイトベースのハッチの入口に固定して砲台とし、カイ・シデンの「ガンキャノン」を応援に出したあと、慣性飛行に入っていたホワイトベースは、180度回頭。ガンタンクとすべての火器をザンジバルに向けた。

一方ザンジバルは逆に加速し、両艦は次第に距離を縮めた。互いの主砲射程は互角。ホワイトベース主砲は、当日配属されたばかりのスレッガー・ロウが担当し、初弾からザンジバルのブリッジをかすめる至近弾を撃ちこんだ。



ガンタンクを砲台にしてまでの、ホワイトベースの総力戦。ブライは肝を冷やす。



ビグロの高い加速力は、ガンダムを引っ掛けただけでも、アムロを気絶させるほど強烈。

砲撃に次いでミサイルの連続発射。この段階まで砲撃を待ち、一撃必殺を狙ったザンジバルは、砲撃を開始しつつ一直線にホワイトベースに向って突っ込んでくる。2隻が互いに撃ち合いながら交差した瞬間、スレッガーの放った一発が直撃。ザンジバルは、ホワイトベースの後部ミサイルに追われるように戦域を離脱した。

一方、「ガンダム」に換装したアムロは、高速でヒット・アンド・アウェイ戦法を仕かけるビグロに苦戦していた。

そして巨大クローに引っかかり、強烈な加速をくらったアムロは、コクピットで気絶してしまう。

アムロが気づいたとき、ガンダムはビグロの両腕にがっしりと掴まれ、大型メガ粒子砲の目の前に運ばれていた。直後に発射されたビームを身をよじってさけたガンダムは、目の前にあるビグロのメガ粒子砲をビーム・ライフルで至近射撃。間一髪のとこでビグロを撃破した。

そして、セイラの撃墜したリック・ドムと合わせ2機を撃破し、1機のリック・ドムの後退を確認して、戦いは終わった。

キャメル艦隊を殲滅したガンダムの奇襲

# ガンダムVS. キャメル艦隊

## ■機動強化型ガンダムとザクレロの高機動戦

同一軌道を先行する強襲揚陸艦「ホワイトベース」に向け、ザンジバルから1機のモビルアーマーが発進した。

テストパイロットのデミトリーが駆る試作機「ザクレロ」である。すでに放棄された機体だが、デミトリーはその拡散ビーム砲の威力に強い自信をもっていた。

すぐに迎撃に出られたのは、ハヤト・コバヤシの「ガンタンク」で、両者は互いの母艦同士のあいだで戦闘状態に入る。しかし、さすがに地上戦向きのガンタンクと較べると、宇宙用モビルアーマーの動きはすばやく、ガンタンクはザクレロの拡散ビーム砲とミサイルに翻弄される。しかし、そこに超高速でせまる機体があった。アムロ・レイの案で、ガンダムを支援戦闘機「Gファイター」の後部パーツに組み込み、機動力を強化したものだ。ガンダムとザクレロは高機動戦に突入するが、

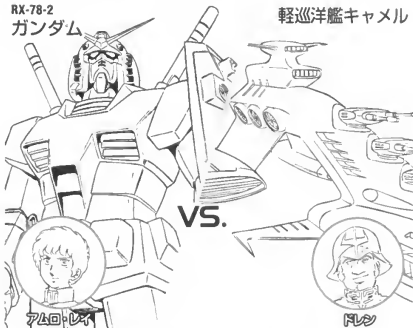
### 第32話 「強行突破作戦」

何としても強襲揚陸艦「ホワイトベース」を追いつめたいシャア・アズナブルは、ついにキャメル艦隊との決戦を立てる。

RX-78-2

ガンダム

軽巡洋艦キャメル



ザクレロの性能に自信をもちすぎたデミトリイは、一瞬の交差のあいだにガンダムに大鎌の一撃をしかける。だが、逆にガンダムのビーム・サーベルにエンジンを貫かれ、大爆発を起こして吹き飛んだ。

### ■ガンダムの奇襲により艦隊撃破

かつて、シャア・アズナブルの副官であったドレン

シャアがガルマ・ザビ戦死の責任をとらされたあとも宇宙攻撃軍に所属し、旗艦「キャメル」を筆頭に軽巡洋艦「ムサイ」3隻を率いて、「キャメル・パトロール」という艦隊を組み警戒任務にあたっていた。

このドレンの指揮する艦隊が、ホ

ホワイトベースの進行方向にあった。シヤアはレーザ―交信回線を開き、ドレンにホホワイトベースの進路を塞ぐよう要請した。

「ご縁がありますな、木馬とは わかりました。追いつけますか?」と、ドレン シヤアは応える。「ドレン、私を誰だと思っているのだ?」。

シヤアはドレンの艦隊指揮能力を買い、ドレンはシヤアが追いつくことを確信していた。すでにホワイトベース包囲網は完成したも同然だった。

対ザクレロ戦から大して間も空かないうちに、ホワイトベースのレーダーはキャメル艦隊をとらえた。

ここで手間どれば、ザンジバルに追いつかれて、包囲されてしまうことは明白だ。「強行突破しかないな。全員、第一戦闘配置だ!」と、艦長のブライト・ノアの声がブリッジに響く。各砲座を開き、カイ・シデンの「ガンキャノン」、ハヤトのガンタンク、セイラ・マスのGファイター、そしてこの戦闘から予備のGファイターでスレッガー・ロウも出撃する。対するキャメル艦隊も、「リック・ドム」を発進。

双方全力で近づきつつ、モビルスーツ戦がはじまった



アムロはGファイターの後部パーツを利用して、カンダムの機動力をあげることに成功する。



ゼロ方向からのガンダムのビーム・ライフル攻撃は、あっという間にスワメルを撃沈させた

まず中央でのモビルスーツ戦で勝ちを納めたホワイトベースの艦載機群は、ホワイトベースを襲っていたリック・ドム3機の別働隊と戦闘を開始。

修理に手間どったガンダムも参戦。リック・ドムを蹴散らし、戦列に加わった。キャメル艦隊は敵モビルスーツがいるであろう空域を砲撃しつつ、ホワイトベースへと急接近。しかし左翼に展開していた軽巡洋艦「トクメル」が、ホワイトベースの集中砲火を受けて爆散

ドレンはガンダムを警戒するが、砲撃の邪魔になるからと前線から引かせたリック・ドムのパイロットもその姿を見ていなかった。

「馬鹿な、ではどこにいるんだ？ ガンダムは」と、ドレン それは間もなく明らかになった。ゼロ方向から急接近する高熱源体。それはガンダムの撃ちこんだビーム・ライフルだった。

わずか5射でスワメルを撃沈すると、飛びこんできたガンダムは、キャメルのブリッジをビーム・サーベルで斬り裂く。つづいてリック・ドムをも斬り倒し、ビーム・ジャベリンでキャメルにとどめをさすのだった。

敵をまったく寄せつけない圧倒的技量の差

# ガンダムVS.リック・ドム

## ■神がかり的なアムロ・レイの戦闘

ジオン公国、地球連邦政府のどちらにも属さない、中立のスペース・コロニー「サイド6」。このコロニーは、両国の軍艦の寄港は禁止しないが、武器に厳重な封印を行い、領空内での戦闘を一切禁止していた。

戦いの損傷が大きい強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、修理を必要としていたが、それも戦争協力になる。しかし、協力を申し込めた企業家がいた。

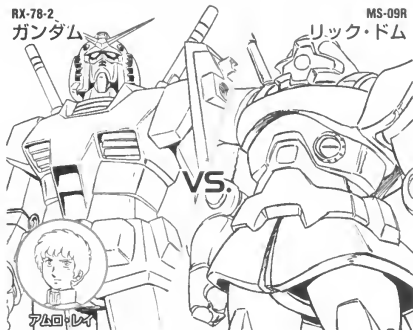
ペルガミノ。彼はサイド6の実業家だが、領域外に大きな浮きドッグをもっていた。浮きドッグは領域外にあり、かつジオンや連邦の高級官僚・政治家とも太いコネクションをもっていたため、そこは一種の休戦地帯となっていた。両国の軍艦でも、報酬次第で修理をしていた。ホワイトベースは、そのペルガミノの申し出を受けることにした。しかし実際は、ペルガミノすら知らぬところで、ホワイトベース

第33話  
「コンスコン強襲」

第34話  
「宿命の出会い」

中立地帯の領空外で待ち構える、3隻の巡洋艦と12機の「リック・ドム」。強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、狙われていた。





を狙う毘がしかけられていた。

ジオン公国軍宇宙攻撃軍司令官ドズル・ザビの命で送り込まれたコンスコン機動部隊の待ち伏せだった。

サイド6領空内に密かに侵出したカヤハワの「リック・ドム」が、ホワイトベースがサイド6の領空外に出るようすをキャッチし、信号弾で艦隊に報告した。旗艦の重巡洋艦「チベ」と、2隻の軽巡洋艦「ムサイ」からなるコンスコン機動部隊は、12機の「リック・ドム」を発進させ、ペルガミノの浮きドックの陰に隠れ、至近距離までホワイトベースに近づくと、ドックの隔壁を撃ち抜く猛烈な艦砲射撃を開始した。次の瞬間、ドックの裏から現れたリッ

ク・ドム隊が一斉にホワイトベースへと躍りかかる。条約違反ではあったが安全を確保するため、アムロ・レイの「ガンダム」、カイ・シデンの「ガンキャノン」、ハヤト・コバヤシの小型戦闘機「コア・ファイター」、スレッガー・ロウとセイラ・マスの支援戦闘機「Gファイター」2機がホワイトベース周囲の護衛に出ていたため、すぐさま戦闘へと突入。

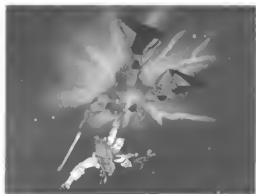
そんななか、アムロの活躍は特に際立っていた。アムロの無駄のない攻撃は、「ひとつ！ ふたつ！ ー」と、面白いようにリック・ドムを倒していく。

結果アムロは9機、カイ、セイラ、スレッガーが各1機ずつと、リック・ドム全12機を3分とかららずに撃破した。

コンスコンはその報告に、「ぜ、全滅？ 12機のリック・ドムが全滅？ 3分もたわずにか？」と、驚愕するのだった。

## ■冴えわたるガンダムの動き

さて、浮きドックの戦闘の件もあり、サイド6から退去することになったホワイ



アムロは、面白いようにリック・ドムを倒していく。3分ほどで12機中、9機も撃破した。



コンスコンの言うとおりシャアは、この戦闘をテレビ中継でララァ・スンとともに観ていた。

トベース。ここに、再びコンスコン艦隊が攻撃をかける。コンスコン部隊のパイロットたちは、動きを読むような動きを見せるガンダムに恐怖した。

そのため、ガンダム1機を複数でとり囲み、攻撃しながら接近と退避をくり返す、かく乱戦法に出る。多数のリック・ドムが動き回れば、たとえガンダムといえども必ず死角ができるはず。その死角に潜りこんだ機体が、必殺の一撃をあたえようという作戦である。しかし、囨に氣をとられていると思ったガンダムは、背後に忍び

よる機体を振り向きざまに撃ち倒す。「見える、動きが見える」と、アムロ。

すべてのリック・ドムを失い、僚艦のムサイも1隻大破し、覚悟を決めたコンスコンは、「シャアが見てるんだぞ、シャアが 突攻せよ! このチベを木馬のどてつばらにぶつけい」と、チベをホワイトベースに向けて突出させる。

しかし、この判断が命とりとなる。高速で接近したガンダムが、船底と船腹の機関部周辺に、ピーム・サーベルを突き刺した。チベは撃沈し、コンスコン機動部隊はここに潰えることとなった。

ソロモンの守護神に立ち向かうふたりの戦士

# Gアーマー VS. ビグ・ザム

## ■新兵器の焦熱地獄、太陽に焼かれるソロモン

ジオン公国軍のコンスコン艦隊を敗り、スペース・コロニー「サイド6」を脱した強襲揚陸艦「ホワイトベース」。その後、ワッケイン艦隊の一翼となり、ジオン軍の宇宙要塞「ソロモン」攻略戦の先陣を切ることとなった。ティアンム艦隊の本隊が、新兵器を稼働させるまでの、15分の時間稼ぎ。それが彼らの任務だった。

一方、ジオン公国本国から一番離れているソロモンでも、決戦準備が進められていた。しかし、再三再四の要請にもかかわらず、本国から送られてきた増援物資は、開発中の巨大モビルアーマー「ビグ・ザム」のみ。

ソロモンの周囲には、戦火で滅んだスペース・コロニー「サイド1」と「サイド4」がある。ワッケイン艦隊は、サイド4の残骸の陰から接近し、ソロモンの第三警戒ラインを踏み越えた。そこから先は身を隠す術はない。到達距離ぎりぎりから、

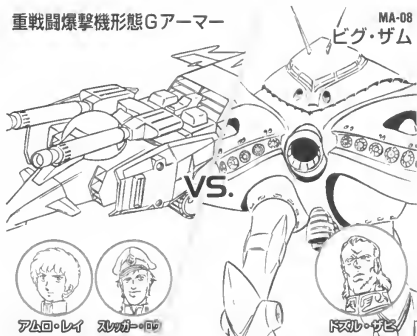
第35話  
「ソロモン攻略戦」

第36話  
「恐怖! 機動ビグ・ザム」

ジオン公国軍の重要拠点である宇宙要塞「ソロモン」。その攻略戦で、強襲揚陸艦「ホワイトベース」は先鋒を務める。

重戦闘爆撃機形態Gアーマー

MA-08  
ビグ・ザム



実弾砲、ビーム砲による遠距離攻撃を行い、敵の応戦がはじまったら、「パブリック」突撃艇によるビーム攪乱膜散布を開始する。

そのためソロモン側は、すぐさまビーム攻撃からミサイル攻撃に切り替えた。両軍モビルスーツの乱戦にもつれ込むが、ドズルは、いまだに消息の掴めぬティアンム艦隊本隊のことが頭から離れない。

やっと見つかった敵艦隊は、序攻勢力とは反対の、サイド1の残骸群にあった。

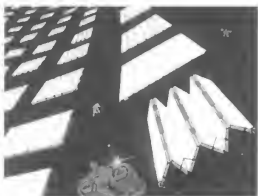
ドズルは適当な大きさの岩塊に制御システムとバーニアをとり付けて敵に投射する、簡易兵器「衛星ミサイル」を放ち、艦隊を送る。

しかし、時すでに遅く、ティアンム艦隊は新兵器「ソーラ・システム」を完成させ、照準をソロモン右翼スペース・ゲートへと定めた。ソーラ・システムとは、簡単にいえば、宇宙に浮かぶ無数の鏡である。

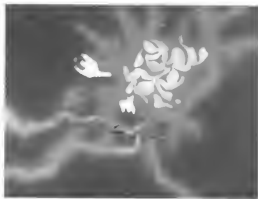
制御艦のコントロールで反射角を制御し、太陽光を一点に集めることで灼熱地獄が生じる。ソロモンは今、凄まじい太陽の熱によって灼かれていた。「第6ゲート消えました、敵の新兵器です。リーダー反応なし、エネルギー粒子反応なし!」と、オペレーター。被害部署との連絡が次々と不通になる。

そのころホワイトベース隊も奮戦していた。ハヤト・コバヤシの「ガンタンク」が被弾負傷して艦に戻ったが、ほかの機体はまだ戦い続けている。ドズルは、軌道上にある衛星ミサイルを全弾発射し、次にくる大攻勢に備え、無事なモビルスーツを要塞内に引きあげさせた。ソロモン水際で防衛線を張るのだ。最初にソロモンにとりついたのは、「ガンダム」だった。

ホワイトベース経由でその情報を得たティアンム提督は、艦隊旗艦「タイタン」から、各艦に「ジム」と「ボール」の突入隊を発進させるよう命じた。



ソーラ・システムは、無数の鏡で太陽光を一点に集める一種の太陽炉だ。



ガンタンクのパヤトは被弾し、深手を負って戦線を離脱する。これにより戦力は11パーセント低下した。

ドズルは、妻子を脱出させ、最終決戦を決意。すべてのモビルスーツ、すべての戦闘爆撃機「ガトル」を出撃させ、自らもビグ・ザムで出撃した。

### ■群がる艦隊をなぎ倒す脅威のモビルアーマー

両軍入り乱れての混戦のなか、スレッガー・ロウの支援戦闘機「Gファイター」が左翼エンジンに被弾してホワイトベースに戻り、10分で修理・補給を終え、再び出撃した。このとき、ブリッジ・クルーのミライ・ヤシマが待機室を訪れ、想いを告白する。これがふたりの最後の会話となった。

一方、要塞内では、攻め込んだ連邦軍のモビルスーツが次々と倒されていた。ドズルの乗ったビグ・ザムは、大型メガ粒子砲や拡散ビーム砲で、狭い要塞内の連邦軍をなぎ払っていった。ドズルは司令室に命じ、全稼働艦艇に敵の主力艦隊中央を突破させ、自らもモビルスーツを率いてソロモンから打って出る決意を固めた。時を同じくして連邦軍は、生き残ったミラーを使ったソーラ・システムの第二射

と、全艦総攻撃開始を指示。連邦軍全艦がソロモンにせまる。一方ジオン軍艦艇も連邦軍艦隊を目指して殺到する。そのときソーラ・システムの第二射が放たれ、ジオン軍艦艇は灼かれてしまう。要塞内部で戦っていたガンダムは、ビグ・ザムが要塞から出撃するところを目撃し、そのあとを追った。

ドズルは「後方指揮艦を狙う。雑魚には目もくれないな」と宣言、向ってくる巡洋艦「サラミス」のビーム砲をビーム偏向フィールドで弾き、大型メガ粒子砲を一閃。次々と群がる連邦軍艦艇を引き裂いて、最後には艦隊旗艦タイタンを光のなかに蒸発させた。

しかし、敗北を悟ったドズルは、「ソロモン放棄、各自脱出」の発光信号を撃ち、自らは死の覚悟を固めるだった。

## ■最後まで抵抗を続けたドズル・ザビの執念

ビグ・ザムの戦闘力に唖然とするアムロに、スレッガーのGファイターが「Gアーマー」への合体を提案する。「こっちのビームが駄目ならガンダムのビーム・ライ



スレッガーは、これ以上ビグ・ザムによる被害を広げないために、Gアーマーで突っ込もうと提案する。





ドズルは、最後の最後まで戦いを止めなかった。その執念は、アムロに悪魔のような黒い影を見せた。

フル、そしてビーム・サーベルだ。いわば三重の武器があるとなりや、こっちがやられたって……」「私情は禁物よ。奴のためにこれ以上の損害は出させねえ。悲しいけど、これ戦争なのよね」と、スレッガー。ビグ・ザムの足下の死角をつくGアーマー。ミサイルになっている脚の爪、クローに機首部を両側から貫かれつつビーム砲発射。しかしこれはビーム偏向フィールドに弾かれ、ビグ・ザムの巨大な脚にがつしりと掴まれる。ガンダムのビーム・ライフルが脚の付け根に命中し吹き飛ばすが、先ほどのクローがGファイター機首を潰し、スレッガーはコクピットから飛ばされて戦死する。それに憤怒したアムロはガンダムに分離し、ビグ・ザムのノズルからエンジン撃ち、ビーム・サーベルでビグ・ザム上面のコクピットを狙う。そこでアムロは見た。「ジオンの栄光、この俺のプライド！ やらせはせん！ やらせはせん！ やらせはせんぞー!!」。ビグ・ザムの外に出て最後までガンダムに小銃を撃ち続けるドズルを。そしてビグ・ザム爆発の間に、ドズルの執念の影を見るのだった。

戦略家マ・クベの裏と三つ巴の戦い

# ガンダムVS.ギャン

■死の砂漠と化したテキサスコロニーに、誘い込まれたガンダム

ジオン公国軍の重要拠点、宇宙要塞「ソロモン」攻略作戦は成功を収めた。その後、強襲揚陸艦「ホワイトベース」は、ソロモンを脱出したジオン軍の掃討作戦で、月と地球のあいだに浮かぶスペース・コロニー「サイド5」の跡地にいた。

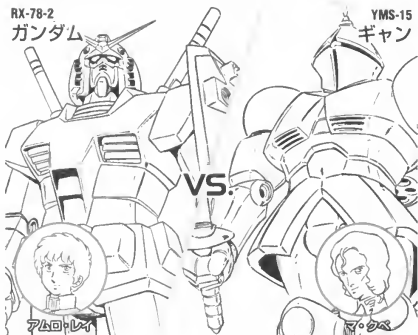
そのなかのコロニー「テキサス」は、レジャーと牧畜業の目的でつくられたが、戦争で荒廃し、軍事的な重要性もないため、今は住む人もなくとり残されていた。

また、テキサス・コロニーの周辺は、岩と戦争で破壊されたコロニーの残骸が浮かぶ暗礁空域で、テキサスゾーンといわれていた。

ホワイトベースのブリッジで対空監視をしていたマーカーが、第三戦闘ラインの端にジオン軍の巡洋艦「チベ」の存在をとらえた。さらに奥、テキサスゾーン内にも戦力が潜んでいるらしい。ソロモンを脱出した敵艦とみて艦長のブライト・ノア

## 第37話 「テキサスの攻防」

キシリア・ザビの第一の腹心の座を守らんと、「ギャン」で直接戦場に出るマ・クベ。姑息な戦法がガンダムを襲う。



は、アムロ・レイとセイラ・マスに「Gアーマー」（支援戦闘機Gファイター＋ガンダム）での出撃を命じた。アムロたちがまず遭遇したのは「リック・ドム」だった。分離したアムロの「ガンダム」とセイラの「Gファイター」は、戦闘を開始する。

気づかぬうちに少しずつテキサスゾーンへと近づいていくふたり。しかし、これはマ・クベが仕組んだ罠だった。

あらぬ方角から「ギャン」の嵐のような小型ミサイル弾幕を受けるガンダム。アムロは「こいつのところへ誘いこむための作戦だったのか!」と叫ぶや、ギャンとの間合いをつめる。それに合わせて後方に退

くギャン。すると、今度はギャンの立っていた岩が大爆発し、ガンダムは爆炎に吞まれた。

## ■人智を超えたアムロ・レイの能力

瞬間、勝利を確信したマ・クベ。しかし、アムロは直感で回避し、無事だった。ギャンはテキサス・コロニー内部へと逃げ込む。それを追うガンダム。しかし、ゲートには罠がしかけられており、進入は容易ではなかった。

乾燥し切って砂嵐舞う視界の悪い大気の奥からまたもや小型ミサイル攻撃。次は無数の小型浮遊機雷と、マ・クベは巧みな罠を張りめぐらせていた。

そのころ、テキサス・コロニー内にアムロが進入したのとは反対側の港から、シヤア・アズナブルが新しく届いたばかりの「ゲルググ」で出撃した。

砂嵐を通していても爆炎や閃光がほとばしるため、モビルスーツ同士の戦いはすぐに見つけることができた。遠距離から一撃するが、気づいたガンダムも応射。岩山の周囲でガンダムと赤いゲルググの激しい攻防がはじまる。



キシリアがマ・クベ専用につくらせたギャン。その愚に報いるためにも、シャアの助太刀を断わる。



ギャンは優秀な機体だったが、アムロはモビルスーツの優劣を覆すほどのパイロットになっていた。

だがこのとき、シャアの助太刀をマ・クベは断わる。長年仕えてきたキシリア・ザビの腹心の座を、最近頭角を現してきたこの若い男に、明け渡すわけにはいかない。そのためにもガンダムは、マ・クベ自身の手で倒す必要があったのだ。「私なりの戦い方があるからこそ、ガンダムを引き込んだのだ」というマ・クベの言葉に、シャアはゲルゲクを退かせるのだった。

本来、白兵戦における機体能力の高さを目指したモビルスーツであるギャンは、ビーム・サーベルの斬り合いにこそ強さを発揮する。数々の罠は、ガンダムの破壊を狙ったものではなく、邪魔なビーム・ライフルを撃ち尽くさせて、ガンダムと剣で渡り合うためのものだった。しかし、データに頼るあまり、マ・クベは読み違えていた。

この時期、アムロの能力は超人的なまでに高まり、過去のデータなど何の役にも立たなかったのだ。マ・クベのギャンは、完全に力負けしていた。

「ウラガン、あの壺をキシリア様に届けてくれよ。あれはいい物だー」と、その命が消える直前、マ・クベは叫んだ。

「赤い彗星」を超えたアムロ・レイの覚醒

# ガンダムVS. シャア専用ゲルググ

## ■手負いのガンダムに忍びよる赤いゲルググ

マ・クベの数々の罠をかくぐり、テキサス・コロニー内で「ギャン」を倒した、アムロ・レイの「ガンダム」。

ビーム・ライフルのエネルギは切れていたが、まだ近くに潜んでいるであろう、赤いモビルスーツを追った。

そのとき、彼方にサンドバギーを発見した。そして、なぜだかわからないが、そこに乗る少女が、かつてスペース・コロニー「サイド6」で出会った少女ララアだということがわかった。

バギーを追おうとしたガンダムの背後に、忍び寄るゲルググ。だがその瞬間、ガンダムは身をかわし、シャアのビーム・ライフルをさける。

ビーム・サーベルを構えるガンダム。だが、猛烈な砂嵐のなか、身を隠したゲル

### 第38話

#### 「再会、シャアとセイラ」

ギャンとの戦いでビーム・ライフルを失い、傷ついたガンダム。しかし、砂嵐のなかでは、新型の赤いモビルスーツが暗躍していた。



ググは視認できない

■ ニュータイプを怖れる「赤い彗星」

「厄介なことになりそうだな。ガンダムのパイロットもニュータイプだとはな……。もう一度、試してみるか」。シャアは隠れていた岩陰から乗り出してもう一射しかける。

しかし、ガンダムはあらかじめ射線が見えていたかのように、ひらりと身をかわし、ゲルググめがけて突進してくる。

そのガンダムに向けてビーム・ライフルを撃つが、すべてかわされてしまう。

「間違いなさそうだな。私の射撃は正確なはずだ、それをことごとく外

すとは」。すでに、モビルスーツの戦いにおいて、アムロの実力はシャアを超えていた。

「ニュータイプ」。宇宙に適応した、互いにわかり合える人々。

シャアの父、ジオン・ズム・ダイクンの唱えたその思想は、当時、宇宙にすむ開明的な人々という程度の社会用語と受けとられていた。

だが、全人口の半数が失われるような宇宙時代の戦争を経験した人類のなから、本当に人類の革新とも呼ぶべき能力者が現れた。

それが敵であることの恐怖を、シャアは今、噛みしめていた。

一刻も早く倒さねば、さらに強大な敵に成長しかねない。

とつさにライフルで周囲の岩肌を撃ち、落ちてくる岩の破片をガンダムがかわしている隙に身を隠したが、すでにシャアは追い込まれつつあった。

こちらは最新型ビーム・ライフルを持ち、相手は白兵戦用のビーム・サーベルしか持たないにもかかわらず。



ガンダムのパイロットが、ララアと同じニュータイプだと確信したシャアは早期決着を望んだ。





新鋭機ゲルググは、まだ十分な調整を行っていないため、シャアは思うように操縦できていない。

ゲルググは砂嵐を利用して移動し、ガンダムの周囲のあらゆる方角からビームを撃ちこむが、ほぼかわされ、逆に岩陰に隠れているところを、飛びあがったガンダムに頭上から斬りつけられ、ビーム・ライフルを持つ手をやられてしまう。

シャアはビーム・ナギナタを振るい、ガンダムのビーム・サーベルと渡り合う。しかし、ここでガンダムに大きな問題が生じた。

あまりにも先鋭的になり過ぎたアムロの勘に、ガンダムの動きがついてこれないのだ。

烈火の如く攻撃をしかけるゲルググ。「もう少し早く反応してくれ!」と、叫ぶアムロ。

しかし、それでもガンダムはゲルググの攻撃をかわし、ゲルググの脇腹に大きな損傷をあたえ、退ける。

その後シャアは、間髪いれずに偽の爆発を起こし、ゲルググがやられたことを演出するが、「偽の爆発で、あのパイロットをだませたとも思えんが」と、自答しつつ退却する。

縦横無尽に走るビームの閃光

# ガンダムVS.ブラウ・ブロ

## ■史上初のニュータイプ同士の戦闘

攻略した宇宙要塞「ソロモン」は、すでに地球連邦軍基地として、ジオン公国本  
国攻略の拠点となっていた。そこに、このところ奇妙な攻撃が続いていた。

ソロモン周辺の連邦軍の部隊が、突然ビーム攻撃を受けるのだ。姿も見せなけれ  
ば所在も掴めない、姿なき敵。ただ攻撃が起こるとき、多くの兵士が「ラ、ラ…」  
という声を聞き、誰かに呼ばれている気がしたという。

それは、ニュータイプ専用モビルアーマー「エルメス」の装備するビットによる  
ものだった。ビットは広範囲を自由に飛び回るビーム砲台で、遠隔操縦ができる新  
兵器。ララ・スンは、ビットを操作できる貴重なパイロットのひとりだった。

シャア・アズナブルの指揮するこのニュータイプ部隊に、新たなパイロット候補  
が送りこまれてきた。数年かけて木星までヘリウム採取に行くエネルギー船団の隊

### 第39話

#### 「ニュータイプ、シャリア・ブル」

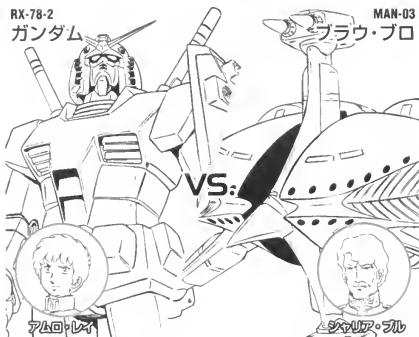
ニュータイプ部隊に編入さ  
れた、シャリア・ブル。彼  
はニュータイプ専用モビル  
アーマーで、「ガンダム」と  
対峙する。

RX-78-2

ガンダム

MAN-03

ブラウ・プロ



長を務めたシャリア・ブルという男である。まずは、有線式メガ粒子砲を多数装備したニュータイプ専用モビルアーマー「ブラウ・プロ」を与えられた。

シャリア・ブルに最初の任務が下った。連邦軍の「ガンダム」のパイロットは、彼らと同じニュータイプらしい。「つまり、連邦はすでにニュータイプを実戦に投入しているということだ」と、シャア。あり得ることと断じたシャリア・ブルは、連邦軍のニュータイプ部隊を壊滅させるべく、史上初のニュータイプ同士の戦闘に挑む覚悟を決めた。

ソロモン要塞周辺に停泊する強襲揚陸艦「ホワイトベース」に、迎撃

機の発進要請が下る。アムロ・レイのガンダム、カイ・シデンの「ガンキャノン」、セイラ・マスの支援戦闘機「Gファイター」、そしてソロモン攻略時の負傷から復帰したばかりのハヤト・コバヤシの「ガンタンク」である。

そして指揮所が「敵バトロール艇」と判断した機体こそ、ブラウ・ブロであった。ブラウ・ブロは静かに戦闘状態に入る。

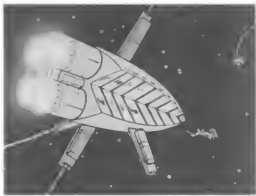
## ■有線式メガ粒子砲のオールレンジ攻撃

アムロはこのときすでに、敵がララァ・スンではないと感じていた。一方、シャリア・ブルも異様な威圧感を受けていた。「敵のパイロットはこちらの位置と地球の一直線を読めるのか？」。

ガンダムは、ブラウ・ブロの位置を把握したうえで、地球光に紛れるように回りこんできた。最初の発砲はガンダムのほうが早かった。その一撃をブラウ・ブロは易々とかわす。そして、有線式メガ粒子砲を長く伸ばし、上下からガンダムを挟みこむように攻撃をしかけた。シールドを半分に叩き割られながらも、それを避ける



ソロモン攻略戦で戦死したティアナム提督に変わり、艦隊の指揮を執る事になったレビル將軍。



シャリア・ブルは、ガンダムの接近を有線式メガ粒子砲で防御するが、アムロの操縦のほうが早かった。

ガンダム。「あのパイロットこそ真のニュータイプに違いない」シャリア・ブルは感嘆した。そこにガンキャノン、ガンタンク、Gファイターの攻撃がヒットする。だが、この3機はブラウ・プロの反撃に翻弄される。

上下左右から撃ちこまれる有線式メガ粒子砲に、ガンキャノンの両足が砕かれた。アムロが叫ぶ。「下がれ、この敵は違うんだ！」。

一方、アムロは反射についてこれないガンダムがもどかしい。さらに、敵が1機にもかかわらず縦横無尽にビームが走ることが、アムロを混乱させた。しかし冴えわたるアムロの勘は、ついに有線式メガ粒子砲を直撃した。操縦系のオーバーヒートがかえってアムロを冷静にさせた。

有線式メガ粒子砲の迎撃をかくぐり、一気にブラウ・プロに接近、とどめの一撃を撃ちこむ。

かろうじて勝利を掴んだアムロ。だが、その反射速度にガンダムの操縦系が完全についてこない。

「今、さっきのような敵がきたら、もうアウトだぞ」とアムロは、勝利の喜びより、これからの戦いに不安を募らせるのだった。

最強のニュータイプといわれたふたりの運命的戦い

# ガンダムVS.エルメス

## ■ニュータイプたちの覚醒

地球連邦軍のモビルスーツ「ガンダム」に乗るアムロ・レイと、ジオン公国軍のモビルアーマー「エルメス」に乗るララァ・スン。実際にふたりが顔を合わせたのは、それぞれの母艦がスペース・コロニー「サイド6」に寄港したときだけ。それもすれ違う程度のことと、直接まともな会話をしたわけではない。

しかし、戦いのなかでアムロは、自分たちが「トンガリ帽子」と呼ぶ緑色のモビルアーマーに乗るのがララァであることを知覚していた。ララァも同様に、ガンダムのパイロットが、アムロであることを知っていた。ここにいたり、本人も周囲も、経験に基づく洞察・推察でも、勘でもない、もつと高度な「わかり合える力」が、彼らに備わっていることを自覚した。

ただし、戦争という局面では、その能力も戦うために使わなくてはならなかった。

### 第41話 「光る宇宙」

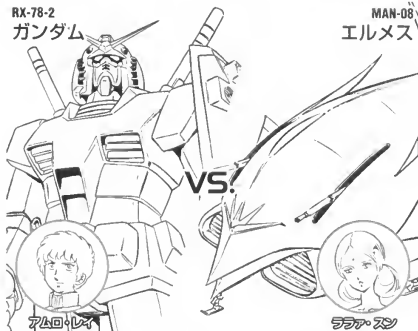
キシリア・ザビとシャア・アズナブルは決戦をまえに、地球連邦軍のニュータイプ部隊に的を絞り、「ガンダム」に襲いかかった。

RX-78-2

ガンダム

MAN-08

エルメス



アムロ・レイ

拉拉・辛

シャア・アズナブルとキシリア・ザビの艦隊は、強襲揚陸艦「ホワイトベース」ら地球連邦軍第13独立部隊を再度急襲した。

戦艦「グワジン」を残し、機動巡洋艦「ザンジバル」を先頭に突撃隊形をとる艦隊。さらにその前にモビルスーツ部隊という、3重の構えだ。ジオン軍がFラインを突破した段階で、ホワイトベースのガンダム部隊は出撃。ホワイトベース隊は押し気味に戦場を支配しつつあった。

### ■遅すぎた出会い

モビルスーツ戦とは別に、艦隊戦も発生。双方2隻ずつ失った。

「よし、対空砲火。次はモビルスー

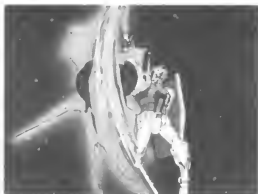
ツ戦だ、くるぞ！」と、艦長のブライト・ノアは叫ぶ。「む、トンガリ帽子だな」と、間髪いれずにアムロが反応する。

ガンダムを狙って多くの無線ビーム砲台ビットが飛来する。アムロがコントロールを読んで、はじからビットを撃ち落とすと、「ラ、ラ…」という声が聞こえ、エルメスが姿を見せた。激しく交錯し、ビームを放つ2機。しかし互いにかわす。

「アム、ロ？」「ララ…？」不意に互いの名を知覚し合うふたり。「ララアならなぜ戦う？」「シヤアを傷つけるから！」。敵味方のコクビットに座りながら、

ふたりは会話を交わした。覚醒したニュータイプ同士の共鳴。「なぜあなたはこうも戦えるの？ あなたには守るべき人も、守るべきものもないというのに！」。ララアはアムロに問う。一方で激しい戦闘を続けながら、ふたりは心を通わせ合う恋人のように、気もちを重ねていく。

「ララア、奴との戯れ言は止めろ！」。ビーム・ライフルを撃ちながら割って入ったのは、シヤアの「ゲルググ」。ガンダムはゲルググのビーム・ライフルを斬りすて、



ララアの思念を読み、エルメスのビットをビーム・サーベルで斬りつける、アムロのガンダム。





アムロとララアは共鳴し、わかり合えた。しかし、互いに武器を置くことはできなかった。

ビーム・サーベルとビーム・ナギナタの戦いになる。ここにセイラ・マスの支援戦闘機「Gファイター」が駆けつけ、4機の激しい乱戦となった。シヤアの「ララア、私はガンダムを討ちたい。私を導いてくれ」との言葉に、ララアは心を決めるしかなかった。「…お手伝いします、お手伝いします、大佐」。

ゲルググのうしろを、ビーム・キャノンで狙うGファイター。それを斬り伏せようとしたシヤアにララアが叫んだ。「大佐、いけない!」。シヤアは「アルティシアか」と、そのパイロットが妹であることに気づく。

その一瞬の隙にガンダムはゲルググの片腕を得物ごと斬り落とし、渾身の突きをゲルググのコクピットに向けて放つ。と、そこに割りこんだのがエルメスだった。ビーム・サーベルはそのままエルメスを貫き、悲鳴とともにララアの思念が再びアムロとつながる。以前にも増して深く、永遠のような一瞬。「ああ、アムロ、時が見える…」。そう言い残してララアの意識と身体は宇宙へと飛散した。残されたアムロもシヤアも、すでに戦闘不能で帰投するしかなかった。

宿命のライバルが迎えた最終決戦

# ガンダムVS.ジオング

## ■もてるすべてを投入した両軍

宇宙要塞「ソロモン」戦でティターンズ提督、ジオン公国軍の新兵器ソーラ・レイで、レビル將軍と、最高指揮官をふたりも失いながら、地球連邦軍残存艦隊は「星一号作戦」遂行を決定した。しかし、決戦艦隊に予備戦力がない。虎の子の主力艦隊を欠き、予定より3割少ない兵力、それが彼らのもつすべてだった。

第二大隊と第三大隊は、宇宙要塞「ア・バオア・クー」のNポイントから進攻。一方、戦艦「ルザル」を旗艦とした残存艦艇はSポイントから進む。強襲揚陸艦「ホワイトベース」もルザル艦隊にいた。

兵力は十分とはいえないが、要塞にとりつけさえすれば勝機あり。それはソロモンを落とした経験からくる連邦軍の自信だった。

ジオン軍キシリア・ザビの戦艦「グワジン」が、シャア・アズナブルを伴って入

第42話  
「宇宙要塞ア・バオア・クー」

第43話  
「脱出」

地球連邦軍はジオン公国軍の最後の砦、宇宙要塞「ア・バオア・クー」に総攻撃をかける。宿命のふたりもまた最終決戦を迎える。



港したのは、すでにNフィールドの戦いが混戦となりつつあるころだった。ギレン・ザビは予備兵力と、まだ敵影のないSフィールドから半数を引き抜き、Nフィールドへ振り分ける。ギレンは満足げに笑う。「フフフフッ、圧倒的じゃないか、我が軍は！」。

しかし、Nフィールドの敵を追いつ立てるため、艦隊を前へ出したところに、新たな連邦軍艦隊が出現。時を同じくしてSフィールドからルザル艦隊が侵入。司令室のキシリアは、ニュータイプ専用モビルスーツ「ジオング」を与えたシヤアに、Sフィールドの敵艦隊撃滅を命じた。ジオングは、迎撃のミサイルをか

わしつつ次々と連邦軍艦を沈めてゆく。そして、宿敵「ガンダム」と遭遇した。

アムロもジオングをみつけ、「大物だ。シャアか？」と、言いつつ接近を試みる。ジオングは、モビルアーマー「ブラウ・プロ」に似た有線ビーム砲を両腕の先に装備していた。上下左右から縦横無尽にビームを放つ、ジオング。しかし、今は要塞にとりつくほうが先だった。「本当の敵はあの中にいる、シャアじゃない」と、離脱したアムロは要塞内へと急ぐ。

そのころ司令室では、ザビ家の兄妹、ギレンとキシリアのあいだで確執に火がついていた。

「グレートデギンには父が乗っていた、そのうえで連邦軍とともに……。なぜです？」と、つめよるキシリア。「タイミングずれの和平工作がなんになるか？」と、あざ笑うギレン。この言葉にキシリアは躊躇しなかった。「意外と兄上も甘いようではない」。銃声が響き、ギレンの身体が宙に舞った。「父殺しの罪はたとえ総帥であっても免れることはできない！」。キシリアの言葉に参謀トワニングが動き、「ギレン総帥は名誉の戦死をされた！」と叫ぶ。この言葉に、兵たちは今が決戦の真つ最中で



シャアに与えられたジオングは、脚をもたない代わりに、強力なバーニアで高い機動力をもっていた。



父を殺した兄を許せないキシリアは、要塞の司令室でギレンを撃ち殺し、全軍の指揮権を掌握した。

あることを思い出した。キシリアが指揮権を握るまで、わずか数分。しかし連邦軍先鋒はもう、ア・バオア・クーのすぐそこまでまっつていた。

### ■激突する宿命のふたり

ア・バオア・クーにとりついたガンダムは、追ってきたジオングと壮絶な戦いをを行う。10数本のビームが飛び交い、組み合う2機。

「なぜ、ララアを巻き込んだんだ？ ララアは戦いをする人ではなかった！」と、アムロの怒りはシャアを圧する。ジオングは両腕を、ガンダムも片腕を失い、戦いはア・バオア・クー上に。ガンダムの一射がジオングの胸を貫くが、ジオングのコクピットはそこではなかった。頭部だけで脱出したシャアは、ガンダムの頭部を吹き飛ばす。アムロは「まだだ、たかがメインカメラをやられただけだ！」と冷静に、頭部だけとなったジオングを追った。このとき、ホワイトベースもすでに両エンジンをやられ、要塞内に着底。急遽戻った「ガンキャノン」「ガンタンク」

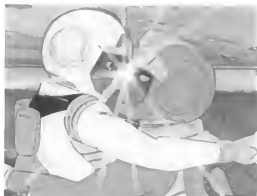
もともに破損し、白兵戦に突入していた。

要塞内に踏みこんだアムロは、自動操縦に切り替えシヤアの罠を回避。ビーム・ライフルでジオング頭部のビーム砲と刺し違え、ガンダムは崩れ落ちた。「今の僕になら本当の敵を倒せるかもしれない」と、拳銃を手に指揮官を狙うアムロ。彼にはザビ家の頭領がわかつていた。「その力、ララァが与えくれたかもしれないのだ。ありがたく思うのだな」と、シヤアが語りかける。彼もまた自動操縦で罠を張り、脱出していた。「今、君のようなニュータイプは危険すぎる。私は君を殺す」。互いにバーニアバックを背負ったシヤアとアムロは、要塞内部で銃撃戦を繰り広げた。支援戦闘機「Gファイター」を脱出したセイラ・マスが兄の気配を感じ、彼らを捜し出したときにはすでに弾丸が尽き、飾られていたフェンシング用の剣で戦っていた。

「わかるか？　ここに誘い込んだわけを」。「ニュータイプでも体を使うことは、普通の人と同じだと思ったからだ」と、アムロが返す。「ふたりが戦うことなんてないのよ！」と、セイラが割って入るが、そうこうしているうちにふたりは交差し、ア



ガンダムのラストシューティング。この後ビーム・ライフルが再び火を噴くことはなかった。



アムロとシャアは、ついに決着がつかなかった。彼らが再び相見えるのは、何年も先のこととなる。

ムロの剣がヘルメットを割ってシャアの額に、シャアの剣がアムロの右上腕に刺さる。そして、その瞬間ふたりは、ラアの「ニュータイプは、殺しあう道具ではない」と、いう言葉を聞く。そのときだった。

突然爆発が起こり、アムロ、シャアとセイラは離れなければならない。アムロとの決着はつかぬまま、シャアは、「ザビ家の人間は、やはり許せぬとわかった」と言い残し、キシリアを討つため脱出艦をめざした。

要塞の奥へと流されたアムロは、乗り捨てたガンダムを見つけ、コア・ファイターに乗り込んだ。このとき、ホワイトベースのクルーはみな、アムロの声を聞いた。「退艦しないと全滅する」。その声に導かれ、小型艇「ランチ」で脱出したが、そこにアムロの姿はなかった。あきめかけたとき、要塞の爆炎のなかからコア・ファイターが飛びだしてくる。

アムロは、「ごめんよ、まだ僕には帰れるところがあるんだ。こんな嬉しいことはない。わかってくれるよね？ ララアにはいつでも会いにいけるから……」と、仲間のもとに帰還していった。

## 伝説となったニュータイプ部隊の戦い

「一年戦争」後、ニュータイプ部隊として有名になる第13独立部隊こと、強襲揚陸艦「ホワイトベース」の戦い。それは、はからずもモビルスーツ「ガンダム」のパイロットとなり、またホワイトベースクルーたちの中心的人物となったアムロ・レイの成長の物語でもある。

当初、ホワイトベースは本来のクルーを失い、一部の若き将校と民間人だけで敵中を突破することをよぎなくなされた。そんなホワイトベースを追撃していたシャア・アズナブルを初めとするジオン公国軍もまた、当初の目的はホワイトベースを倒すことではなく、地球連邦軍の新兵器であるホワイトベースやガンダムの秘密を探り、あわよくば手に入れることだった。

そのおかげでホワイトベースは、本格的な攻撃にさらされることなく、クルーたちは少しずつ実戦になれ、成長していくことができた。

もちろん、それが可能であったのは、彼ら自身の高い素質と、何よりガンダムやホワイトベースの高い性能があったればこそだ。なにせ、その性能は、モビルスーツの開発、実用化、研究で連邦軍より先をいつていると自負していたジオンの軍人を驚



かせたほどのものだったのだから。

そういった経緯もあり、当初はアムロのガンダムを中心に、少数の敵との戦いが続いた。またその戦いは、あくまで正規戦の一環であった。

そのため互いに戦術を駆使して行われる戦いは、ガンダム一機の活躍というより、ホワイトベース隊の作戦勝ちとでもいうべき戦いが多かった。

たたし、それはあくまで前半の話である。ホワイトベース一隻で逃げ回っていたときには、とにかく生き延びることが彼らの戦う理由でもあった。

その結果、連邦軍と合流できるようになったころのホワイトベースは、ジオン軍の有名なエースパイロットを何人もしりぞけた、歴戦の強者部隊として敵味方を問わず広く知られる存在となっていた。

だがそれは、アムロたちにとって決して喜ばしいこととはいえなかった。なぜなら連邦軍の上層部は、ジオン軍から高い評価を得ているホワイトベースを第13独立部隊としておとり専門に使うことにしたからだ。

かくして地上から、再び宇宙へと戦いの場を移したホワイトベース、いや第13独立部隊は、一騎当千の活躍ぶりを見せながら、連邦軍の宇宙での作戦を側面から支えていく。

その戦いぶりはすさまじく、数で勝る敵をまたたくまに全滅させ、あるいは味方に大損害を強い敵を数機で撃破するなど、まさに伝説の域にたっしていた。

第2章

機動戦士ガンダム

0080

ポケットの中の戦争

BATTLE

「一年戦争」末期、地球連邦軍が開発したあるモビルスーツをめぐって、規模こそ小さいが逼迫した状況を招いた紛争があった。

ことの発端はジオン公国軍月面基地「グラナダ」のキリング中佐が、特務部隊「サイクロプス隊」に、地球連邦軍「北極基地」へ奇襲を命じたことによる。

この北極基地襲撃作戦は失敗に終わったが、キリングは作戦の標的が、中立スペース・コロニー「サイド6」の「リポ」コロニーに搬入されたことを知り、サイクロプス隊に再び襲撃を命じた。

作戦は「ルビコン作戦」と命名され、サイクロプス隊はニュータイプ用ガンダム「アレックス」を奪取、あるいは破壊すべく、リポに潜入することとなった。

## Phraseology

### ■ アレックス

地球連邦軍がアムロ・レイ用に開発したニュータイプ用ガンダム。型式番号は、RX-78NT-1。当時の最先端技術であるマグネット・コーティングと、全天周型モニターの採用にぐわえ、総推力はノーマルのガンダムの3倍以上となっており、並みのパイロットでは扱い切れない。完成したあかつきにはアムロが属する「第13独立部隊」に送られるはずであった。

### ■ サイクロプス隊

ジオン公国軍突撃機動軍のハーディ・シュタイナーに率いられた特務部隊で、その作戦領域は宇宙空間から地上、水中まで。扱う任務はモビルスーツ戦から潜入工作、ゲリラ戦と多岐にわたる。部隊の特殊性ゆえ

に部隊員にはあらゆる技能が高いレベルで要求され、そのために少数精鋭となっていた。

### ■ サイド6

スペース・コロニー自治政府のひとつで、愛称はリーア。「一年戦争」においてジオン公国軍、地球連邦軍のどちらにも属さぬ中立地帯であったが、それだけに両軍の暗躍の舞台になったともいわれている。一例をあげるなら、ジオン軍のサイコミュ開発で知られる「フラナガン機関」も「サイド6」の某コロニーに設立されていた。一方、「アレックス」の組み立てと調整を行っていた連邦軍の秘密基地も、表向きは「U.N.メディカルセンター」という医療研究機関ということになっていた。

ニュータイプ用ガンダム破壊の命を受けた特務部隊

# サイクロプス隊 VS. ジム部隊

## ■ 猛者ぞろいのサイクロプス隊

北極海水深150メートルを音もなく進む、ジオン公国軍の潜水艦「ユーコン」。その下部ハッチが開き、4機の水陸両用モビルスーツが出撃した。「ズゴックE」1機を指揮官機に、「ハイゴック」3機という編成である。

出撃したのは、ジオン軍特務部隊「サイクロプス隊」。月面基地のキリングの命を受け、地球連邦軍の北極基地に電撃作戦をしかけるためであった。

隊長ハーディ・シュタイナーに率いられる部隊は、コクビット内で酒を飲む者、髪を整える者、ピンナップを張る者、あるいはパイロットスーツすら着ない者、と野放図な印象をあたえる。

しかし、やはり百戦錬磨のベテランぞろいで、前方の暖流反応から基地内への通路を察知したガブリエル・ラミレス・ガルシアの進言に、シュタイナーは即座に部

### 第1話

#### 「戦場までは何マイル？」

北極基地から宇宙へあがろうとする「ガンダム」を破壊するべく、ジオン公国軍特務部隊「サイクロプス隊」が奇襲をかける。

MSM-07E

ズゴックE

RGM-790

ジム寒冷地仕様

VS.

ハーディ・シュタイナー

隊をふたつに分けることを決断。隊員たちは突然の作戦変更にも、あわてることなく対応していく。

シュタイナーとアンディ・ストロースは氷壁面にあいた秘密通路に突入し、残る2機のハイゴックは、背部ブースターを作動させて一気に浮上すると、そのままの勢いで氷原上の基地内に突撃する。

ハイゴックは腕部のミサイルを発射して格納庫など基地施設を破壊し、さらに待機中の輸送機を狙う。

■敵を圧倒するも作戦は失敗

当初の混乱から立ち直った連邦軍基地司令室は、「ジム寒冷地仕様」の警護部隊を出撃させ、迎撃に当た

つたが、相手が悪かった。

ハイゴッグの装甲および肩部アーマーは、ただでさえ頑丈なうえ、ミハイル・カミンスキーは、格納庫をたくみに遮蔽物に用いて致命傷を防ぐ。

そして、ジムの銃撃がやんだ一瞬の隙を見逃さず、正確な射撃で敵機を沈黙させる。

ジム2機を相手にしたガルシアは、隠れていた輸送機の陰から、ハイゴッグで大胆にも前方の凍結した地面にジャンプ。その勢いを殺さぬままスラスト1を吹かし、滑りながらジムの足元の死角からせまる。1機の頭部をクローで掴んだ瞬間、掌部のビーム・カノンで破壊する。

残る1機の銃撃を、行動不能にしたジムの盾にしてふせいだガルシアは、相手がひるんだのを見逃さず、ビーム・カノンで大破させる。さらに最初の1機にとどめを刺すことも忘れない周到さである。

ジム部隊も善戦したのだが、モビルスーツ操縦の技量と戦闘経験が、サイクロプス隊とは違いすぎたのだ。



地下通路でシュタイナーのズゴックEを阻もうと銃撃するジム寒冷地仕様だが、力の差は大きかった。



ジム寒冷地仕様の機関砲の直撃を受けるハイコッグ。重装甲でも真正面からはひとたまりもない。

地下通路で交戦中、地上施設はすべてダミーという報告を受けたシュタイナーは、先行させていたアンディにリフト出口の外の調査を命令する。そこでアンディが見たものこそ、打ちあげ寸前のシャトルであった。

その連絡に、一度は打ちあげ阻止を命令したシュタイナーであったが、護衛のジムがいるとの報告に、地下通路のジムを撃破したのち援護へと急ぐ。

シャトルが秒読みに入っていることを察知したアンディは、シュタイナーの制止を無視。危険を承知でミサイル攻撃を敢行しようとする。

だが、この決死の行為も、冷静さを欠いた猪突猛進ゆえに、ジムの銃撃によって簡単に阻まれ、アンディは戦死してしまう。

かくして両陣営の兵士が見あげるなか、シャトルは無事に機密コンテナを積み、厚い雲を抜けて宇宙へとあがった。

作戦に失敗し、優秀な部下であるアンディを失ったシュタイナーの絶叫が、極寒の氷原にむなく響くのであった。

夜の街を赤く染めた、ガンダムと蒼き騎士の死闘

# アレックス VS. ケンプファー

## ■夜のスペース・コロニーを蹂躪するケンプファー

先の戦いで隊員を失ったジオン公国軍特務部隊「サイクロプス隊」であったが、月面基地「グラナダ」で新兵のバーナード・ワイズマン（愛称、バーニイ）が補充された。

そのうえで、ニュータイプ用モビルスーツ「アレックス」の奪取、もしくは破壊を目的とする「ルビコン作戦」がサイクロプス隊の次なる任務となった。

作戦遂行のため、「ケンプファー」はスペース・コロニー「サイド6」の地球連邦軍秘密基地への潜入工作に出た3人を支援すべく、動きはじめた。

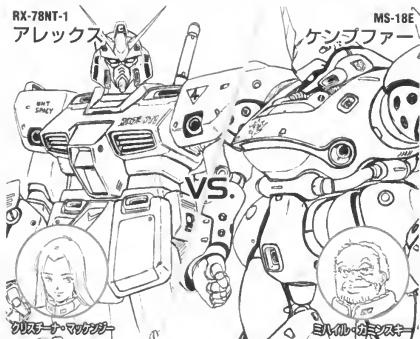
ミハイル・カミンスキーが駆るケンプファーは、アジトであった工場を派手に吹き飛ばし、まだ人通りの多い夜の街並みに機体をさらす。これは、軍や警察など当局の注意を引きつけるためであった。

### 第4話

「河を渡って木立を抜けて」

ジオン公国軍特務部隊「サイクロプス隊」の「ルビコン作戦」は、最終局面を迎え、「ケンプファー」は「アレックス」に戦いを挑む。





この陽動は見事に成功し、サイド6軍部隊と駐留する連邦軍のモビルスーツ部隊は、ケンプファーの迎撃を余儀なくされる。

たくみに機体を操るミハイルは、夜のコロニーを縦横無尽に駆け抜け、サイド6軍と連邦軍の両軍を翻弄する。

サイド6軍の有線ミサイル・バギーや、小型モビルスーツ「ドラケンE」を赤子の手をひねるがごとく粉碎。また、連邦軍の強襲揚陸艦「グレイファントム」から降下したモビルスーツ6機を迎え撃ち、そのすべてを一撃で大破、炎上させた。

その結果、中立コロニーの街と人々は、予想外の戦火にさらされ恐

怖するなか、炎に焼かれていった。

## ■爆炎のなか、姿を現すアレックス

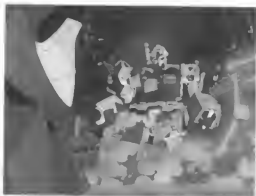
連邦軍部隊を蹴散らし、アレックスが隠されている秘密基地に到達したケンプファーであったが、女性テストパイロットであるクリスチーナ・マッケンジー（愛称、クリス）のほうが早かった。

ハーディ・シュタイナーらの破壊工作に臆することなく、クリスは横たわるアレックスにとりつくとすぐさま起動。思い切りよくスラスタを吹かし、そのまま壁を破壊して外に出ることで、からくもケンプファーのショット・ガンをかわした。

だが初めての实战のため、クリスはケンプファーの機動性についていけず、アレックスの攻撃はすべてよけられてしまう。これを勝機とみたミハイルは、事前に配置しておいた3基の兵装コンテナのひとつから、強力なチェーン・マインを取り出した。爆弾を数珠つなぎにしたチェーン・マインは、アレックスの四肢に巻きつき、自由を奪った瞬間炸裂した。誰もがアレックスの敗北を悟ったその瞬間、試験用の



「強襲用」の異名をもつケンプファーは、サイド6軍の有線ミサイルを難なくよけるだけの運動性をもつ。



チェーン・マインの直撃を受けたあと、アレックスは試験用の追加装甲を排除した。

追加装甲を排除して、無傷のアレックスが爆炎のなかから現れた。

これにはさしものミハイルも驚き、腰からビーム・サーベルを抜くとアレックスへ向けて滑るように突撃する。だが、それは冷静さを欠いた最悪の一手だった。

クリスは手にしたビーム・サーベルを投げ捨てると、せまりくるケンプファーに向け、腕部に内蔵された大口径ガトリング・ガンを引き金を引いた。

ジグザグに動くでもなく、ただ、アレックスめがけて突進していたミハイルに、この予想外の攻撃をかわすことはできなかった。

さらにミハイルにとって不幸だったのは、内蔵式大口径ガトリング・ガンがケンプファーの装甲を貫くだけの威力を有していたことだろう。アレックスのこの攻撃は、たやすくケンプファーを蜂の巣にし、ほろほろの鉄くずへと変えた。それはパイロットを守るコクピット・ハッチも例外ではなかった。

破壊工作にあたったシユタイナーとガブリエル・ラミレス・ガルシアも倒れ、ルビコン作戦は失敗。サイクロプス隊はバーニイだけが生き残ったのであった。

仕絶な相打ちで大金屋をあげた新兵の戦い

# アレックスVS.ザク改

■アレックスを倒すため、策を練り、罠を張りめぐらせるバーニイ

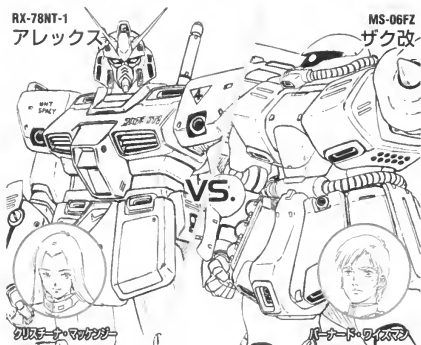
仲間を失い、ひとり残されたバーナード・ワイズマン（愛称、バーニイ）は、失意から立ち直り、動きだした。

ジオン公国軍特務部隊「サイクロプス隊」に入るまえの戦場で被弾し、コロニー内に放置したままだった「ザク改」を修理し、「ルビコン作戦」のために用意していた武器を手に入れて、再びニュータイプ用モビルスーツ「アレックス」に戦いを挑むのだ。

コロニー内には、先の戦闘後もいまだ処理されていない連邦軍の「ジム」が放置されていた。バーニイはその機体から使えるパーツを回収し、自己診断プログラムにしたがってザク改を修理していく。その一方で、戦場に選んだ連邦軍基地近くの斜面の林のなかにいくつかの対モビルスーツ用の罠をしかけ、マシンガンなど飛び

## 第6話 「ポケットの中の戦争」

失意から立ち直ったバーニイは自らの信念のもと、復活した愛機「ザク改」を駆り、「アレックス」を相手に獅子奮迅の働きを見せる。



道具のない不利を補う。それがバーニイが選択した苦肉の策であった。言うのはたやすいが、実際に軍や警察の目が厳戒になったなかで武器を回収し、部品を調達するには困難がつきまとった。

時には隠れ、騙し、人を傷つけ、また必要とあれば盗みもした。こうした苦難を乗り越え、バーニイはザク改の修理と戦闘準備をやり遂げた。その意味ではバーニイもまた、サイクロプス隊の立派な一員であった。その誇りを胸に、バーニイはザク改で出撃する。

このとき、死をも覚悟していたのか、彼の表情はいつになく凛々しく厳しいものであった。

## ■ 仕絶な相討ちの果てに

連邦軍基地に接近したバーニイは思惑通り、クリスチーナ・マッケンジー（愛称、クリス）が乗るアレックスを、戦場を選んだ雑木林へ誘導することに成功する。そこにはすでに煙幕がはられ、アレックスの視界をさえぎっていた。バーニイは煙幕のなかに、モビルスーツ大のサンタクロースなど、アドバランを複数ふくらませておいた。いわば分身の術でまどわすことで、クリスにガトリング・ガンを乱射させ、無駄弾を撃たせようとしたのだ。

クリスが困惑するその隙を見逃さず、バーニイはヒート・ホークでアレックスの右腕ガトリング・ガンを粉碎し、返す刃で腹部に斬りつける。さらにくり出したヒート・ホークは、ビーム・サーベルではじかれたが、そこを見のがさず体勢のくずれたアレックスに組みつき、そのまま斜面をすべり落ちていく。

斜面にはハンド・グレネードを用いた罠がしかけられており、その爆発の衝撃は、アレックスにダメージを与える。だが、それはアレックスに組みついたザク改にと



腹部を損傷したクリスのアレックスに、さらに攻撃しようとしてヒート・ホークを構えるバーニイのザク改



これこそザク系モビルスーツが、ガンダムを行動不能にさせた、ほぼ唯一の瞬間である

つても同様で、左腕部を失ってしまう結果となった。

ここまでですでにバーニイの額は流れ弾によって流血しており、右目は見えなくなっている。一方のクリスも、さきほどのヒート・ホークの一閃で左上腕部を負傷していた。ふたりとも、流血と爆発の衝撃で息が荒い。

人機ともにダメージは大きいため、ふたりは戦いが長引いては不利にこそなれ、優位に傾くことはないと感じていた。その直感にしたがつて、お互い防御のない捨て身の攻撃を放つバーニイとクリス。

ザク改の横殴りのヒート・ホークは、アレックスの首を切り落とし、アレックスが突き出したビーム・サーベルは、ザク改のコクピットごと胴体を貫いた。

この結果、クリスは生き残ったが、アレックスは大破。一方のザク改は木端微塵となり、バーニイは愛機と運命をとみにした。壮絶な相打ちであった。かくしてサイクロプス隊は、「ニュータイプ用ガンダム破壊」という輝かしい戦果と引きかえに、壊滅したのである。

## ニュータイプ用ガンダムが生んだ皮肉な結末

この物語における戦闘を簡単に表現するなら、地球連邦軍が極秘裏に開発したニュータイプ用ガンダム「アレックス」をめぐって行われたもの、ということになるだろう。

「一年戦争」末期、ジオン公国軍の一部の将校が、「ガンダム」という存在に抱いた危機感は強迫観念といっても決していいすぎではなかったであろう。

特に月面基地「グラナダ」のキリング中佐は、アレックスという機体を戦局を揺るがしかねない存在と認識していたことから、本来、中立であったスペース・コロニー「サイド6」への威力偵察を敢行。また、アレックスの奪取もしくは破壊を、特務部隊「サイクロプス隊」に命じ続けたのである。

この結果、サイクロプス隊はジオン軍でも類のない便利屋扱いをされ、極寒の北極への電撃作戦、はたまた、中立コロニーへの潜入と破壊工作、モビルスーツ戦と、短いあいだに多種多様な任務を負わされる羽目となった。

しかし、それすらキリングの計画では囷でしかなかった。サイクロプス隊は、アレックスを探し出すための捨て石にすぎなかったたのである。



当のキリングは、潜入工作により、アレックス奪取が成功することを最善とし、破壊できれば、それでもよしと考えていた。さらに「ルビコン作戦」が失敗しても、それに対応できるような、核攻撃の準備さえ行っていたのである。

これは両軍の間で締結された核兵器の使用禁止を含む戦時条約「南極条約」に対する背反行為であり、「オデッサの戦い」におけるマ・クベの水爆ミサイル発射に匹敵する愚行であった。かくして、サイクロプス隊敗北、すなわちルビコン作戦失敗の報告を受けたキリングは、核ミサイルを重巡洋艦「グラーフ・ツェッペリン」に装備し、サイド6への核攻撃を命じたのであった。

実はバーナード・ワイズマン（愛称、バーニイ）が挑んだ最後の戦いとは、自らがアレックスを撃破することで、この核攻撃を中止させようというものだったのである。核攻撃の事実をジオン軍工作員から知らされたバーニイは、一度はサイド6を逃げ出そうとしたが引き返し、アレックスと戦い勝利することで、サイド6を守ろうとしたのだ。

結局、この戦いは相討ちに終わったが、その数時間前に核ミサイルを積んだグラーフ・ツェッペリンは哨戒中の連邦軍に投降しており、バーニイの悲痛な決意も実際は意味のない空回りであったことが物語の結末で語られる。

ザク系モビルスーツによるガンダム撃破は、前人未踏の大金星であったが、その代償はあまりにも重く、大きなものだったのである。

第3章

機動戦士ガンダム

第08MS小队

BATTLE

「ルウム戦役」で敗退した地球連邦軍は、ジオン公国軍の進撃を抑えきれず、地球への降下作戦をも許してしまった。

これにより勢力バランスを大きく塗り替えられ、連邦軍は、各部隊の再編を余儀なくされた。そしてルナツー艦隊のみを残し、残存部隊を地上部隊へと併合していくこととなる。

モビルスーツ「ガンダム」の開発に成功した連邦軍は、その製造過程で発生した余剰パーツから「陸戦型ガンダム」などのモビルスーツをつくり、量産に先がけて、従来の機甲部隊が運用困難な局地に配備した。

地球へと侵攻したジオン軍もまた、連邦軍本部「シャブロー」攻撃のため、秘密基地において試作モビルアーマー「アブサラス」の開発を進めていた。

## Phraseology

### ■ シロー・アマダ

東南アジアのコジマ機械化混成大隊、第08MS小隊の隊長に任命された地球連邦軍士官学校出身の少尉。無駄な血は流さずに戦闘での犠牲は最小限にとどめ、任務を遂行するという理想をもった熱血漢。戦場で出会った、アイナ・サハリンに想いをよせる。

### ■ アイナ・サハリン

ジオン公国の没落貴族、サハリン家の令嬢。正規の軍人ではなく、技術将校の兄ギニアス・サハリンを手伝い、試作モビルアーマー「アブサラス」の専任テストパイロットを務めている。シロー・アマダとの出会いを経て、兄の理想が狂気であることを悟り、シローとともに立ち向かう決心をする。

### ■ 陸戦型ガンダム

「ジム」が低コストの量産態勢に入るまえの段階で、「ガンダム」の余剰パーツから生産された、局地戦用モビルスーツ。同様な機体に宇宙用ジム、陸戦用ジムがある。

### ■ アブサラス

試作モビルアーマーで、Ⅰ～Ⅲまでつくられた。Ⅰは主にミノフスキー・クラフトの実験段階で、その改良型のⅡは大型メガ粒子砲の搭載実験機。それらをもとに、新たに完成したのがⅢである。

### ■ ミノフスキー・クラフト

物体の下方に大量のミノフスキー粒子を常時散布することで形成される1フィールド。1フィールドの立体格子状構造の場によって、物体を浮上させるシステム。

非力な戦闘ボットでモビルスーツに立ち向かった勇者

# ボールK型主 VS. 高機動型ザク

## ■初期型ジムと高機動型ザク、緊迫の攻防戦

地上部隊へと配属になった地球連邦軍シロー・アマダは、地球へ向かう輸送艇のなかにいた。窓の外には美しい地球とは不釣り合いなデブリ（残骸や破片などの宇宙ゴミ）が漂う。そのなかをひとすじの信号弾が流れて炸裂した。

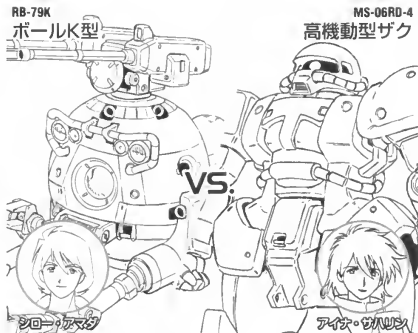
片足を失った連邦軍の「初期型ジム」が、ジオン公国軍の「高機動型ザク」を追っていたのだ。

連邦軍の勢力圏内に現れたザクの小隊。3機の「ザク」に護衛される高機動型ザクは、「ドム」の足を付けていた。ドムを宇宙仕様にするため、脚部バーニアの試験を行っていた小隊が、連邦軍のジム部隊と遭遇してしまったのだ。

追撃するジムにはテリー・サンダースJr. が乗っていた。これまで所属した部隊がごとく全滅し、彼だけが生き残ってきたことから「死神サンダース」と、あ

### 第1話 「二人だけの戦争」

大気圏目前、輸送艇にせまる戦騎の光。友軍機「初期型ジム」を援護するため、輸送艇搭載の戦闘ボット「ボールK型」が出撃する。



だ名されている男だ。初期型ジムを配備された現部隊もまた、彼以外は撃墜されてしまっていた。

だが、彼自身の能力は高く、生き残ってきたのはサンダースの実力であった。現に彼は、今回も護衛のザクを1機撃破していたのだ。しかし、高機動型ザクの女性テストパイロット、アイナ・サハリンは、さらに優れていた。サンダースに追われ護衛とはぐれながらも、追いつがるサンダースの攻撃をかわすと、ジムの残されたもう一方の足を吹き飛ばし、今また左腕をも奪っていた。

かろうじて残骸に身を隠したサンダースは、あせりを隠せなかった。被弾したジムは弾を撃ち尽くしてい

たからだ。

## ■非力な戦闘ボッドでモビルスーツ拘束に成功

信号彈を確認したシローは、輸送艇の艇長に支援を提言。貨物室に搭載されていた戦闘ボッド「ボールK型」で出撃する。たくみな操作でボールの姿勢制御ノズルを細かく噴射し、デブリにまぎれて進むシロー。残骸の装甲板を作業用マニピュレーターで掴み、その陰に姿を隠して戦闘域へ近づいていく。

間近までせまるシローだったが、寸前のところで高機動型ザクに気づかれてしまう。掴んできた装甲版を投げつけ、高機動型ザクの乱射するザク・マシンガンの弾除けにすると、シローはボールを突進させた。

とっさのひらめきで、シローは作業用に装備されているウインチのワイヤー・アンカーを撃ちこんだ。高機動型ザクの肩口に命中し、開いたアンカーがザクの頭部動力パイプにからむ。ワイヤーを巻きあげつつ高機動型ザクの周りを飛び回り、がんじがらめにして動きを奪ったシローは、残骸の陰から覗きこんだサンダーズのジ



両足と左腕を吹きとばされた「死神サンダーズ」のジム。アイナはコクピットをさけて攻撃したようだ。



作業用のワイヤーでザクをしめあげるボールK型。  
通常の装備とは違う2連装の機関砲を付けている。

ムに叫ぶ。「動けるなら退避しろ！ 月側8時の方向に輸送艇が待機している!!」。

性能で勝る高機動型ザクも作業用ワイヤーは引きちぎれず、アイナは自由の利く左腕でヒート・ホークを掴み、締めあげてくるボールをなぎ払おうと振りあげる。シローはすばやく反応し、マニピュレーター・アームで高機動型ザクの腕を止めた。

しかし、強度の弱いアームはきしみ、ねじ曲がる。アームが折られるとほぼ同時に、ボールの上部に取り付けられた2本の180ミリ連装式機関砲が、高機動型ザクの頭部を吹き飛ばした。

がむしゃらに連射して、高機動型ザクの機能を停止させることに成功したシローではあったが、ボールもまた損傷が激しく放棄を決断。火花散るコクピットを出たシローは、同じく高機動型ザクを放棄するアイナの姿を見るのだった。

2時間後、救出された輸送艇のシートで眠るシローの寝顔は満足げで、その寝顔にサンダースは信頼を込めた敬礼を捧げた。そんな輸送艇内のモニターにはジオン公国のザビ家末弟、ガルマ・ザビの国葬で叫ぶギレン・ザビの姿が映し出されていた。

熱砂のなかで展開された巨大モビルアーマー編纂作戦

# 第08MS小隊vs.アプサラスII

## ■灼熱の砂漠で待ち伏せる第08MS小隊

砂漠で謎の光を見たという民間人の話。それを聞きつけた、ゲリラの少女キキ・ロジータは、好意をよせる地球連邦軍「第08MS小隊」の隊長シロー・アマダに知らせた。08小隊は、情報をもとに砂漠のなかの渓谷を調査し、そこをジオン公国軍の射爆場と断定した。

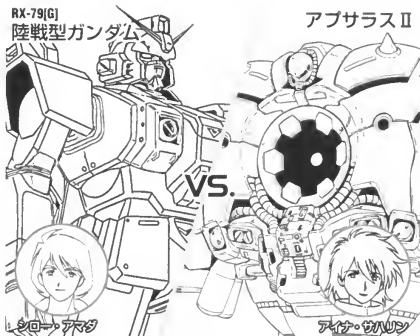
大型砲によってえぐられた岩壁はガラス化し、そのエネルギーの尋常ならざる大きさを示していた。シローは、これを先に遭遇したジオン軍のモビルアーマー「アプサラスII」によるものと考えた。アプサラスIIが再び射爆場に現れると推測した08小隊は、熱砂のなかで待ち伏せ作戦を展開する。

シロー、カレン・ジョシュワ、ミケル・ニノリツチが「陸戦型ガンダム」で所定の配置につき、ホバー・トラックでテリー・サンダースJr. が目標を追う。

## 第6話 「熱砂戦線」

ついにジオン公国軍のモビルアーマー「アプサラスII」の足どりを掴んだ地球連邦軍「第08MS小隊」。待ち伏せによる奇襲作戦を行う。





### ■死に物狂いで立ち向かうシロー

溪谷に侵入したアプサラスⅡの振動をホバー・トラックの計器がとらえた。サンダースがミノフスキー粒子を散布し、キキと小隊一同が作戦に入る。予定どおり、気球爆弾で退路を断つカレン。

気流に乗りアプサラスⅡを追う気球に、パイロットのアイナ・サハリンは異変を察知。さらに行く手をさえぎる謎のネットに気づき、アプサラスⅡを減速させた。急制動によるG（重力の単位）がアイナを襲う。

アプサラスⅡの一瞬の停止を、シローの照準がとらえる。だが、アプサラスⅡが落下をはじめたことで照

準がずれ、ガンダムのビーム・ライフルはその背中を弾いただけだった。

モビルスーツがビーム兵器を使うことに驚いたアイナは、落下しながらも崖上から覗きこむミケルのガンダムを視認。すかさずメガ粒子砲を撃つ。

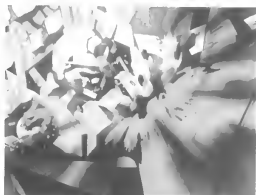
崖を切り裂いていくメガ粒子砲の爆煙にミケルのガンダムがのまれ、その姿にあわてて踏み出したシローのガンダムを次なる閃光がかすめる。直撃は避けるが、ビーム・ライフルを切断されてしまう。

浮上しようとミノフスキー・クラフトを起動させたアプサラスⅡが突風を起こし、ついてきていた気球爆弾を崖上へと巻きあげる。たちのぼる噴煙に目標が見えず、やみくもに胸部マールチ・ランチャーの機銃を撃ちこむカレンだったが、銃撃された気球が爆発していつそう視界を奪っていく。眉をひそめ舌打ちするカレンの耳に、ジオン軍の戦闘機「ドップ」2機が上空から接近するという、サンダーズの連絡が入る。

ミケル機を狙ったドップが、機銃掃射しながらガンダムの脇をすり抜けていく。それを照準で追うミケルのガンダムの前に、巨大なアプサラスⅡが浮上してくる。



陸戦型ガンダムによる初のビーム・ライフル攻撃  
本作戦のために用意されたようだ。



内蔵火器ならではの隣接射撃。とはいえ、自機の危険性も高い。まさに死に物狂いの攻撃といえよう。

その大きさに圧倒され、息をのみ立ちつくすミケルに、メガ粒子砲が狙いを定める。ミケルを失うまいと駆けつけたシローは、ガンダムのノズルを最大噴射させてアブサラスⅡにぶつけた。体当たりで射線をずらされたメガ粒子砲がミケルをかすめる。援護に入ろうと旋回するドップを、キキがホバー・トラックの機銃で撃ち落とす。アブサラスⅡにしがみついたシローは、ビーム・サーベルで斬りつけようと右腕をふりあげるが、崖にこすりつけられ、その衝撃で右腕を肩からもがれてしまう。それ

でもシローは、ガンダムの胸部マルチ・ランチャーの機銃を乱射しつづけ、アブサラスⅡのボディを穴だらけにしていく。

「離れなさい！ 死にたいのですか!？」と、アブサラスⅡから聞こえた通信の声に、シローの指が引きがねから離れた。その声は間違ひなく宇宙で会ったアイナの声だった。

残るドップを撃墜した小隊の面々が見あげるなか、アブサラスⅡのミノフスキー・クラフトは黒煙をあげながら暴走し、呆然とするシローのガンダムを載せたまま、飛び去ってしまうのだった。

ジオン兵を驚愕させたゲリラのミサイル攻撃

# 第08MS小隊VS.トップ隊

## 第8話 「軍務と理想」

オデッサ戦線から敗走してきたジオン公国軍の小隊。立ちよった村はゲリラ本拠地だった。ジオン新兵のいたずら心が戦いを起こす。

### ■ゲリラの村と知らずに立ちよったザク小隊

雨あがりのよく晴れた日、地球連邦軍に協力するキキ・ロジータたちゲリラの村へと続く川を、ジオン公国軍の女隊長トップの率いるモビルスーツ3機があがってきた。肩アーマーなどを破損し、痛んだ姿のこの小隊はオデッサ戦線から敗走し、本隊からはぐれたのである。

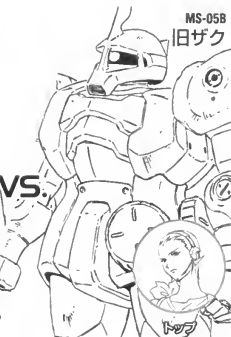
トップは村人といさかいを起こすことなく食料を手に入れようと、「旧ザク」の両手をあげ、攻撃の意思はないことを示して進んだ。

両手を広げてそれに対峙したキキは、ゲリラと見破られることなくやりすごそうと考えていた。トップもまた、コクピットを開けて身をさらし、平和的にキキと交渉を進めていく。

地球連邦軍「第08MS小隊」の隊長シロー・アマダは、「アブサラスⅡ捕縛作戦」

携帯対戦車砲装備の  
シロー・アマダ

VS.

MS-05B  
旧ザク

のおり、「アブサラスⅡ」とともに行方不明となったことから、スパイ容疑で審問会にかけられ、謹慎処分となっていた。

キキたちの村にジオン軍が入ったことを知ったシローは、コジマ大隊長が出撃の意思を示さなかったため、謹慎中にもかかわらず小隊出撃の命令を下し、「陸戦型ガンダム」2機を村から10キロ近くはなれた山中に配置した。

ガンダムのパイロット、カレン・ジョシュワ、テリー・サンダースJr. は、もう2キロ接近させてほしいと進言したが、シローは村を戦場にしないため、これを却下した。

そしてシロー自身は、携帯対戦車

砲をかかえ、単独で村へと向う。

## ■新兵の軽率な行動が地獄の扉を開ける

「ザク」に乗るデルは食事に感謝し、運んできた村の少年に空薬莢をプレゼントした。喜ぶ少年を見るデルの横には、幼い息子の写真があった。

村人といさかいを起こすなというトップ隊長の指示に不満顔の新兵アスは、食事を運んできたキキにいたずら心を出し、ザクで彼女を掴みあげると、コクピットに連れこもうとする。即座にトップがザク・マシンガンで狙いをつけ、その暴挙を止めた。

本気でおどすトップに舌打ちして、食事をもらうためにアスはコクピットをあけた。そこへ腹を立てたキキが、アスの顔めがけて皿を投げつけた。怒ったアスがキキを空中に放り投げ、事態は一変した。村全体に緊張が走る。建物の中で身構えるゲリラたちを、報復で村を戦場にすると、キキの父親でゲリラの頭目バレストが制止する。しかし、怒ったゲリラのひとりですでに行動に出ていた。

呪いの言葉をはきながら、顔にかかった食べ物をぬぐったアスが見たのは、ミサ



ゲリラの村と知らないトップは、つとめて平和的に村人と交渉する。誇りをもった軍人である。



ゲリラのミサイル攻撃が、開いていたザクのコクピットを直撃する。

イル・ランチャーを構えたゲリラの姿だった。無力だと思っていた村人に、武器を突きつけられたアスは硬直し、引きつるように笑いだす。そこへミサイルが撃ちこまれコクピットは爆発。ザクは、糸の切れた人形のように倒れた。

こうなつては殲滅のみだと、バレストはゲリラに号令をかけた。村のそこかしこからザクに向かってロケット弾が撃ちあがり、トップはそこがゲリラの村と知る。

トップの援護のもと、デルのザクはジャンプして逃げようとするが、後方に建つバレストの屋敷の扉が開きロケット砲が狙う。気づいたデルが最大噴射で屋敷ごとこれを吹き飛ばし、業火がバレストらをのみこむ。しかし、放たれたロケットもまた、ザクのバックパックを破壊していた。投げ捨てられたキキは薬ぶきの納屋に落ちて無事だった。シローに肩を借りて納屋を出たキキは、燃える屋敷を見て、父バレストの死を知るのだった。

### ■シロー・アマダ、「殺人」を体感する

敵パイロットを殺したくないと考えるシローは、ザクを川へ追い出すよう要請するが、ゲリラたちは

聞き入れず、父の仇が討ちたいというキキの言葉に湧きたち、武器を取った。

シローはカレンたちに射撃準備を伝えると、ザクの退路に先回りし、燃える残骸の下に身を隠した。あたりを警戒しながら進むトップの旧ザクが残骸をまたいだ瞬間、シローは真下から旧ザクの股関節駆動部を携帯対戦車砲で吹き飛ばす。

旧ザクが倒れこみ、トップの身を案じたデルのザクが動きを止める。

シローの射撃命令でカレンの放ったビーム・ライフルの第一射がザクの前方をかすめる。敵に気づいたデルは、射撃地点の山中にマゼラ・トップ砲を撃ちこみ応戦する。しかし、近くに着弾するもガンダムには当たらない。

コンマ2度左にずれると、カレンに修正値を知らされたサンダースは、爆煙にかすむ照準を修正してビーム・ライフルを発射する。煙を切り裂いて伸びるビーム光がザクの両腕をなぎ払い、衝撃がザクを大地にたたきつける。動きを止めたトップの旧ザクに、シローは投降を呼びかける。しかし、シローをゲリラだと思いこんで



投降をうながすシローに、トップは「ゲリラ風情が!」と、ザク・マシンガンの銃口を向ける。





押しよせるゲリラに、雨のように降りそそぐ対人用小型炸裂弾。歩兵制圧を目的とした対人兵器だ。

いるトップは、ザク・マシンガンでシローを撃つ。シローは大きく横に飛んで避けると、携帯対戦車砲でザク・マシンガンのマガジンを破壊した。

再び投降を呼びかけるシローをかすめて、ゲリラのロケットが旧ザクのкокピット・ハッチを破壊する。怒りにかられたゲリラたちがシローの脇を走り抜けていく。農具や武器をたずさえ、旧ザクへ押しよせるゲリラの集団。その姿をせまいкокピットで見たトップは、恐怖に駆られ、声にならない悲鳴をあげると、手さぐりで

旧ザクに装備されている対人兵器を撃ちあげた。

シローは、ゲリラたちに引き返すよう叫ぶと、拳銃で対人兵器を狙って発砲した。

発射された3発のうち2発を弾き飛ばすが、1発が破裂し細かな弾丸がゲリラたちに降りそそいだ。体中穴だらけにされ倒れるゲリラたち。

理性が飛び、さらに攻撃しようとするトップに携帯対戦車砲を向けるシロー。

たとえば、ジオン兵であっても人間だった。敵であっても助けたかった。シローは無念の思いで歯を食いしばると、携帯対戦車砲を発射するのだった。

真と心理戦を駆使した華麗なる足止め

# 第08MS小队VS.マゼラ・アタック

## ■撤退時間を稼ぐために出撃するマゼラ・アタック

オデッサ作戦を敗退して、ジオン公国軍秘密基地へと逃げのびてきた、ユーリ・ケラーネ率いる欧州方面制圧軍。その本隊へ合流するべく、負傷兵たちを乗せた「ガウ」攻撃空母が、夜明けまえの暗い空を危なげに飛行している。

片側エンジンが不調なガウを指揮していた艦長のポーン・アブストは、目的地を目の前にして降下作戦中の地球連邦軍「第08MS小队」と遭遇。敵隊長シロー・アマダの「ガンダムEz8」にとりつかれた。しかし、シローはエンジンから火をあげたガウを撃墜せず解放し、暗く広がる眼下の森へと降下していった。ポーンには理解できなかった。なぜシローが敵である自分たちに情けをかけたのか。

朝焼けのなか不時着したガウは、片翼のエンジンが燃えあがり、大きな黒煙をあげた。積荷は降ろせたが、連邦軍の捜索部隊に発見されるのは時間の問題だった。

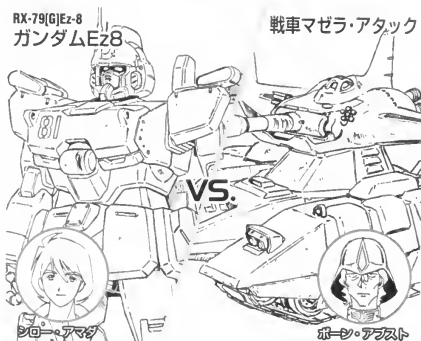
### 第9話 「最前線」

オデッサ戦線から敗走した仲間を宇宙へ逃がすため、戦車「マゼラ・アタック」3両が地球連邦軍「第08MS小队」を迎え撃つ。

RX-79[G]Ez-8

ガンダムEz8

戦車マゼラ・アタック



シロー・アマダ

ボーン・アバスト

エンジン不調にもかかわらず任務をまっとうしたボーンに、ユーリは無理な任務を指示したことを謝罪し、温かく迎えた。撤退を指示するユーリに、ボーンは積んできた戦車「マゼラ・アタック」3両を借りたいと申し出ると、撤退行動の時間稼ぎに出撃していくのだった。

ユーリは、生きて帰れと固く念をおすと、ボーンとともに志願したバリ、ルネンの3人を断腸の思いで送り出した。

### ■心理戦に勝利したボーン

ボーンは森が途切れ、開けた戦場跡に塹壕を掘ると、マゼラ・アタックを潜りこませた。モビルスーツ2

機の接近を確認して地雷の作動スイッチを入れる。

多数の金属反応を確認した08小隊のテリー・サンダースJr. が「陸戦型ガンダム」を止め、シローのEz8に報告。不利を避けようと森まで戻る判断を下したシローの足元で地雷が爆発する。

今度はサンダースの陸戦型ガンダムにマゼラ・アタックの攻撃が集中する。森へ戻ろうとジャンプしたガンダムは直撃を受け、黒煙をあげて墜落する。

ポーンは手をゆるめず、孤立したEz8に集中砲撃を指示する。Ez8をかがませて盾でHEAT弾（対戦車榴弾）を受けとめるシロー。しかし、二撃目を受けた盾は半壊してしまう。だがシローはひるまず、ビーム・ライフルの照準をマゼラ・アタックにロック・オンさせる。

警告センサーに、ポーンは各マゼラ・アタックに後退を指示し、煙幕弾を打ちあげてEz8の光学センサーをつぶす。ポーンは煙幕が晴れるまえに心理戦をしかける。回線を開き「なぜ、ガウを撃墜しなかったのか」と、シローに問いかけた。

シローは声の主がガウの艦長と知ると、驚きを隠せなかった。ポーンは礼はいう



マゼラ・アタックはHEAT弾から特殊砲弾に切り替え、陸戦型ガンダムの左足を破壊した。



決着をつけようと、格闘能力のないマゼラ・トップが近距離戦をしかけた。決死の覚悟だといえる。

ものの、ジオン軍として情けをかけられないいわれはないと、シローに厳しい口調で答えを求めた。「無用な死人を出したくない」と、答えながらもビーム・ライフルを向けるシローに、「自分を殺すのか？」と、ボーンはその矛盾をついた。殺してしまったジオン軍の女隊長を思い出し、息をのむシロー。

サンダースから無事だが動けないという通信を受け、シローは大事なことを忘れていたと我にかえり、戦意をとり戻す。「仲間のためなら戦える！」と突撃したシローは、ビーム・サーベルでマゼラ・アタックの車体を切断。ボーンは、車体上部の浮上砲塔「マゼラ・トップ」を分離させ狙いをつけた。

近距離で撃ち合うEz8の頭部バルカンとマゼラ・トップのHEAT弾。そして、マゼラ・トップは浮力を失い墜落した。

しかし、HEAT弾の一撃を耐えたEz8のモニターには、敬礼しながら走り去るボーンの姿が映った。十分に時間を稼いだと、笑顔を見せながら。

呆氣にとられるシローだったが、次第に笑いがこみあげてくるのだった。

サハリン家の武人と熱血隊長のフライトを懸けた戦い

# 第08MS小隊VS.グフ・カスタム

## ■第08小隊を翻弄するグフ・カスタム

ジオン公国軍のアブサラス開発秘密基地守備隊は、基地内に収容している負傷兵たちを、機動巡洋艦「ケルゲレン」で宇宙に脱出させようとする。

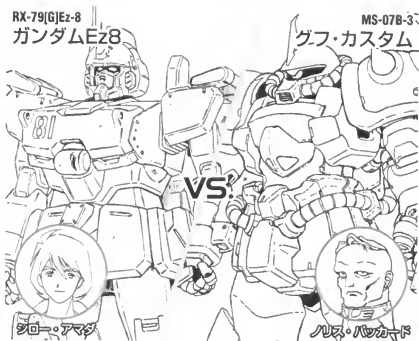
そのために、鉦山都市方面に展開する地球連邦軍の長距離攻撃部隊を排除しようとしたが、「第08MS小隊」によって、ことごとく撃破されてしまった。

サハリン家に仕えてきたノリス・バックカードは、アイナ・サハリンの望みであるケルゲレン脱出を助けるのが自分の役目と、単身鉦山都市へと出撃する。

上昇するエレベーターから土煙を巻きあげて飛びあがった「グフ・カスタム」は、高層マンションの屋上に降りたつ。太陽を背にしたノリスは、一帯をサーチすると、展開している連邦軍部隊の数を把握した。指揮車両1台、ガンダムタイプが3機、「量産型ガンタンク」3機。ノリスはガンダムタイプがビーム兵器で武装していると

## 第10話 「震える山（前編）」

ジオン公国軍の秘密基地から負傷兵を乗せた機動巡洋艦を脱出させるため、ノリス・バックカードの「グフ・カスタム」が出撃する。



知り、飛行速度の遅いケルゲレンには脅威になると、手近な敵からつぶしにかかった。

「陸戦型ガンダム」のテリー・サンダースJr. とカレン・ジョシユワを軽くあしらひ、たちまちガンタンクを2機撃破する。

さらに2機の陸戦型ガンダムのビーム・ライフル、180ミリキャノン砲をも破壊した。

ノリスは最後のガンタンクを狙いガトリング砲を撃つ。しかし、その射線を身体を張ってさえぎったシロ・アマダの「ガンダムEz8」を見て敵の覚悟を知り、ケルゲレンとの合流を放棄。出航せよの発煙弾をあげる。

## ■軍人として、武人としての戦いと勝利

攻撃に転じたグフに翻弄され、シローはマシンガンの弾を撃ち尽くしてしまう。攻撃範囲外に逃れようとするEz8の盾に、グフのヒート・ワイヤーが命中した。シローは盾を切り離すが、ワイヤーを伝う高圧電流がEz8の左腕の回路を焼き切る。

ノリスは、サーベルを投げ捨てフュイントをかけると、飛びあがってEz8のコクピット・ハッチにヒート・ワイヤーを直撃させた。その瞬間コクピットの回路がショートし、計器カバーが跳ねあがる。

Ez8の全機能が停止、モニターが消え、コクピットは闇に染まった。わずかに生きている計器の明かりを頼りに、メイン回路を再起動しようとするシローだったが、接近するグフの足音に死を感じ、聞こえてくる掃射音に絶叫する。

駆けつけたカレンとサンダースの陸戦型ガンダムが、ガンタンクをかばってグフとにらみ合いになるが、グフがEz8を盾にしている手が出せない。

その間に、シローは回路を探り当て、起動に成功する。生き返ったEz8は、グ



エネルギー切れなのか、ガンダムEz8の腕を斬り落とせないヒート・サーベル。





グフ・カスタムのヒート・ワイヤーの直撃を受け、  
ガンダムEz8の前面モニターが死にはじめた。

フの腹を蹴ってその手から逃れた。

ワイヤーでサーベルを拾うグフに対し、シローは壊れかけたEz8の左腕を引きちぎり、それを武器に殴りかかる。シローの打撃をサーベルで受け流すノリスだったが、2撃目を振りかぶるシローが「生きてアイナと添い遂げる!」と叫んだことに驚き、頭部に直撃をくらう。ビル陰に入って態勢を立て直すノリス。シローも左腕を捨て、ビーム・サーベルを抜いてグフを追う。

見通しのよい道路でサーベルを構えて対峙する、グフとEz8。親のようにアイナを見守ってきたノリスは、向き合う敵がアイナの想い人と知り、自らの人生が満足だったと覚悟を決めた。

走りこむ2機が交差し、Ez8のビーム・サーベルがグフの腹を切断した。しかし、ノリスは死に際に勝利を叫ぶ。倒れこみながらも、Ez8の背後へ伸びたグフの左腕の三連ガトリング砲が、ビルに隠れた最後のガンタンクを撃ち抜いたのだ。

負けを認めたシローは、両断され横たわるグフに敬礼するのだった。

恐るべき巨大兵器を止めた五将戦法

# ガンダムE.Z.8 VS. アプサラスⅢ

## ■自ら開発した兵器で連邦軍本陣を攻撃する技術将校の妄執

ジオン公国軍の女性パイロット、アイナ・サハリンは、傷病兵を乗せた機動巡洋艦「ケルゲレン」を脱出させるべく、大型モビルアーマー「アプサラスⅢ」で出撃。接近する地球連邦軍大部隊に大型メガ粒子砲で威嚇射撃をすると、休戦を申し出た。しかし、アプサラスⅢに同乗していた、アイナの兄でアプサラスⅢを開発した技術将校ギニアス・サハリンは、これを無視。展開する連邦軍戦力に照準を合わせる。と、大型メガ粒子砲を拡散照射、大多数のモビルスーツを撃破した。

連邦軍もまた交渉に乗るつもりはなく、用意していたモビルスーツ「陸戦型ジム・スナイパー」のロング・ビーム・ライフルをもって、離陸したケルゲレンを撃墜。爆散した船体から、人間を抱えて脱出したモビルスーツも撃墜した。

怒りに駆られたアイナは、大型メガ粒子砲を連邦軍の本陣へ向ける。今にも発射

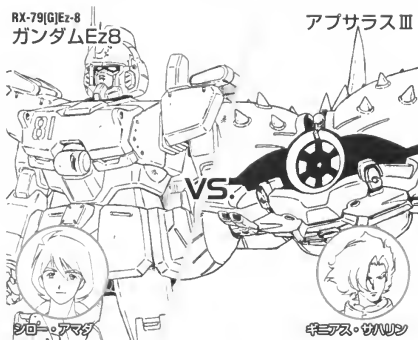
### 第11話 「震える山(後編)」

完成したモビルアーマー「アプサラスⅢ」。狂気に走る技術将校ギニアス・サハリンを、シロー・アマダは止めることができるのか。

RX-79[G]Ez-8

ガンダムEz8

アブサラスⅢ



シロー・アマダ

ギニアス・ザハリン

しようというアイナの視界に、接近するシロー・アマダの「ガンダムEz8」が入った。

シローの姿に、アイナは人としての心を取り戻し、大型メガ粒子砲の狙いをそらし、連邦軍本陣後方の山の半分を吹き飛ばすにとどめた。

アイナは、ギニアスの行動は私闘であり、復讐で兵は生き返らないと兄を非難した。

投降をうながすアイナの言葉に激怒したギニアスは、手にした拳銃でアイナの胸を撃つ。

コクピットから落下するアイナを、Ez8を滑り込ませて受けとめたシローは、外に出てアイナの身体を抱きあげた。

## ■巨大秘密兵器に敢然と立ち向かうふたり

ギニアスはふたりに照準を合わせると、アイナに別れの言葉をつぶやきスイッチを押した。

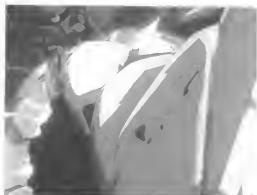
大型メガ粒子砲が発射される寸前、潜んでいたジム・スナイパーがアブサラスⅢを撃ち、アブサラスⅢの右半分がビームで裂かれ炎をあげる。大型メガ粒子砲のビームは、シローたちの脇を抜けるが、その衝撃はふたりの身体を空中へと巻きあげた。

大地に投げ出され右腕の折れたシローを、アイナが抱き起こした。ギニアスの放った銃弾は、アイナが首からかけていた時計が受けとめていたのだ。たがいの無事を喜び合ったふたりは、ギニアスと決着をつけるべくEz8に乗りこむ。

右の操縦桿をアイナにまかせ、シローはビーム・サーベルで大地に横たわるアブサラスⅢに挑みかかる。しかし、アイナを助ける行動を脱走と判断した連邦軍の連隊長は、シローの狙撃を命令。ジム・スナイパーのビーム・ライフルで左肩を焼き切られたEz8は、その衝撃で右腕のビーム・サーベルを落としてしまう。



細く不自然な脚を狙撃され、バランスを崩すアブサラスⅢ。攻撃力に比べ防御能力は低かったようだ。



半壊のガンダムEz8では、コクピットをつぶす以外にアブサラスⅢを止める手段はなかった。

アブサラスⅢを再浮上させたギニアスは、ジム・スナイパーのコクピットを、大型メガ粒子砲の焦点をしぼったビームで射抜く。さらに大型メガ粒子砲にエネルギーをため、フル出力でEz8ごと連邦軍本陣を吹き飛ばそうと、ギニアスはゆっくりとアブサラスⅢの体勢を変えていく。

シローは強い決意で、ギニアスを殺すとアイナに告げる。武器をなくし、左肩から先を焼き落とされたEz8では、ほかにギニアスを止める手段がないのだ。アイナは哀れむように兄への別れをつぶやいた。

狂気の夢をかけた一撃を受け取れと、大型メガ粒子砲のスイッチを入れるギニアスの眼前に、片側のバーニアだけで飛びあがったEz8がせまる。シローとアイナの思いをこめたEz8の右腕が、アブサラスⅢのコクピットを殴りつぶした。その直後、発射された大型メガ粒子砲がEz8の胸から下を溶かし、山を貫いて連邦軍本陣を爆破した。

火をあげるEz8が突き刺さったまま、アブサラスⅢは後退を続け、秘密開発基地の発進口である火口へ落ちると、大爆発するのだった。

## 「小隊」という視点から描かれた泥臭い局地戦

本作の舞台は、ジオン公国軍が勢力範囲を広げる地球上である。それも東南アジアから中国南部の、密林地帯から山岳部へかけての泥臭い地上戦を描いたものだ。

地球連邦極東方面軍の機械化混成大隊（コジマ大隊）が最前線基地を維持しつつジオン軍と攻防を繰り返す。ジオン軍秘密開発基地でつくられた新兵器、巨大モビルアーマー「アプサラス」と戦っていく。

それゆえ、小隊による作戦行動が中心となり、出撃して任務を遂行し、また基地に戻って次の作戦に参加するという「組織としての軍隊」の戦闘が描かれる。

さらに、地上という重力下ではモビルスーツとはいえど、宇宙空間のような活躍はできず、戦闘車両と同じくらいの機動力となってしまう。その活躍の場は、必然的に航空戦力や戦闘車両の運用が難しい、密林地帯や山岳地帯に限られてしまい、戦いはジャングル戦や市街戦、砂漠戦といった局地戦となってしまうのだ。

快適環境が維持されているスペース・コロニーとは違って、重力、高温で不安定な気候、危険な虫や風土病が存在する場所で戦う兵士たち。地球に配属になるまえに環境適応訓練を受けるとはいえ、地球連邦軍の兵士にとっても、大自然がもたら

す力は過酷極まりない。また、ジオン軍の占領政策に抵抗するゲリラが登場するの  
も、本作の特徴のひとつである。彼らは主義主張ではなく、生活のために戦ってい  
る。資源採掘のために制圧・占拠されるのは、彼らが生活している土地なのだ。

ジオン軍側は「オデッサの戦い」での敗北からバワーバランスを崩し、連邦軍に追  
われ、多くの兵士が秘密開発基地へと撤退してくる。

そのなかには、誇り高き女小隊長トップ、かけひきに長けたボーン、部下思いのユ  
ーリ、武人としての使命をまっとうしたノリスなど、魅力的な兵士が多く、彼らとの  
戦いには、シロー・アマダが指揮する「第08MS小隊」も苦戦を強いられた。

登場するモビルスーツにも、地上ならではの特徴が見られる。08小隊の使用する  
陸戦型ガンダムは、重力下での使用が強く考慮されている。搭乗するためにはコク  
ピットまで昇っていかなければならない。そのためコクピットハッチのわきに昇降シ  
ステムがつき、搭乗用ロープが降りるようになっていいる。

またコクピットのヘリにタラップがあったり、野戦用のライトが付いていたりと、  
戦車などの陸上兵器に近いものになっているのだ。

対してジオン軍側は、ミノフスキー・クラフトを使用した大型モビルアーマーを開  
発。地上に特化した形の陸戦型ガンダムと、重力を克服したアプサラスの戦いとい  
う構図は、アースノイド（地球居住者）とスペースノイド（宇宙居住者）の戦いの相  
似形でもあったのだ。

第4章

機動戦士ガンダム

MS  
I  
G  
L  
O  
O

—1年戦争秘録—



「一年戦争」の開戦3ヶ月前、とある部隊が新設される。ジオン公国軍技術本部の第603技術試験隊。

この部隊は、最前線に新兵器を送り出すにあたり、試作兵器を試験的に運用して、その評価を下すことを目的としていた。

元民間連絡貨客船だった「ヨーツン Heim」には、技術本部のオリヴァー・マイをはじめ、総帥府のモニク・キャディラックなど、各方面からメンバーが引き抜かれる形で集められた。

だが第603技術試験隊は、指揮系統が複雑あり、非軍属人員も徴用されるなど、問題だらけの部隊でもあった。

なにより、ここへまわされる試作兵器は、問題のあるものが多かった。そんな兵器たちと、その運用に命を懸けた男たちの物語が幕を開ける。

## Phraseology

### ■ 第603技術試験隊

ジオン公国軍の試作兵器を試験運用し、その評価を下すことを目的とした技術本部の部隊。連絡貨客船だった「ヨーツン Heim」を母艦としているため、艦長や航海士などはもともと軍属ではない。また、技術情報科の要員だけではなく、技術試験科や総帥府など、各方面からもメンバーが集められており、寄せ集め感が否めない。艦長のプロホノウをして、「魔女の鎮」にたとえられている。

### ■ ヨーツン Heim

元連絡貨客船だった試験支援艦。軍に徴用され、大型貨物船として改装された。軍艦として見れば、基本的に武装は貧弱といわざるをえない。

### ■ ジオニック社

ジオン公国に本社を置く、史上初めてモビルスーツの開発に成功した兵器メーカー。「ザク」や「グフ」、「ゲルググ」など、ジオン軍に制式採用された機体は数多い。これは、機体性能もさることながら、企業幹部と政府の癒着に起因するところもあるようだ。

### ■ ツィマット社

「ドム」や「ゴッグ」といったモビルスーツを開発した、ジオン公国の兵器メーカーのひとつ。初期のモビルスーツ開発競争においても、「ツダ」を提供していたが、コンペの末「ザク」に敗れた経緯がある。

大艦巨砲主義時代の終焉を告げる「大蛇」の咆哮

# ヨルムンガンド VS. マゼラン

## ■「ルウム戦役」の決定打として期待された巨大砲

最前線に新兵器を送り出し、実戦運用するために組織された部隊、「第603技術試験隊」。そこに試験1号機として、「ヨルムンガンド」が受領される。この試作艦隊決戦砲は、全長200メートルにもおよぶ長い砲身から核融合のプラズマ・ビームを発射し、射程300キロメートルという超長射程からでも戦艦「マゼラン」を撃破できる威力を誇る。

その形状から「大蛇」と称されたこの兵器は、大艦巨砲主義の延長で開発され、抜群の破壊力を秘めていた。そのため、ジオン公国独立戦争の要として期待され、試験支援艦「ヨーツンヘイム」に搭載されることとなる。

しばらくの時を経て、ヨルムンガンドはついに実戦運用される機会を得た。ルウム宙域において、地球連邦軍、ジオン軍ともに大艦隊を展開した、世にいう「ルウ

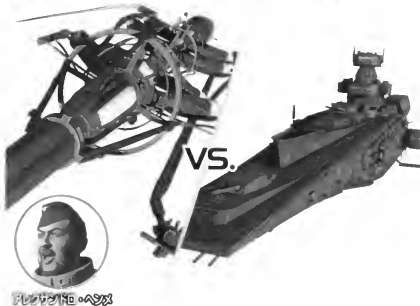
### 第1話

#### 「大蛇はルウムに消えた」

「ルウム戦役」での活躍を期待された、艦隊決戦砲「ヨルムンガンド」。ろくな活躍もできない本兵器の前に、敵戦艦がせまる。

## 艦隊決戦砲ヨルムンガンド

## 戦艦マゼラン



「ム戦役」である。彼我の戦力差は、3対1。圧倒的不利にあったが、大蛇の活躍いかんによって、きつとこのルウム戦役の結果は変わると思われていた。

その砲撃を任されたのは、砲術長のアレクサンドロ・ヘンメ。砲術に関してはベテランの猛者である。彼ならばこの兵器を見事に使いこなして、多大な戦果をあげてくれるだろう。第603技術試験隊の誰もがそれを信じて疑わなかった。

それからしばらく時は流れ、両軍の艦隊の砲門が一斉に撃ち放たれた。漆黒の宇宙に強烈な火線が展開する。ついに、人類史上初の宇宙艦隊戦が幕を開けたのだ。

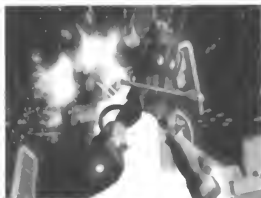
## ■戦場の片隅で光り輝いた男の意地

ヨルムンガンドが適切に攻撃するには、観測データをもとにした友軍からの間接射撃指示が必要だった。ところが、いっこうにその指示は届かず、徐々に第603技術試験隊はあせりを隠しきれなくなっていく。

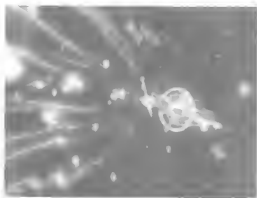
そこでオリヴァー・マイ技術中尉は、スペース・ランチで直に現場へと向かい、観測データを取ろうとした。そこへ、友軍部隊が突如現れ、彼らを制止する。それは、モビルスーツ「ザク」だった。

「この場を譲られたし。モビルスーツの襲撃は作戦計画に乗った行動なり」  
呆氣にとられる彼らを尻目に、ザク部隊は連邦艦隊を次々と撃破していく。モビルスーツの見事なまでの活躍ぶりを見た技術試験隊は、やっと気づく。自分たちは最初からアテにされていなかったのだ。

そこへ、戦闘宙域からの流れ弾がヨルムンガンドを直撃。ヘンメ以外の運用メンバーが宇宙へと放り出され、ヘンメ自身も重傷を負ってしまふ。さらに運の悪いこ



地球連邦軍艦隊を次々に撃沈するザク。ヨーヅンヘイムは期待された兵器ではなかったのだ。



大砲屋が操る大蛇は、かろうじて活躍した。しかし、それは時代の変わり目を告げる咆哮にすぎなかった。

とに、手負いのマゼランがヨーツンヘイムのいる方面へと進軍してきた。ヨルムンガンド運用のために砲撃手が出払っていたヨーツンヘイムにとって、これは最悪の事態だった。しかし、艦長のマルティン・プロホノウは、大切なヨルムンガンドの乗員救出を優先する。もはやそれは自殺行為に等しかった。

そんな艦長の心意気を組むように、ヘンメはマゼランへの砲撃を決意する。距離的には直接照準をつけられる距離だった。

無茶な行為だと叫ぶマイに対し、ヘンメは悟ったようにつぶやく

「どうやら、これからはモビルスーツが主役のようだ。大砲屋の時代の幕引きを俺にやらせてくれや」  
そうして放たれたプラズマ・ビーム砲は見事マゼランに直撃。ルウム宙域に、轟音と閃光がきらめくと同時に、ヘンメもまた静かに息を引きとった。

ルウム戦役でジオン軍は勝利を収めているが、それにヨルムンガンドはまったく寄与していない。戦場の片隅で、時代の波に翻弄されまいと抗った男の意地が光り輝いただけであった。

捨て駒にされた男が見せた驚異の戦車操縦術

# ヒルドルブ VS. ザク

## ■捨て駒として前線に送られた、時代遅れの巨大戦車

ジオン公国軍の地球侵攻が順調に進むなか、「第603技術試験隊」に新たな試験兵器が届けられた。試験モビルタンク「ヒルドルブ」。全長35・3メートルという巨大なこの戦車は、最高速度110キロで地上を走行。また、車体を起こして口ポットの上半身を形成するモビル形態に変形することができる。

ところで、このヒルドルブは、2年前にすべての評価試験を終え、不採用の烙印を押されていた。しかも命令では、衛星軌道上から大気圏突入カプセル「コムサイ」で突入してアリゾナで地上試験を終えたあと、現地で運用するという。

つまり、評価試験というのは表向きで、実態はただの捨て駒だったのだ。

そんなヒルドルブを操縦するパイロットは、デメジエール・ソンネン少佐。彼は元戦車教導隊の教官だったが、モビルスーツ操縦には不適と判断され、自暴自棄な

### 第2話

「遠吠えは落日に染まった」

運用試験のためモビルタンク「ヒルドルブ」は、地球に降下。しかし、そこには地球連邦軍に鹵獲された「ザク」部隊が待ち構えていた。

YMT-05

ヒルドルフ

MS-06J

ザク



デズメル・ゾンセン

カデリオ・ツァリール

日々をすごすようになり、今では薬物が手放せない体となってしまっていた。時代にとり残された男ソネンを、以前は尊敬していたモニク・キャディラック特務大尉は、彼をこう侮蔑する。

「軍人は腐ったら野良犬以下よ」

戦いは突然はじまった。地上へ落下していたコムサイが、突如謎の部隊の襲撃を受けたのだ。それは、地球連邦軍のフェデリコ・ツァリアーノらの仕業だった。彼らは鹵獲したモビルスーツ「ザク」を運用して、敵を油断させては、ジオンの物資集積所を襲撃していた。コムサイを守るべく、ヒルドルフは緊急降下し、ザク部隊との戦闘に身を投じる。

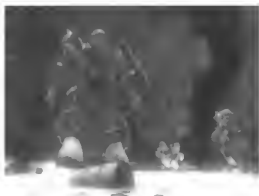
## ■戦車の特性を活かして敵を翻弄

砂漠に着地したヒルドルブだったが、射撃制御上の問題があり、今はソンネンの勘だけを頼りにしなければならぬ。しかしそんな不利な状況をものともせず、ソンネンは善戦を続けた。

あるときは、ナパーム弾を撃って、その炎にビビって止まったザクを2射目で撃破したり。

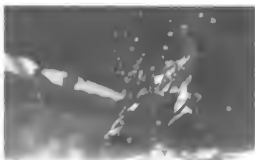
キャタピラの一部を破壊されたときには、スモークを散布しているあいだにモビル形態に変形し、敵機がひるんでいる隙に2機のザクを撃破したり。

驚くべきはソンネンの臨機応変さだが、その最たるものが次の戦闘だ。留まっているヒルドルブに再びザクが接近してきたため、その場を離れようとするが、倒したザクのパーツを車輪に巻き込んでしまう。するとソンネンは、ヒルドルブの主砲を地面に向けて発射し、その反動で車体を浮きあがらせ、反対側の車輪だけで走行し、ザクに車体をぶつけ、転倒した隙にとどめを刺している。戦車の特性を熟知した、見事な戦いぶりといえる。



鹵獲したザクを使って、襲撃を繰り返していたツァリアーノの地球連邦軍部隊。ヒルドルブは単機で戦う。





ソンネンの卓越した戦術操縦は、ザクを翻弄。それはモビルスーツへの恨みを晴らすかのようなだった

こうして4機のザクを倒したソンネン。これで終わったと思い、油断したソンネンの前にツァリアーノのザクが立ちはだかる。ヒルドルフは激しい打撃を受け、マシガン弾がコクピットを直撃し、ついに沈黙してしまった。

それを見届けたツァリアーノは、コムサイが落下した方面へとザクを動かす。そこへ、突然背中側から砲弾が放たれ、ザクは撃破されてしまう。それはヒルドルフの主砲だった。ソンネンは、戦いの終焉を確信すると静かに息を引きとる。

戦闘のすべてを見届けていた、コムサイ内のオリヴァー・マイ技術中尉とモニクはつぶやく。

「軍人は、腐っても野良犬以下じゃありません」

「死んだらやつぱり、野良犬以下よ……」

ソンネンの操縦技術は卓越したものがあつた。しかし、彼は戦う場所をモビルスーツ、ザクに奪われた。だから、そんな彼がザクと戦う機会にめぐり会ったのは運命だったのかもしれない。自分の居場所を奪ったザクに、精一杯の意地をぶつけて。

男のプライドは、夕日に暮れなずむ砂漠に悲しく刻まれた。

モビルスーツ開発競争に敗れたゴーストファイターの悲劇

# ヅダ VS. ジム部隊

## ■政治に翻弄された、幻のモビルスーツ

「第603技術試験隊」に新たに配備された「ヅダ」。それは、かつてジオニックス社の「ザク」と制式採用をめぐって争ったツイマツト社のモビルスーツで、機動性を重視した機体であった。しかし、ヅダは試験飛行中に事故を起こし、ザクに敗れてしまう。それから4年がすぎ、ヅダは改修により新たな機体に生まれ変わった。しかもその性能はザクを遥かに凌駕するという。それがジオンの放送によって大々的に宣伝されたことは、この兵器への期待を大きく表わしていた。

が、ヅダは、第603技術試験隊での試験運用中にまたも事故を起こしてしまう。限界まで出力を上げて加速極点に達すると、機体は耐久限界を超えて空中分解。結局、中身は4年前となんら変わっていないかったのだ。あの放送もプロパガンダで、ヅダはただのゴーストファイターにすぎなかった。

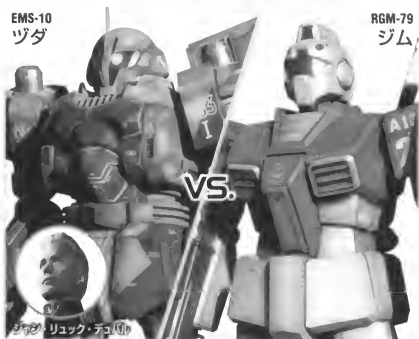
### 第3話

#### 「軌道上に幻影は疾る」

「オデッサの戦い」から敗走したジオン公国軍部隊は、衛星軌道上に打ちあげられた。彼らを救うべく、モビルスーツ「ヅダ」が向かう。

EMS-10  
ツダ

RGM-79  
ジム



シャ・リョック・デュバル

にもかかわらず、ツダの性能を信じて疑わない人物がいた。ツイマツト社出身のジャン・リユック・デュバル少佐である。自らツダを乗りこなす彼は、その性能に妄執し、性能に問題がないことを主張する。だが、地球連邦側のアングラ放送で実態が暴露されてしまった今では、彼の主張はもはや空々しかった。

そんなときに、第603技術試験隊に指令が下る。「オデッサの戦い」に敗北したジオン公国軍の敗走部隊が、地上から宇宙へと大量に打ちあがるので、それを救助せよというものだった。

部隊のほとんどは地上用モビルスーツで、宇宙ではまともに動けな

い。そこを連邦軍は急襲しており、ザクですら、モビルポッド「ボール」にいいように撃破される始末だった。そこで、救助活動のためにツダは緊急出撃する。

### ■幻影は、存在を照らすほどの光になりて

機動性に勝るツダは、ボールを次々に撃破するが、そこへ連邦軍の主力モビルスーツ「ジム」部隊が姿を現す。全滅すら考えられる最悪の状況にデュバルは愛機を駆り、ジム部隊の前に立ちはだかつて、瞬く間に2機を撃墜せしめる。

ジムのパイロットたちはツダの登場に驚くが、そこでひとりの兵士がその姿を見てこう嘲笑する。

「ははは、こいつ知ってるぞ。放送で世界に恥をさらしたボンコツだ！」

例のアンケラ放送のことだった。侮辱の言葉を受け、デュバルはジムに機動戦をしかけ、そのままジム部隊を引き離すべく、加速をかける。

デュバルは、空中分解の危険を冒しながらジムを挑発する。ジムも必死で追うが、



改修されたはずのツダだが、加速極点を超えると空中分解する。4年前と変わらない機体だった。



時代の間にひそんだモビルスーツは、政治に翻弄された。しかしようやく、自らの存在を光り輝かせる。

なかなか追いつけない。ツダとジムの追いかけっこは、チキンレースの様相を呈した。結局、高速に耐えきれず先にオーバーヒートして、自爆したのはジムだった。4機のジムは全滅したが、猛スピードで推進するツダはもはや止められない。機体は徐々に悲鳴をあげ、ついに自爆する。過熱で真っ赤になったツダの残骸だけが、衛星軌道上に赤い発光体となって宇宙の闇に消えていった。

これは戦闘と呼べるものではなくたかもしれない。しかし、ツダというゴーストファイターが、自らの存在を照らすための「勝負」であったことには違いない。

「モビルスーツ、ツダはもはやゴーストファイターではない。この重大な戦局で、確かに戦っている。この独立戦争で、厳然と存在しているのだ」

デュバルが最期に残した言葉は、人の意思が交錯するなかで生まれたツダの幻影が、ようやく晴れたことを意味している。

幻のなかに生きたモビルスーツだからこそ、その光を自分から強く放つことでしか、その存在意義を示せなかったのかもしれない

## 活躍の場を奪われた兵器とパイロットの悲哀

「MS-IGL00」は、「1年戦争」をオールCG作品として初めて、ジオン公国軍視点から描いたドラマである。主人公は、第603技術試験隊に所属するオリヴァー・マイなのだが、むしろメインは、技術試験隊に次々と担ぎ込まれる試作兵器と、それにかかわりのあるパイロットたちである。

「1年戦争秘録」編は、戦争勃発から「オデッサの戦い」までを描いているのだが、正直いつて登場する試験兵器はどれも、時代遅れのものばかりである。

艦隊決戦砲「ヨルムンガンド」は、大艦巨砲時代を象徴するかのような巨大な決戦兵器。威力は抜群だが、リーダーを無効化するミノフスキー粒子が戦争を左右する時代にあつては、決定打と呼べる戦果は期待できず、小回りの利くモビルスーツ「ザク」に主役の座を奪われてしまった。

試作モビルタンク「ヒルドルフ」は、変形機構こそあれど、基本的には巨大戦車の延長線上にある兵器。戦車としてのポテンシャルは高いものの、モビルスーツという新兵器から見れば、時代遅れの感が否めない。戦場の主流となることは許されなかつた。

制式採用コンベで敗れた「ヅダ」は、モビルスーツ開発史そのものにおいて闇に葬られた機体。加速極点に達すると機体が空中分解するという欠陥こそあったものの、開発競争に敗れた敗因のひとつに、ジオニック社と政府の癒着があり、数多くの裏工作があったともいわれている。

改めてこれらを見ると、いずれの機体も、ジオン軍を象徴する主力モビルスーツ、ザクが繁栄する過程において日陰に追いやられた兵器ばかりだということがわかる。いふなれば、これらは「アンチ・ザク」とでもいうべきカテゴリーである。ザクをライバル視していたのは、地球連邦軍だけではなかったのである。

ジオン公国の独立を勝ちとるために開発されたという経緯は、いずれも同じだろう。しかし、これらの兵器は、戦う場をさまざまな要因で奪われた。

そして、それを任されたパイロットたちもまた、戦う機会を失った。

ヘンメは戦争の真つ最中に切り捨てられ、ソンネンはモビルスーツ適性試験で弾かれ、デュバルはジオニック社のデマゴーク（扇動家）に敗れた――。

軍人である以上、戦わせてもらえないことは堪え難い屈辱だったろう。だからこそ、彼らは必死で戦いの場を求めた。そのあがきがどんなに惨めな姿だったことか。だが、それこそがアイデンティティーを求める人間の真理でもある。

戦争の大勢には影響なかったかもしれないが、ザクだけが戦っていたわけではないのだ。

第5章

機動戦士ガンダム

MS  
I  
G  
L  
O  
O

— 黙示録 0079 —



ジオン公国軍の劣勢が濃厚な、「一年戦争」末期。ジオン軍技術本部の第603技術試験隊には、あいかわらず試作兵器が送り込まれていた。

しかし、このころに送られる兵器はいずれも急造品ばかりで、ロースベックといわざるをえないものが多かった。

だが、逼迫する戦局にあっては、それもまた受け入れざるをえない現実だった。

そんななか、オリヴァー・マイはあいかわらず、肅々と評価試験用のデータを取り続ける。

しかし、これまで試作機に命を預ける戦士たちの姿を見続けてきたことで、彼のなかにはある思いが芽生えていく……。

敗戦濃厚な時代のなかで、知られざるジオン軍兵士たちの闘志とフライトが、今戦場で輝く。

## Phraseology

### ■ モビルダイバーシステム

ジオン公国軍の、宇宙から地上に向けて攻撃する特殊兵器。「ゼーゴック」を管制ユニットとし、ジョイントされた巨大な武装コンテナの武器で攻撃を行う。武装コンテナは使用後に切り捨てられてしまい、ゼーゴックのみが友軍の空母に回収されることになる。なお劇中では、マルチミサイルバス（空対空ミサイル）、アールアイン（速写ロケット弾）、クーベルメ（拡散ビーム砲）の3兵器が登場している。

### ■ 年少兵

兵力不足を補うために、兵士として徴用された学生たち。ジオン公国軍の逼迫した戦況は切実で、第603技術試験隊に配属された年少兵のほとんどは、実戦経験のない10

代の少年だった。

### ■ グラナダ

ジオン公国軍の重要拠点のひとつである月面基地。キシリア・ザビの機動宇宙軍が駐留しているが、ギレンと反目する関係から、決戦をまえになかなか援軍を出す気配がなかった。

### ■ ア・バオア・クー

ジオン公国軍の重要拠点である宇宙要塞。「一年戦争」の最終決戦「星一号作戦」の舞台となった場所で、東西南北に区分された4宙域のなかでもNフィールドとSフィールドは敵の主力が集中し、激戦が繰り広げられたエリアだった。

大気圏落下中に敵を攻撃する、究極の捨て駒兵器

# ゼーゴック VS. 地球連邦軍艦隊

■卓越した操縦術でスカイダイブを敢行する、海の男

「一年戦争」も終盤に入り、「第603技術試験隊」にまわる試験兵器は、評価試験と同時に実戦も担うようになっていた。

とはいえ、ジオン公国軍劣勢のこの時期にあつては、試作兵器は急造品が多くなる。モビルダイバーシステムもそんな機体のひとつだ。

これは衛星軌道上から自由落下で大気圏内へと突入し、落下しているあいだに全長73・7メートルの兵装コンテナに搭載された武器で、地球連邦軍本部「ジャブロー」から打ちあげられる連邦軍戦艦を撃墜するというものだった。

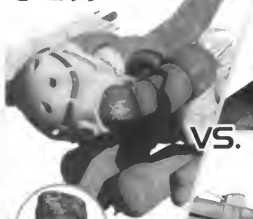
「ゼーゴック」は本システムの管制ユニットで、宇宙が主戦場となっているこの時期には無用となった水陸両用モビルスーツ「ズゴック」を再利用している。片や落下中、片や打上中とあつて、攻撃は高度が揃うワンチャンスのみ。

## 第1話

「ジャブロー上空に海軍を見た」

地上より打ちあがる地球連邦軍の戦艦を、大気圏中で撃破する。このあまりに無謀な作戦に、「ゼーゴック」が参加する。

MSM-07DI  
ゼーゴック



ヴェルナー・ホルバイン

戦艦マゼラン



VS.

巡洋艦サラミス



この機会を狙って短時間に任務を行うこの兵器は、使い捨ての兵器にほかならなかった。

この兵器は、大気圏落下中に機体を制御し、操縦するという高度な技術が要求される。その点において、全滅した第604技術試験隊から移送された、海兵隊員のヴェルナー・ホルバインは適格だった。

ただ、彼は戦闘状態に入ると、躁状態になる欠点があった。ホルバインにとってこの任務は、海に潜って魚を捕る漁そのものに感じられるようだった。

第603技術試験隊において、ゼーゴックはすでに二度の遊撃作戦を実施している。しかし、戦果は今だ

なし。

そんななか、オリヴァー・マイ技術中尉は、主戦場がほぼ宇宙へと移りつつあるこの時期に、衛星軌道上でくすぶるこの無謀な作戦に疑問を感じ、ホルバインに作戦中止を進言したいと吐露する。

しかし、海で死んだ漁師である祖父を心酔する彼はそれをいさめ、こう告げる。

「爺さんはさ、こう言ったんだ。獲物を捕ろうとするな。海がその気にならないかぎり、獲物はない。だから海に潜る。何度でも、何度でもってな」

戦果がないからといって、それを放り出していいというものではない。マイは、彼の心意気を汲みとって、翌日の作戦で最後にしようと言った。そこで見事有終の美を飾ろう、という気もちで……。

## ■地球の上空に海を見て、母なる海に果てる

ついに最後の作戦がはじまった。ほぼ垂直に落下するため、強烈なG（重力の単位）を受けながらも、ホルバインはゼーゴックをたくみに操る。ある程度の高度に



自由落下中に対空攻撃を全部かわすなど、ホルバインの操縦技術は卓越していた。



自由落下中に強烈なGを受けながら、ゼーゴックは見事敵艦を撃破する。これは、奇跡的なことである。

なるとモビルターバーは反転し、地上に背を向けながら急落下していった。

途中、多数の敵艦がすれ違う。あまりの衝撃に、ホルバインはなかなか攻撃に移れない。まるで深海に落ちていくような、不思議な感覚が彼の全身を包む。刹那に目覚めたホルバインは、一気に試作拡散ビーム砲を発射する。強烈な火線は、連邦軍戦艦の無防備な背中を捕らえた。戦艦「マゼラン」1隻と、巡洋艦「サラミス」4隻を次々と撃沈する。ついに海の男は大きな戦果をあげたのだった。

だが、悲劇はすぐに起きた。安堵し、帰還ルートに入るゼーゴックに対し、連邦軍の戦闘機「コア・ブースターII」が急襲をしかけてきたのだ。機動性に劣るゼーゴックはまともに反撃できず撃墜されて、ジャブローの海に落下してしまう。

「ああ、海だ……」。海への思いが強かったホルバインにとって、海を主戦場としない戦況は、本意ではなかったことだろう。

だから、海と似た感覚が味わえるジャブロー上空は海以外のなものでもなかった。海の男の亡がらは今、母なる地球で本当の海に沈んだ。

急造兵器で立ち向かう年少兵の勇敢なる戦い

# オツゴ部隊VS.ボール部隊

## ■急造兵器に自分の命をたくす年少兵

宇宙要塞「ソロモン」が陥落し、いよいよ地球連邦軍とジオン公国軍は宇宙要塞「ア・バオア・クー」での決戦を控えていた。そんななか、「第603技術試験隊」にまたも新たな兵器が到着する。駆逐モビルポッド「オツゴ」。戦局の逼迫にとともに、技術本部が優先開発したこの機体は、ドラム缶のようなボディに砲塔とマニピュレータをとり付けただけの急造品で、その性能はモビルスーツにはおよばないことは明白だった。ただ、すでにこの機体は評価試験を待たずに制式化され、量産されてしまっている。決戦をまえにして、モビルスーツの絶対数不足を補うべく、オツゴはア・バオア・クーにも集結していた。もはや評価試験は有名無実だった。

そんななか試験支援艦「ヨーツンヘイム」は、ヘルベルト・フォン・カスペン大佐のカспен戦闘大隊に組み込まれる。そして、オツゴを運用する兵士たちも到着

### 第2話

#### 「光芒の峰を越えろ」

地球連邦軍艦隊を討つべく、試験支援艦「ヨーツンヘイム」は月面都市「グラナダ」方面に進軍。駆逐モビルポッドを出撃させる。

MP-02A

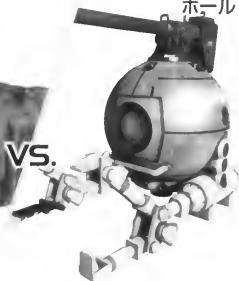
オッゴ



エルヴィン・キャディラック

RB-79

ボール



するのだが、それは実戦経験に乏しい年少兵たちだった。そのあまりにお粗末な補充に対し、憤るカスベン。しかし、それを反論するようにひとりの年少兵が、自分たちは志願兵であり、相応の覚悟と憂国の思いをもっていると主張する。

少年の名は、エルヴィン・キャディラック。第603技術試験隊のモニック・キャディラック特務大尉の弟だった。姉弟はいつもケンカが絶えないが、お互いに親愛する仲だった。そして、戦争で離ればなれとなった彼らは、戦場で奇妙な再会を果たすのだった。

そこへ、第603技術試験隊に陽動目的に月面基地「グラナダ」へ向

かう連邦軍艦隊を迎撃する任務が下る。その任に就くのは、エルヴィンを隊長とした部隊。出撃前、オッゴのような機体での出撃を陳謝するオリヴァー・マイ技術中尉に対し、エルヴィンはこう返事する。「僕はオッゴを信じます。僕の命を懸ける兵器ですから。宇宙で一番大切な機体ですから」

## ■月が見ていた、少年たちの戦い

ついに、連邦軍艦隊とヨーツンヘイムは接触した。ところが、敵の主力はモビルポッド「ボール」で、パイロットも着任したばかりの素人ばかり。戦力は五分五分といえた。

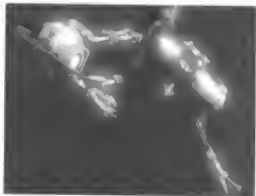
エルヴィンは実によく戦った。機体が安定しない相手には速攻をしかけ、背後をとられたらマニピュレータを半回転してザク・マシンガンを連射。この急造兵器は、予想以上の性能を発揮していた。だがそんな最中、1機のオッゴにトラブルが発生。武器を使えぬ状況にパイロットはパニックとなり、ついに撃墜されてしまう。

仲間の死を目の当たりにし、エルヴィンは放心状態となる。そこへ、彼を死なせ



軍隊に組みこまれた第603技術試験隊に、大量の年少兵が配属される。逼迫した戦局を物語っている。





オッゴのほうが性能的に上とはいえ、エルヴィンの戦闘は見事だった。機体の可能性さえ感じさせる。

たかないキャディラックの徽が飛ぶ。我に返った彼は、せまるボールのキャノン砲をマニピレータで掴んでもぎり取り、それを棍棒のように振り回してボールを撃破した。残るボールはあと1機となった。お互いに残弾はなく、すでに現場に連邦軍艦隊はなかった。エルヴィンは敵パイロットに対し、必死で無駄死にはよせと説得し、降伏させる。戦いは、エルヴィンの勝利で終わったのだ。

ボールとともにオッゴがヨーツンヘイムへ帰還すべく向かう。束の間の安らぎ。彼が安堵の表情を浮かべたそのとき、一筋の閃光がオッゴを直撃する。それは先ほどの連邦軍艦隊からの砲撃だった。

結局、この連邦軍艦隊は、グラナダから発進したジオン軍艦隊に駆逐される。しかし、時すでに遅く、エルヴィンは帰らぬ人となった。悲嘆にくれ、号泣するキャディラック。唯一の救いは、エルヴィンの戦いがグラナダ艦隊の腰をあげるきっかけになったことだが、それは彼女にとってはどうでもいいことであった。そこには、特務大尉という軍人ではなく、家族を失った悲しい女の姿しかなかった。

悲しみの技術中尉・弩級モビルアーマーで激闘

# ビグ・ラング VS. 地球連邦軍部隊

## ■オリヴァー・マイ技術中尉自ら、最初で最後の戦闘へ

全長203メートルもの巨大モビルアーマー「ビグ・ラング」。それが「第603技術試験隊」に最後に与えられた試作兵器だった。弩級モビルアーマーの機体を流用し、モビルアーマー「ビグロ」と連結したこの機体は、最前線に駆逐モビルボツド「オッゴ」や弾薬を補給することを目的としており、機体の下部に僚機を収容できる。つまりビグ・ラングは戦闘兵器であると同時に、サポートメカでもあった。

そのビグ・ラングの受領が行われるなか、宇宙要塞「ア・バオア・クー」決戦ははじまり、各所で激戦が繰り広げられた。Eフィールドに配された第603技術試験隊は、主戦場ではないこの宙域に、オッゴを大量に投入して戦線を維持する任務に就く。それは年少兵たちには重荷だったが、ヘルベルト・フォン・カスペンだけは、その作戦の成功を信じて疑わなかった。

### 第3話 「雷鳴に魂は運る」

決戦に敗れたジオン公国軍は、ついに本国へと逃亡する。「第603技術試験隊」は、必死でその脱出路を守ることとなる。

MA-05Ad

ビッグ・ラング

RGM-79C

後期型ジム

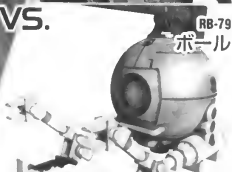
VS.

RB-79

ボール



オリヴァー・マイ



そんななか、急遽ビッグ・ラングのパイロットが、オリヴァー・マイ技術中尉に決まる。それはパイロット経験に乏しい彼にとっては、無謀な命令だった。彼の必死の抗議も空しく、戦いははじまってしまう。

試験支援艦「ヨーツンヘイム」は戦場を進軍し、オッゴ部隊を無事投下するが、その直後、新たな敵艦隊がヨーツンヘイムの右舷に現れる。これを紙一重でかわした直後、後方からのビームが敵艦隊を一掃した。それは、マイが操縦するビッグ・ラングの攻撃だった。

彼は機体の調整を終え、戦う決意をしたのだった。そして、仲間にくう吐露する。

「このコックピットに座り、本当にわかった気がします。男たちが命をかけた戦いを見守ることを。その男たちが命を預けた兵器を見つめることを。たとえ、それがどのような兵器であっても、記憶を後世まで残したい」

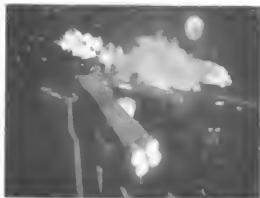
## ■脱出路を確保するための防衛戦

ア・バオア・クーでの激戦は、徐々にジオン軍劣勢となっていた。そんななか、ビッグ・ラングはビーム攪乱膜で巨体を防御しつつ、オッゴが戦う戦線におもむく。あるときはバルカン砲を乱射、あるときはアームでモビルポッド「ボール」を掴んで投げ飛ばす。さらに対艦ミサイルや大型メガ粒子砲で、連邦軍戦艦を次々と撃沈せしめる。その猛攻ぶりですら、いったん連邦軍を後退させることにも成功した。

だが、戦況は一変する。ア・バオア・クーが陥落したのだ。スペース・コロニー「サイド3」へ向けて敗走する艦隊は、Eフィールドを駆け抜けていく。しかも、停戦命令同様の通達がなされても、連邦軍の追撃部隊はその手を緩めることはなかつ



戦況が刻々と悪化するなか、ビッグ・ラングとオッゴは必死にEフィールドの維持に全力を傾けていた。



憤怒から停戦命令を無視し、連邦軍は攻撃を止めない。泥沼化する戦いで、ビグ・ラングは轟沈する。

た。多くの同胞を失った恨みは、当然彼らにもあった。怒る連邦軍部隊は、オッゴやビグ・ラングを次々と攻撃する。

今や戦いは、友軍が脱出するまで、この宙域を維持するためのものにすぎなかった。しかし、マイは戦う。モニク・キャディラックも、カスペンも愛機を駆り、援軍として馳せ参じる。寄せ集め部隊だった第603技術試験隊は、ここにきてひとつの意志で団結した。

だが、物量に勝る連邦軍との戦いは明らかに不利であり、ビグ・ラングは奮闘空しく撃沈してしまう。彼方で光る爆光は、部隊の全滅を予感させるのに十分だった。しかし、彼らが命をかけて戦ったからこそ脱出路は確保され、最後の敗走艦隊も無事サイド3へと逃げおおせたのだ。

多くの犠牲を払ったことに、艦長は切実な思いにかられるが、そこへ左舷からの部隊が接近する。それはあの激しい戦いから生還した、キャディラックたちだった。そして、そのなかには、業を背負った男たちを見続けた男、マイの姿もあった。

## 急造品という時代の徒花に宿った、人間の深き思い

「MS-IGL00」の「黙示録0079」編は、時代的には「一年戦争」終盤の約1ヶ月間を舞台としている。このころになると「第603技術試験隊」に送り込まれる兵器は、評価試験と実戦運用を兼ねたものが増えるのだが、そのほとんどは急造品ばかりというのが実情。「一年戦争秘録」編は時代遅れの兵器が主役だったが、「黙示録0079」編の主役は敗戦濃厚な時代の徒花たちである。

モビルダイバーシステムの管制ユニット「ゼーゴック」は、もはや活躍の場を奪われた水陸両用モビルスーツ「ズゴック」を流用。衛星軌道上から地上へと落下する間に、宇宙へ打ちあがる敵戦艦を撃ち落とすという、無謀な使い捨て兵器だった。

駆逐モビルポッド「オッゴ」は、戦力不足を補うために急速量産。地球連邦軍の「ボール」並みの戦力で、とてもモビルスーツ戦に耐えうるものではなかった。

しかも、既存パーツを流用することが多く、そのパーツの精度も決して高いものとはいえない難かった。

モビルアーマー「ビッグ・ラング」は、建造中のほかの機体を流用した、オッゴの補給・修理を行うサポートユニット。強力な武器を備えている一方、管制ユニットに

高速戦闘を得意とする「ビッグロ」を使用しており、その特性を殺してしまっている。どれもこれも、ありものを流用した無謀極まりない兵器ばかりで、劣勢におちいたジオン公国軍の窮状をよく表している。

モビルスーツ・バリエーションでは「ザクタンク」なる、「ザク」の上半身と戦車「マゼラ・アタック」の車体部「マゼラ・ベース」を合体させた現地改修機が存在するが、『黙示録0079』の兵器はそれと同レベルのもの。とても、戦局を開するポテンシャルはないと断ずるほかない。

それでも彼らは戦う。戦況の有利・不利にかかわらず、精一杯戦う。未熟な兵器に自分の命を預けたパイロットたちの戦いぶりは、まさに獅子奮迅だった。

ホルバインは、常人では耐えられない自由落下中のG（重力の単位）を全身に受けて、何度も作戦に身を投じて、最後によりやく敵艦を多数撃墜する戦果をあげた。エルヴィンは、粗悪なモビルポッドに乗りながらも、がむしゃらに適切な判断と対応で、ボール隊をほぼ全滅に追いやっている。

マイは、パイロット経験がほとんどないにもかかわらず、敵の侵攻を食い止める最前線に身を投じて、必死に宙域の維持に努めた。

彼らの戦いからわかるのは、勝負の決め手が兵器の性能だけではないということだ。与えられた条件のなかで、諦めずにどれだけ強い気もちで最善を尽くすか。これは、モビルスーツ同士の戦いでもいえるだろう。

第6章

機動戦士ガンダム

0083

STARDUST MEMORY



宇宙世紀0083年。

今なお、前大戦「一年戦争」の傷跡が色濃く残る場所、オーストラリア。

この地にある地球連邦軍基地「トリントン」に、最新鋭戦艦である「アルビオン」が、新たに開発された2機の「ガンダム」を搭載して到着した。

だが、そのうちの1機、「ガンダム試作2号機」は試験用の核弾頭を装備したまま、ジオン公国軍残党が組織した「デラーズ・フリート」に強奪されてしまう。

奪われた試作2号機をとり戻すため、もう1機の「ガンダム試作1号機」を駆使しながら、アルビオンの追撃任務は開始された。

これがのちに、「星の屑作戦」と呼ばれる物語のはじまりである。

## Phraseology

### ■ アナハイム・エレクトロニクス社

月を拠点とする兵器企業。地球連邦軍のモビルスーツ製造に関わっているほか、ジオン公国軍側ともつながりが深い。いわゆる「死の商人」と噂されている。

### ■ ガンダム開発計画

地球連邦軍が、アナハイム・エレクトロニクス社と共同で進めた計画。接収したジオン公国軍と、地球連邦軍のモビルスーツ技術を融合させ、新世代の「ガンダム」を試作した。この計画のガンダムは、通称G Pシリーズと呼ばれる。

### ■ アトミック・バズーカ

「ガンダム試作2号機」に装備された武器。文字通り、核弾頭を発射するバズーカで、その威力は戦略核レベルである。

### ■ デラーズ・フリート

ジオン公国総帥ギレン・ザビの信任厚かったエギーユ・デラーズが、「一年戦争」敗北後、結成した残党組織。「茨の園」と呼ばれる宇宙基地を本拠地とし、小規模ながらモビルスーツの生産もしている。

### ■ 一年戦争

宇宙世紀0079年に、ジオン公国と地球連邦のあいだで起こった戦争。開戦から終戦までが一年だったことから、こう呼ばれている。

### ■ ソロモンの悪夢

ジオン公国軍のアナベル・ガトーが、「一年戦争」で宇宙要塞「ソロモン」戦のおりに見せた活躍から、畏怖の念をこめてつけられた異名。

「ソロモンの悪夢」に挑んだ新米テストパイロット

# ガンダム試作1号機VS.ガンダム試作2号機

## ■強奪を阻止すべくガンダムに乗りこむ

オーストラリアにある地球連邦軍基地「トリントン」で、ジオン公国軍を名乗るものによって、1機のモビルスーツが奪われた。

盗まれた「ガンダム試作2号機」は、大量破壊兵器である核弾頭を発射する武器、アトミック・バズーカを装備する機体だった。

しかも、試作2号機はテスト用に核弾頭を装填した直後という最悪のタイミングで、強奪されてしまう。

この現場に居合わせた連邦軍の新米テストパイロット、コウ・ウラキは、強奪を阻止すべく、同じくテスト用に搬入されていた「ガンダム試作1号機」に乗りこんだ。だが、操縦するパイロットの技量も経験も、大きな差があった。

わずかな手合わせののち、試作2号機のパイロットは「私を敵に回すには、キミ

第1話  
「ガンダム強奪」

第2話  
「終わりなき追撃」

「ガンダム」強奪を阻止しようと戦う実戦経験ゼロの新米コウ・ウラキの相手は、教本に載るほどの撃墜王だった。



はまだ未熟！」と、通信したうえ、圧倒的優位にもかかわらず、その場をあとにする。

残されたコウは、遠距離攻撃用モビルスーツ「ザメル」の放ったミサイルの雨を見て、初めての实战の恐怖に震えるしかなかった。

### ■一矢むくいた追撃戦

コウは、そのまま試作2号機追撃のため、先の大戦「一年戦争」を戦ったベラン兵士のサウス・バニングの指揮下に、くわわった。

夜戦だったため、敵がどこから現れるのかわからないという過酷な状況に恐怖を覚えるコウだったが、試作2号機を搭載して宇宙へと脱出し

ようとした大気圏突入カプセル「コムサイ」の撃破に成功。試作2号機の宇宙への逃走を阻止するという金星をあげた。

だが、安堵したのもつかの間、コムサイの爆発から逃れた試作2号機との戦いになってしまう。

そして、この戦いで、試作2号機を強奪した男こそ、ジオン軍の伝説のエース、「ソロモンの悪夢」と恐れられたアナベル・ガトーだと知るのだった。

しかし、試作2号機強奪が最優先であったガトーは、次の脱出の手段として用意していた潜水艦「ユークン」と合流するため、またしてもコウとの決着をつけることなく、混乱する戦場をあとにした。

### ■危機一髪のところを勝利の女神の声で救われる

ユークンから発進した回収艇と接触するため、深い霧のなかで待ち受けるガトー。こうしてはじまった三度目の戦いで、ついに本気で戦ったガトーは、実戦経験の差を見せつけるように、コウを圧倒する。



映像通信で余裕を見せるガトー。コウが今後、宿敵として成長するとは微塵にも思わなかっただろう。



本来、盾は敵の攻撃を受けるためのものだが、試作2号機の盾は核攻撃での使用目的のほうが重要なのだ。

そして試作2号機のビーム・サーベルが振り降ろされ、最期のときを覚悟した瞬間、コウは勝利の女神の声を聞く。

「盾です！ 2号機の冷却装置を狙って!!」。その声は、2機のガンダムを開発した月の軍事企業、アナハイム・エレクトロニクス社から、ガンダムのテストに同行していた開発担当者のニナ・パーブルトンだった。

その声を聞いたコウは、即座に試作2号機の盾にビーム・サーベルを突き刺す。

小爆発を起こす試作2号機の盾。それを見たガトーは驚愕する。試作2号機の盾は核攻撃を行うさいに、自機を守る冷却装置の役目をもっていたのだ。

もし、盾が失われれば、核攻撃は不可能となってしまう。ガトーはそれを恐れたのだった。

そこへ到着したユーコンからの回収艇に飛び乗って、戦場をあとにするガトーの試作2号機。

こうして、「ソロモンの悪夢」を相手に三度の戦闘を乗り越えたコウであったが、結果的には試作2号機の強奪を阻止できなかった屈辱に、その心は晴れなかった。

歴戦の知将同士の読み合いとなった部隊戦

# アルビオン部隊VS.キンブライト部隊

## ■裏の裏まで読んだ知略戦

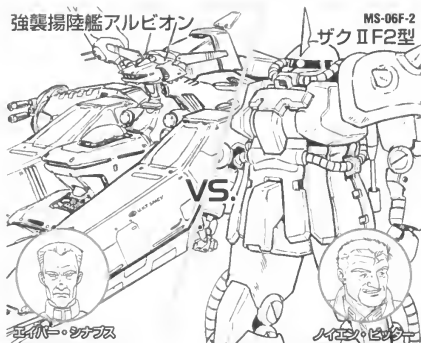
奪われた「ガンダム試作2号機」を追って、アフリカへやってきた地球連邦軍の強襲揚陸艦「アルビオン」だが、その潜伏先までは掴めていなかった。

あるとき、アルビオンに同乗していた、アナハイム・エレクトロニクス社の技術員ニック・オービルが、ジオン公国軍のスパイであることが発覚する。そこで、アルビオンの艦長エイパー・シナプスは、オービルをわざと逃亡させ、そのあとをつけて、試作2号機の潜伏している基地の場所を突き止めようとした。予想通り、オービルを追うと、アフリカのダイヤモンド鉱山跡に建造された基地「キンブライト」の「ザクⅡF2型」部隊が現れ、アルビオンのモビルスーツ部隊と交戦する。

このとき、アルビオンのモビルスーツ部隊の指揮をとっていたベルナルド・モンシアは、地球連邦軍のモビルスーツに標準装備されていたビーム兵器の射程の長さ

### 第4話 「熱砂の攻防戦」

奪われた「ガンダム試作2号機」を追う、強襲揚陸艦「アルビオン」。その途中のアフリカで、息をのむような知略戦がはじまる。



を生かし、射程の短い実弾兵器しか装備していなかったザク部隊を後退させ、その基地へ案内させようとした。

その目論みは見事に成功。後退するザク部隊を追ったモンシアだったが、そこには敵の別働部隊である「ドム」部隊が待ち伏せしていた。

それはシナプスの作戦を読んだ、キンバライト基地の司令官、ノイエ・ビッターの作戦だった。

基地の所在を突き止められぬよう、あらかじめ用意した別の場所へアルビオン部隊を誘いこんでいたのである。

だが、この策をあらかじめ予測していたシナプスは、温存していたモ

ビルスーツ部隊とともに、オービルの当初、逃走していた方向にある鉾山跡へと向かう。

しかし、この動きをも予測していたビッターは、自ら専用のザクへ乗りこむと、基地に残っていた全モビルスーツとともに、アルビオンに対して最後の攻撃へと向かうのだった。

一方、遠く離れた場所で足止めをくらって、完全な膠着状態となっていたモンシア隊だったが、「ガンダム試作1号機」に乗ったコウ・ウラキの爆発的ともいえる突破力で、一気に勝負を決着させる。

このコウの働きに、モンシアも、その実力を認めはじめたのだった。

### ■アルビオンの危機を救ったガンダム試作1号機

ビッターの指揮のもと、数で勝るとはいえ旧型であるキンバライト基地のモビルスーツ部隊は、アルビオンの最新鋭のモビルスーツを圧倒する。

そして、戦いのさなか、キンバライト基地から噴煙があがった。それは宇宙へと



ビーム兵器を搭載したジオン軍のモビルスーツは少ない。遠距離の射撃戦は大きなプレッシャーとなる。





戦略ではシナプスを圧倒したビッター。しかし、最後はモビルスーツの性能差を読み切れず敗北する。

試作2号機を打ちあげるため、今まさに発進しようとするスペースシャトル「HLV」だった。あわててHLVの撃墜を命令するシナプスだったが、その一撃はむなしくも外れ、宇宙への逃走を許してしまう。

今一歩およばずに、意気消沈するアルビオンのクルー。だが、そこへ間髪入れずに、ビッターのザクが、切り札であるロケットブースターを使用した。

この効果によって、一時的に空を飛んだビッターのザクが、アルビオンの艦橋に

ザク・マシンガンの照準を合わせる。

恐怖に固まるアルビオンのクルーたち。

しかし、ビッターのザクは、駆けつけたコウの試作1号機によって間一髪のところまで撃破され、ことなきをえるのだった。

こうして戦いが終わり、指揮官と、戦力であるすべてのモビルスーツを失って、白旗をあげたキンバライト基地のジオン兵たち。

戦うべき敵の姿をはじめて目の当たりにしたコウは、改めて敵の存在というものを自覚するのであった。

歴戦の女戦士、シーマ・ガラハウの強襲

# ガンダム試作1号機 VS. シーマ専用ゲルググM

## ■ジオン公国軍の元海兵隊シーマ・ガラハウ見参

逃走した「ガンダム試作2号機」を探すため、宇宙へと向かった地球連邦軍の強襲揚陸艦「アルビオン」。その行く手を阻むべく、ジオン公国軍の海兵隊だった、シーマ・ガラハウ率いる部隊が戦闘をしかけてくる。

アルビオンの戦力は、宇宙で合流した巡洋艦「サラミス」2隻をくわえていた。だが、シーマは自分の實力を見せつけるため、母艦の機動巡洋艦「リリー・マルレーン」と、「ゲルググM」部隊のみで挑戦してきた。

シーマの強襲に対応して、アルビオンのモビルスーツ部隊は、艦の前方からかなり離れた位置に防衛線をはり、戦艦の数が多いことを利用して、艦砲戦の態勢に入った。当然、これを読んでいたゲルググ部隊は、何とかふところに飛びこもうと果敢に攻め入るが、先の大戦末期に開発されたゲルググにくらべ、アルビオンのモビ

### 第5話 「ガンダム、星の海へ」

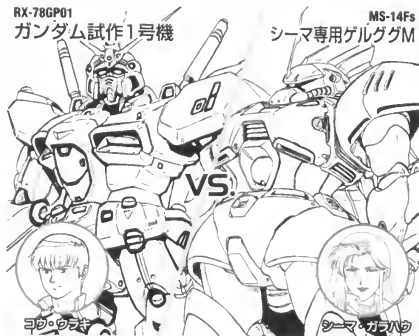
地上用である「ガンダム試作1号機」で、宇宙戦に出撃するコウ・ウラキ。当然まともに動けず、ゲルググMに攻めたてられる。

RX-78GP01

ガンダム試作1号機

MS-14Fs

シーマ専用ゲルググM



ルスーツ部隊は最新鋭の機体。なかなか戦線を突破できず、戦闘は膠着状態に入る。

このとき、戦況をブリッジで見ていたシーマの扇がピタリと止まった。そして、おもむろに立ちあがると、無言でブリッジから出ていく。

これを見ていた副官のデトローフ・コッセルは、すぐさまシーマのモビルスーツを準備するよう命令した。長年、一緒に戦ってきたものだけにがもつ阿吽の呼吸。シーマは、この膠着状態を打開すべく、専用のゲルググMで前線へと向かった。

前線へと到着したシーマは、簡単に防衛線を突破。無防備な艦隊のふところへすぐさま飛び込んだ。

「よりどりみどり…」と、つぶやくシーマ。言葉どおり、シーマたちゲルググM部隊はアルピオンの僚艦を沈めていく。

## ■宇宙で女豹にいたぶられる試作1号機

このとき、アルピオンで待機していたパイロットはコウ・ウラキのみ。理由は、乗機である「ガンダム試作1号機」は地上用の機体であり、宇宙では「ジム」以下の機動性しかもたなかったからである。そこで、足のケガで戦えないサウンス・バニングの「ジム・カスタム」で出撃の準備をしていたのだが、

コウは無謀にも試作1号機で出撃してしまう。原因は、戦闘の直前に起こった、ガンダム開発担当者のニナ・パールトンとのささいなケンカだった。ガンダムのパイロットとしてニナに認めてもらいたい。その思いが、コウの判断を誤らせたのだ。出撃したものの、宇宙空間で満足な姿勢制御もできず、ヨタヨタとただよう試作1号機。そのように、ほくそ笑むゲルググMのパイロットだったが、流れ弾のようなビーム・ライフルの直撃を受けて撃破されてしまう。



易々とモンシアの攻撃をかわし、突破するシーマのゲルググM。パイロットとしての優秀さがわかる。



シーマの攻撃にボロボロになっていく試作1号機。  
撃破されないのは、ガンダムの性能ゆえだ。

それを見て、シーマは激怒した。こんな動きしかできないモビルスーツに撃破された部下の不甲斐なさと、こんな状態で出撃した試作1号機に対してである。

まるで猫がネズミをいたぶるように、試作1号機を滅多打ちにするシーマのゲルグM。盾を、左腕を、右肩を失っていく試作1号機。しかし、やがてシーマの顔から余裕が消えた。これだけの攻撃をくわえても、一向に試作1号機が撃破できないからだ。それはガンダムの装甲の厚さゆえだが、一方なかのコウには、死に匹敵する苦しみをあたえていた。

やがて、この危機を救いに1機のジム・カスタムが駆けつける。それは、コウを助けるため、ケガをおして出撃したバニングの機体だった。バニングに部下のゲルグMを撃破されたシーマは、これ以上の戦闘は不利と考えて撤退を命令する。

こうして戦いは終わった。だが、コウの使命はまだ終わってはいない。機密であり、貴重である試作1号機を脱出することなくアルビオンへと着艦させることだ。そのコウの傷ついた姿を見てニナは、自分のコウへの気もちに気づくのだった。

己の実力を知らしめるべくガンダムに挑んだ夏腕ファイター

# ガンダム試作1号機フルバーニアンVS.ヴァルヴァロ

## ■因縁の再会

先の戦いで大破した「ガンダム試作1号機」の修理および宇宙仕様への変更のため、月面都市「フォン・ブラウン」へと立ちよった地球連邦軍の強襲揚陸艦「アルビオン」。そこへ1機のモビルアーマーが、ガンダムを名指しして勝負を挑んできた。そのモビルアーマー「ヴァル・ヴァロ」のパイロットは、ケリイ・レズナー。「一年戦争」で左腕を失い、パイロットとしての資格を奪われた男である。

だが、ケリイの心には、いまだ戦いへの闘志が消えていなかった。宇宙のゴミを回収するジャンク屋にその身をやつしながらも、ヴァル・ヴァロの修理を続け、右腕一本でも操縦できるようにして、修復作業を完成させたのである。

しかし、パイロットに復帰しようとするケリイに接触してきた「デラーズ・フリート」の使者、シーマ・ガラハウは、片腕のパイロットはいらないと、代わりのパ

## 第7話 「蒼く輝く炎で」

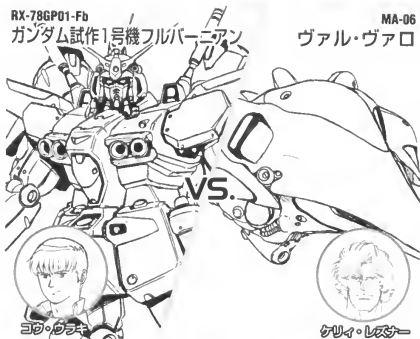
宇宙用に改修された「ガンダム試作1号機フルバーニアン」。この機体での初戦闘は、顔見知りとの初めての闘いでもあった。

RX-78GP01-Fb

ガンダム試作1号機フルバーニアン

MA-06

ヴァル・ヴァロ



イロットを用意していた。それを知ったケリーは激怒。自分の実力を知らしめるため、ガンダムへ勝負を挑んだ。

一方、宇宙用に改修作業が終わった、「ガンダム試作1号機フルバーニアン」。パイロットのコウ・ウラキは、このヴァル・ヴァロの接近に驚愕した。なぜなら、彼はケリーを知っていたからである。

月に到着して間もないころ、前回の戦いで、ガンダムを大破させたことに責任を感じていたコウは、自暴自棄になっていた。

そんなコウが偶然出会ったのが、ジャンク屋であるケリーだった。

コウは、ケリーが敵になるかもしれ

れないことを知りながらも、その生き方に共感。ヴァロ・ヴォロを修理するケリイを手伝いながら自分をとり戻し、戦うことの意義を感じとっていたのだ。いつかこうなることを覚悟していたコウだったが、そのときがこんなに早くきてしまうとは思わなかったのだ。

### ■避けられなかった激闘の悲しい結末

この皮肉な運命に驚いたのは、ケリイも・緒だった。しかし、自ら戦士であることを求めたケリイに迷いはない。

攻撃を躊躇するコウに対して、容赦なくメガ粒子砲を撃ち、その熱でフルバーニアンの盾を溶かしてしまいうヴァル・ヴァロ。さらにケリイは、ヴァル・ヴァロの秘密兵器ともいえる、プラズマ・リーダーを発射した。

フルバーニアンの周囲の地面に突き刺さった3機のプラズマ・リーダーは展開して、プラズマ結界を構築。中にいるものに容赦ない攻撃をしかける。

勝負は決したかに見えたが、ここへ戦いをやめさせようと、ニナ・パーブルトン



コウが一瞬、不発弾と勘違いしたことから、プラズマ・リーダーの存在は秘密とされていたようだ





不利な状況を逆転させたコウの奇策。その瞬間的発想は、パイロットとして天賦のものなのだろう。

が飛びこんできた。ニナもケリイのことを知っており、なんとかこの無益な戦いを止めたかったのだ。だが予期せぬ流れ弾が、ニナの乗ったホバーを直撃。ホバーから投げ出されたニナを見たコウの闘志に火をつける。

僚友チャック・キースの乗る「ジム・キャノンⅡ」の援護射撃で、プラズマ結界を脱出したコウは、果敢にビーム・ライフルを連射する。

しかし、装甲の厚いモビルアーマーには、遠距離からの攻撃は通用しない。そこでコウは、接近戦をこころみる。

だが、接近したフルバーニアンを、ヴァル・ヴァロのクローがとらえた。

追いつめられたコウは、コア・システムを生かし、下半身であるBパーツを分離。上半身だけでヴァル・ヴァロの動力部にビーム・サーベルを突き刺す。脱出をすすめるコウに、ケリイは脱出装置をつけなかったことを告白。

捕らえたフルバーニアンの下半身を返し、後悔はなかったといいながら、ヴァル・ヴァロと運命をとみにした。

地球連邦軍に壊滅的ダメージを与えた「ソロモンの悪夢」の一撃

# ガンダム試作2号機VS.地球連邦軍艦隊

## ■ついに「星の屑作戦」が本格始動

「コンベイトウ」。かつてのジオン公国軍の拠点、宇宙要塞「ソロモン」が、「一年戦争」で地球連邦軍に制圧され、新たにつけられた名前である。

この因縁の場所で、連邦軍は観艦式を行っていた。連邦軍が戦後、いかに復興したかを誇示する目的だったが、ジオン軍の残党「デラーズ・フリート」が決起した今、それに対する威嚇の意味も兼ねての式典だった。

式典の観閲官に選ばれたグリーン・ワイアットは、紅茶を楽しむ余裕を見せながら、観艦式をはじめた。

ここに集結した連邦軍艦隊がその気になれば、残党でしかないデラーズ・フリートなど、一網打尽だと思っていたからである。

事実、この観艦式を襲撃した敵モビルスーツの撃破数はすでに30機を超えていた。

## 第9話 「ソロモンの悪夢」

ジオン公国軍残党「デラーズ・フリート」は、「星の屑作戦」を始動。そしてアナベル・ガトーは、アトミック・バズーカを放つ。



もはやデラーズ・フリートのことなど、ワイアットの頭のなかにはなかった。

しかし、この観艦式を襲撃すべく、準備を進める者たちがいた。

このときのために、「ガンダム試作2号機」を強奪した、アナベル・ガトー率いる艦隊である。

準備を整えたガトーは出撃すると、副官であるウィリイ・グラードルに信号弾を打ちあげるよう要請した。この言葉に、グラードルは狼狽する。

今回の作戦の成否は奇襲にかかっているといっても過言ではない。信号弾など打ちあげれば、敵を警戒させるだけだからだ。

だが、この意見をガトーは聞き入れなかった。

こんなことで失敗するようでは、天は自分に味方をしない、そういうきつたガトーの心に應えるように、グラードルは信号弾を打ちあげた。信号弾の光を見て、戦意を高揚させる兵士たち。

兵士たちの士気があがったことを満足げに確認すると、ガトーは進軍を開始した。

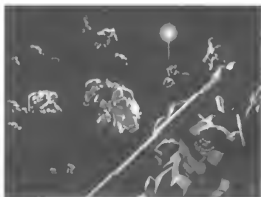
### ■アナベル・ガトーの屈辱をこめた一撃

ガトーの試作2号機を目的地向かわせるため、陽動として、各地で戦闘を開始するデラーズ・フリ

ートのモビルスーツ部隊。この行動を、観艦式を妨害しようとするデラーズ・フリートの作戦だと誤認した連邦軍は、「ジム」の大部隊を各方面に投入する。それはガトーを追っていた、強襲揚陸艦「アルビオン」も一緒だった。

だが、このときガトーは、一年戦争の残骸がただよう暗礁宙域を、僚機の「リック・ドムⅡ」とともに進んでいた。

何事もなくコンペイトウの付近まで接近したガトーだったが、突然、護衛のリッ



信号弾の光を見て、いっせいに明るい表情になる兵士たち。士気を優先したガトーの名采配だ。



背部の核弾頭と、盾から出した砲身をドッキングさせると、アトミック・バズーカは発射形態になる。

ク・ドムⅡが撃墜される。それはオートコントロールによる自動砲台の攻撃だった。即座に破壊したが、ガトーの位置はこれによって連邦軍に知られてしまう。

ガトーの位置を知って、あわてて駆けつけるジムの大部隊。それを蹴散らしながら進むガトーに、一年戦争時代からの部下であるカリウスは、ここは自分にまかせて先に向かうようにいった。コンベイトウではなく、ソロモンへと。

その言葉を聞いたガトーは、敵に目もくれず、ひたすら予定されたポイントに向かう。ワイアットが乗りこむ、観艦式を中心である旗艦「バーミンガム」を、照準にとらえられるポイントへと。そして、たどり着いた試作2号機は、ついにその真価である、大量破壊兵器、アトミック・バズーカの封印を解除した。

「再びジオンの理想をかがげるために、『星の屑』成就のために、ソロモンよ、私は帰ってきた！」

3年間の屈辱をこめたガトーの一撃が、観艦式に集まった連邦軍艦艇を核の光で包む。

その被害は、連邦宇宙軍に壊滅的なダメージを与えたといっても過言ではなかった。

死闘を繰り返す兄弟ガンダム

# ガンダム試作1号機フルバニテンVS.ガンダム試作2号機

## ■アトミック・バズーカの一撃が新たな因縁を生む

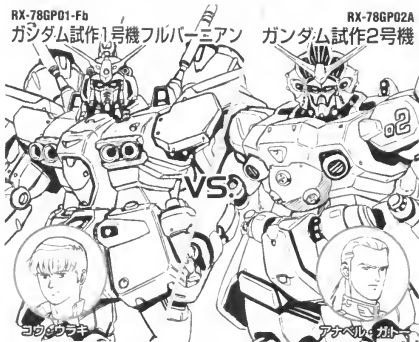
たった1機のモビルスーツ「ガンダム試作2号機」で、地球連邦軍艦隊に壊滅的なダメージを与えた「ソロモンの悪夢」こと、アナベル・ガトー。それは、前大戦「二年戦争」で最大にして最後の激戦となった宇宙要塞「ア・バオア・クー」戦での無念の撤退から、3年にもわたった屈辱の日々をそそぐには十分な戦果だった。

ガトーの心は、大事をなした充足感に満ちあふれていたが、今はまだ作戦の途中。ジオン公国軍残党「デラーズ・フリート」の最初にして最後の一大作戦、「星の屑作戦」完遂のために気を引き締め、混乱する戦場をあとにした。

一方、この惨状を目の当たりにして、呆然としている男がいた。オーストラリアの地球連邦軍基地「トリントン」にて、ガトーに試作2号機を強奪されて以来、彼を追い続けてきたコウ・ウラキである。コウは、この惨劇を止められなかった自分

### 第10話 「激突戦域」

3年間の屈辱を晴らした「ソロモンの悪夢」アナベル・ガトーに、雪辱戦を挑むコウ・ウラキ。「ガンダム」同士の戦いはじまる。



を責めると同時に、ガトーに対し、激しい怒りを感じていた。

積年の屈辱をそそいだ男と、新たに屈辱を受けた男。正反対の思いをいだく、ふたりの男の戦いは、こうしてはじまった。

### ■死闘、試作1号機対試作2号機

核攻撃が終わり、もう使用することのないだろうアトミック・バズーカを捨てた試作2号機。

予想外のダメージだったのか、その左腕はトラブルにより、稼働不能になっていた。

そこへ、コウの操縦する「ガンダム試作1号機フルバーニアン」が駆けつける。連射されるビーム・ライ

フルの銃弾をかわす試作2号機に、通信が送られてくる。それはコウの声だった。

その声のもち主が、試作2号機強奪のさいに自分を邪魔した連邦軍の新米兵士だと思いだしたガトーは、コウがここまでできたことに苦笑いしながら、またしても自分の前に立ちふさがったことに怒りの表情を見せる。

そして、バルカン砲を連射して間合いをつめると、戦闘で破壊された残骸へと隠れた。

身をひそめながら、予備のビーム・サーベルの1本を投げ、その反対へと動く試作2号機。投げられたビーム・サーベルに反応してしまったコウの隙をつき、試作2号機はもう1本のビーム・サーベルで、フルバーニアンに斬りかかる。

間一髪、反応できたコウは、ビーム・ライフルに装備された小型ビーム・サーベル「ジュッテ」で、試作2号機の一撃をなんとか受け止めた。だが、これによって、ビーム・ライフルは破壊され、フルバーニアンは、試作2号機より優位だった射程の長さを失ってしまう。



運動性では試作2号機に勝るフルバーニアン。ビーム・ライフルを失いながらも、果敢に攻める。





近接用の武器しかない試作2号機だが、その短所を長所に変えるガトーのテクニクはさすがである。

しかし、このわずかな斬り合いで、ガトーはコウが短期間に戦士として成長したことに気づいた。それがガトーに、ある種の興味をもたせる。ガトーは通信を送ってくるコウに、通信を返した。

驚くコウにガトーは言う、「怨恨のみで戦いを支えるものに私は倒せぬ。私は義によって立っているからな!」と。その言葉を体現するかのように、容赦なくフルバーニアンに攻撃をくわえる試作2号機。

ビーム・サーベルとバルカン砲を組み合わせた、見事な近接戦闘のコンビネーションで追いつめられるフルバーニアン。

この攻撃のなか、コウは試作2号機の左腕が動かないことに気づく。

そこで相打ち覚悟で、試作2号機のビーム・サーベルを盾で受け止めると、フルバーニアンはビーム・サーベルを相手の左肩めがけて貫いた。

小爆発を起こして、試作2号機の左腕は盾ごと四散する。この一撃にガトーは、相手の力量を見誤った、己の甘さを感じるのだった。

## ■新たな戦いの幕明け

コウの実力を認めたガトーから、余裕の表情が消えた。全力をもって攻撃をしかける試作2号機に、次第に押されていくフルバーニアン。

だが、メインカメラを破壊されながらも、なんとかコウは嵐のようなこの攻撃に耐えていた。

そして、ガトーはここで決着をつけるべく、ビーム・サーベルの出力を一気に最大まであげた。

破壊力を増したそのビーム・サーベルの前に、フルバーニアンは試作2号機の右足を斬り落とすながらもつばぜり合いの状態にもつていかれてしまう。

このままではやられる。そう思ったコウは、ギリギリとせまる試作2号機のビーム・サーベルを、あえてフルバーニアンの左肩に受け、同時に胸部バーニアを全開し、目くらましにすると、一気にビーム・サーベルで試作2号機の頭部を貫いた。

この一撃により、フルバーニアンと試作2号機の各部に小爆発が起こる。結果、この激闘は、相討ちに終わった。



コウの、追いつめられたときに発揮する瞬間的な状況判断力。これにはガトーも驚愕する。



本来は兄弟機として活躍するはずだった2機のガンダム。その最後は、新たな戦いの幕開けだった。

本来は、脱出装置も兼ねている小型戦闘機「コア・ファイターⅡ」で脱出できるフルバーニアンだが、損傷があまりにも大きいため、その機能は作動せず、コウは自力でコクピットから脱出しようとする。

だが、コクピットハッチを開けたそこには、試作2号機から脱出したガトーもいた。あまりのことに一瞬動きが止まるコウ。そのコウを押さえつけるようにして、ガトーが真空である宇宙空間で唯一、言葉が伝えることができる接触回線で話しかけてきた。「確かウラキとかいったな……、二度と忘れん」そう言くと、ガトーは離れていった。

予想外のことに、呆気にとられるコウ。やがてガンダム2機が、本格的に爆発しはじめた。その爆風に吹き飛ばされながらも、コウは僚友であるチャック・キースの「ジム・キャノンⅡ」に救助される。

同じくガトーも、急を知って駆けつけた部下カリウスの「リック・ドムⅡ」の救援を受けた。2機のガンダムが失われ、まるで長い戦いが終わったかのようにだったが、コウは、これがまだはじまりでしかないという予感があった。

圧倒的戦闘力をもつモビルアーマー同士の戦い

# ガンダム試作3号機VS.ノイエ・ジール

## ■地球連邦軍の最後の希望は、コウ・ウラキに託された

ジオン公国軍の残党「デラーズ・フリート」の一大作戦「星の屑作戦」とは、巨大なスペース・コロニーを地球へと落とす「コロニー落とし」だった。

この作戦のためにデラーズ・フリートは、地球連邦軍の観艦式を核攻撃で襲撃、その戦力のほとんどを壊滅させた。

さらに、コロニーを月へ落とすように見せかけ、残った艦艇も燃料切れで追いつけなくさせる。コロニーを追撃できたのは、別行動をとっていた強襲揚陸艦「アルビオン」1隻だけだった。

このような絶望的な状況ではあったが、アルビオンにはたったひとつの希望が残されていた。それは拠点防衛用に開発されたモビルアーマー「ガンダム試作3号機」(コードネームは、デンドロビウム)である。

### 第12話

#### 「強襲、阻止限界点」

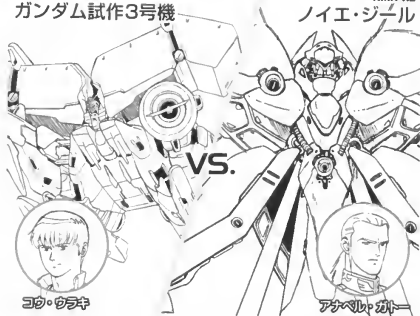
両軍の勝敗を決する史上初の巨大モビルアーマー戦は、宿命ともいえるコウ・ウラキとアナベル・ガトーの対決となった。

RX-78GP03

ガンダム試作3号機

AMA-X2

ノイエ・ジール



コウ・ウラキ

アナベル・ガト

並みのモビルアーマーをも凌駕する、その突破力は、今回のような任務に最適の機体だといえた。

しかし、その戦闘力ゆえ、コントロールするためにはパイロットに高い操縦技術が必要なばかりか、肉体的にも精神的にも大きな負担がかかる。急速にパイロットとしての技量をあげたコウ・ウラキでさえ、この試作3号機の操縦は、容易なものではなかったのだ。

### ■ 圧巻のモビルアーマー戦

その性能を生かし、単独でコロニーを追って、戦線へと突入した試作3号機。その姿を見て意表を突かれながらも、デラーズ・フリートの兵

士たちは、しよせんは大きいだけとたかをくくった。

だが、次の瞬間、巨大な武器コンテナから、三角柱の塊が射出された。それは敵モビルスーツのど真んなかに突っ込むと、まるで雨のように大量のミサイルをばらまく。

一瞬にして撃墜される数機のモビルスーツ。たとえ1機であっても、モビルスーツ1個大隊と互角に渡りあう戦闘力をもつ機動兵器、それが試作3号機だった。

しかし、やがて敵の動きに変化がおとずれる。急速に撤退していく敵モビルスーツに、コウは強敵の出現を予感した。

やがてビームの雨とともに、ゆつくりとそれは現れた。デラース・フリートと同じく、ジオン軍残党組織である「アクシズ」で開発された、モビルアーマー「ノイエ・ジール」だ。パイロットは「ソロモンの悪夢」ことアナベル・ガトー。

コウもガトーも、もはや言葉を交わさずとも、お互いの存在を確信した。それは戦場で培った卓越した直感が教えているのだろう。



試作3号機は、武器満載の武装機と、本体のガンダム試作3号機ステイメンが合体した形態のこと。



ガトーいわく、ジオンの精神が形になったノイエ・ジール。その戦闘力は試作3号機とほぼ互角だ。

まずはノイエ・ジールのビーム砲が、試作3号機に直撃する。並みのモビルスーツなら撃破されているであろう。一撃だが、試作3号機に装備されたビーム・バリアー、Iフィールドによって、無効化されてしまう。

驚くガトーのノイエ・ジールに、今度は試作3号機のメガ・ビーム砲が直撃した。だが、これもIフィールドによって無効化されてしまう。

奇しくも、設計思想が似ているこの両機には、互いにビームを無効化するIフィールドが装備されていたのだ。

こうなると勝負はビームではなく、実弾兵器の数で決まる。ビーム兵器主体のノイエ・ジールにくらべ、試作3号機にはミサイルをはじめ、バズーカなどの実弾兵器が豊富に装備されている。

だが、この戦いのまえに大量のモビルスーツと戦っていた試作3号機に、それほど多くの残骸は残されていないかった。遅れて戦場に駆けつけたアルビオンから、補給のため一時撤退命令が下される。

コウは悔しさを押し殺しながら、ガトーとの決着をつけることなく、戦場をあとにするのだった。

宿敵ふたりかのぞんだ最後の決闘

# ガンダム試作3号機VS.ノイエ・ジール

## 第13話 「駆け抜ける嵐」

発覚した、コロニー落とし計画。両軍で、その攻防戦がはじまる。しかし、ふたりの戦いは、もはや戦争でなく決闘となった。

### ■ニナ・パープルトンの意外な過去

ジオン公国残党軍「デラーズ・フリート」から、地球連邦軍に寝返ったシーマ・ガラハウ。そのシーマの密告によつて、対コロニー落とし用兵器として用意された、熱線破壊兵器「ソーラ・システムⅡ」。このさま変わりした戦場で、コウ・ウラキは軍規ではなく、自分の意志で戦いはじめていた。

寝返ったシーマから「おまえはいったいどっちの味方だ!」と、言われながらもコウは、コロニー落としを阻止するため、獅子奮迅の動きを見せる

一方のアナベル・ガトーも、シーマによつて殺されたデラーズ・フリートの指導者エギーユ・デラーズの意志を継ぎ、コロニー落としを完遂しようと、ソーラ・システムⅡのコントロール船を撃破、コロニー破壊を阻止する。そして最後の仕上げの最終軌道調整を行うため、落ちゆくコロニーのコントロール室に向かった。

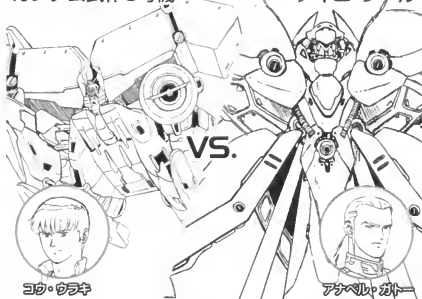


RX-78GP03

ガンダム試作3号機

AMA-X2

ノイエ・ジール



そこでガトーは、かつての恋人ニナ・パープルトンと再会する。ニナは、ガトーを止めようと先回りしていたのだ。そこへ一発の銃声とともに、コウがやってきた。コウの放った銃弾を脇腹に受けながらも、ガトーは姿勢制御用のバーニアに点火して、最後の仕上げを成しとげる。

すべてを終えたガトーは、あえて撃たれる覚悟でコウの前に立つ。だが、そのコウをニナが止める。ニナとガトーの関係を知らないコウにとって、理解しがたい光景だった。

コウの必死の説得もむなしく、傷ついたガトーと去っていくニナ。その姿を見てコウは、怒りとも悲しみともとれる絶叫をあげていた。

## ■戦士としてのけじめ

傷心のまま、コロニーから脱出したコウの「ガンダム試作3号機」を待っていたのは、ガトーの「ノイエ・ジール」だった。

ガトーは、ニナを部下に託して、この戦場から脱出させると、自らはコウと決着をつけるために残っていたのだ。しかも今、脱出しなければ、連邦軍の増援にはさまれて脱出不可能になってしまう。

こうしてコウとガトーの最後の戦いは、戦争という戦いではなく、戦士として決着をつけるために開始された。

ここまでの激戦で、お互いに「フィールドをはじめ、武装のほとんどを失った試作3号機とノイエ・ジールの戦いは、ビーム・サーベルの斬り合いからはじまった。だが、試作3号機の武装が少ないことを見切ったガトーは、残り少ないビーム砲で試作3号機の右腕部を破壊する。

さらに左腕部もクローアームでつぶしたガトーは、隠し腕である4本のサブアー



ビーム・サーベル戦は、ともに100メートルに近い巨大な機体だということを忘れてしまいそうになる。



決着はつかなかったが、敵の武装を見切るなど、ガトーの優勢勝ちはいないまいだろう。

ムで試作3号機にとりつき、本体である「ガンダム試作3号機ステイメン」への分離も封じた。

勝負あったと思われた瞬間、突然の光が2機を包んだ。それは出力を低下させながらも、再発射可能となったソーラ・システムⅡだった。

ガトーに邪魔されたことを、個人的な恨みに思った連邦軍司令官バスク・オムが、味方の艦隊をも巻きこんで放った狂気の光である。ソーラ・システムⅡの攻撃で意識を失ったコウが目をさますと、そこにガトーの姿はなかった。自分にとどめを刺さなかった真意はわからなかったが、コウは宿敵との戦いを邪魔したバスクへの怒りに、絶叫しながら当てもなくビーム・ライフルを放つ。

そのころガトーは戦場から脱出できずにいた仲間とともにいた。ひとりでも多く、この戦場から仲間を脱出させようと、ガトーは最後の抵抗をみせる。そして、いつしか閃光となって消えていった。

こうしてコウとガトーの戦いは、永遠に決着がつくことなく終わるのだった。

## 地球連邦軍が黙認することで起こったデラース紛争

ジオン公国軍残党「デラース・フリート」が、宇宙世紀0083年に実行した「星の屑作戦」の全容を知るものは少ない。

だが、この時期に地球連邦政府はすでに「一年戦争」の直接の戦災からは脱して、復興期に入っていた。それは地球連邦軍も同様で、「連邦軍再編計画」の一環として、「ガンダム開発計画」をはじめ、軍備増強も進んでいた。

こうした事情は、連邦政府のいきすぎた中央集権体制をよしとしていなかったスベースノイド（宇宙居住者）と、その自主独立を望む者にとっては、都合の悪いものだった。

しかし、この復興による数々の出来事を線で結ぶことによって、ある図式が見えてくる。それは連邦軍による宇宙での観艦式の挙行、ガンダム開発計画の一応の完成、くわえてコロニー公社（スベース・コロニーの建造企業）によるスベース・コロニーの移動。それらは偶然であったが、大規模テロを起こすための条件となっていたのである。必要なのはこれらの点をつなげる戦術と、それを成功させるための人員。これらをデラース・フリートは兼ね備えていた。

ただし、この作戦の成功には裏があった。デラース・フリートは、決して一枚岩でなかった連邦軍内部の派閥争いに利用され、意図的にその行動が黙認されていたのだ。そこには、軍需産業であるアナハイム・エレクトロニクス社の思惑も絡んでいたのだろう。もちろん、デラース・フリートをはじめとしたジオン軍残党の士気の高さが、この戦いを成功に導いた最大の要因だったことに間違いない。

だが、この仕組まれた動乱により、スペースノイドの独立が叫ばれるより先に、治安維持を名目とした連邦軍の地球至上主義者組織「ティターンズ」が結成され、スペースノイドの弾圧がはじまってしまう。

地球連邦軍本部「ジャブロー」ではなく、北米大陸穀倉地帯へコロニーを落とし、スペース・コロニーの農作物に頼らねばならない状況にして、スペースノイドの地位向上を図ったデラース・フリート。

それが逆効果になってしまおうとは、なんとも皮肉なことで、これをたんなる歴史のいたずらと片づけてしまっただけは、散っていった多くの英霊たちも浮かばれないことだろう。また、それらの事実を隠蔽する目的で、ガンダム開発計画が抹消されたことにより、この計画で生まれたさまざまな最新技術は連邦軍に残ることなく、アナハイム・エレクトロニクス社の独占となった。

これは4年後の大戦、「グリプス戦役」(機動戦士Zガンダム)に多大な影響を与えることになる。

編集	株式会社レッカ社 齊藤秀夫 安川溪
ライティング	サデスパー堀野 池上隆之 加々美利治 神北恵太 しろむらゆり 土屋俊一郎 破勢天輝 桃原郷
本文デザイン	和知久仁子
DTP	Design-Office OURS
プロデュース	越智秀樹 (PHP研究所)
協力	株式会社サンライズ

# 【主な参考文献】

『機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争 オリジナル・アニメ・ビデオ・フィルムコミック1〜2』、『機動戦士ガンダム第08MS小隊 映画「ミラズ・リポート」フィルムコミック&OVAシリーズ・ストーリーブック』（以上、旭屋出版）／『機動戦士ガンダム0079 カードビルダーパーフェクトガイド』（エンターブレイン）／『GUNDAM OFFICIALS U.C. 0079-0083 機動戦士ガンダム公式百科事典』皆川ゆか、『総解説ガンダム事典 ガンダムワールドU.C. 編』皆川ゆか（以上、講談社）／『別冊宝島1099号 僕たちの好きなガンダムDX』（宝島社）／『ガンダムの常識 一年戦争モビルスーツ大全』（双葉社）／『ホビージャパンMOOK 08小隊戦記1 機動戦士ガンダム第08MS小隊ビジュアルブック』、『ホビージャパンMOOK272 機動戦士ガンダム カードビルダー オールマテリアル』（以上、ホビージャパン）／『電撃データコレクション3 機動戦士ガンダム〜一年戦争外伝〜』、『機動戦士ガンダムMS大全集2003 MOBILE SUIT illustrated 2003』（以上、メディアワークス）

本書は、書き下ろし作品です。

## 編著者紹介

### 株式会社レッカ社 (かぶしきがいしゃ れっかしや)

編集プロダクション、1985年設立。ゲーム攻略本を中心にサノカ  
関連、ファッション系まで幅広く編集制作する。代表作としてレトロ  
バイブル『大百科シリーズ』(宝島社)や、シリーズ計600万部のメガ  
ヒット『ケータイ着メロ ドレミBOOK』(双葉社)などがある。『永遠  
のガンダム語録』(カンゼン)をはじめ、ガンダム関連本も多数編集制  
作。現在『ジュニアサノカを応援しよう!』を雑誌、ウェブ、ケー  
タイ公式サイトで展開中。

---

## PHP文庫 ガンダム合戦伝

一年戦争からデラーズ紛争まで

---

2009年4月17日 第1版第1刷

編著者	株式会社レッカ社
発行者	江口克彦
発行所	PHP研究所

東京本部 〒102-8331 千代田区三番町3番地10  
文庫出版部 ☎03-3239-6259(編集)  
普及一部 ☎03-3239-6233(販売)  
京都本部 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11

PHP INTERFACE <http://www.php.co.jp/>

印刷所	図書印刷株式会社
製本所	

---

西通・サンライス 2009 Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合は弊社制作管理部(☎03-3239-6226)へご連絡下さい  
送料弊社負担にてお取り替えいたします

ISBN978-4-569-67235-9

# ガンダムMS列伝

株式会社レック社 編著

ガンダム、百式、キュベレイ、サザビー……。『機動戦士ガンダム』シリーズ4作品に登場するモビルスーツ90体を列伝形式で収録！

定価680円  
(本体648円)  
税5%

# ガンダム「武器・防具」伝

株式会社レック社 編著

モビルスーツにとって不可欠な存在である武器と防具。ガンダムシリーズ6作品に登場する163アイテムをエピソードを中心に徹底解説

定価680円  
(本体648円)  
税5%



# ガンダム合戦伝

一年戦争からデラース紛争まで

株式会社レッカ社 編著



PHP文庫

# ガンダム合戦伝

・年戦争からデラーズ紛争まで

株式会社レッカ社 編著



PHP文庫





9784569672359

ISBN978-4-569-67235-9

C0179 ¥571E



1920179005714

定価：本体571円(税別)

## ガンダム合戦伝

一年戦争からデラース紛争まで

株式会社レッカ社 編著

「ガンダム」シリーズの見どころであるMS同士の対決シーン。そこにはMSの性能からパイロットの技量まで、様々な要素が凝縮されており、数々の名勝負を生み出した。本書は「ガンダム」シリーズ6作品から48のバトルを徹底解説。伝説となったガンダムVS.シャア専用ザクの初戦闘シーンや、ガンダム試作3号機とノイエ・ジールの壮絶な戦いなど、思い出の名場面が今甦る！ 文庫書き下ろし。



PHP文庫

株式会社  
レヰカ社

編著

ガ  
ン  
ダ  
ム  
合  
戦  
伝



PH  
文庫

れ  
2  
11

株式会社  
レックス  
社  
編著

ガンダム  
合戦伝



P  
H  
P  
文庫

571